（表紙）

忠朗
久儔

新編島津氏世錄支流系圖

島津兵庫忠朗一流系圖

忠朗

忠平　忠明　又八郎　兵庫

○元和二年丙辰十一月七日誕生、母鎌田播磨政重女、

○忠朗者　太守中納言家久公之二男也、

○同五年二月二十一日、爲質扈從　家久公、六月朔日、至京師登　二條城、奉謁

大樹秀忠公、其後至江府、

○同六年正月、以質登　玉城、伸年頭賀儀獻御太刀・馬代、奉見

將軍家、自茲歲至寛永二年、每年頭登　玉城奉祝之、拜禮獻品同于先、

○同七年正月二十四日、　家久公江府亭罹池魚災、公往以主日州佐土原城主島津右馬頭忠興家、忠朗亦奉從之、於是

將軍家以寢衣十・道服三賜于久朗、

○寛永二年、許質賜暇、故隨從　家久公登　玉城、奉謁

大將軍秀忠公、賜寶刀、同日登　西丸、拜謁

大納言家光公、惠給寶刀、其後　上使土井大炊頭利勝入來　家久公亭、賜龍蹄一匹・單衣五十・黃金百葉・白銀五百葉於忠朗、

家光公亦賜單衣三十・黃金三十枚・白銀百枚、

○同年五月二十六日、發江府同七月下著隅州加治木、

○同八年九月四日、　家久公賜隅州始羅郡加治木一萬石、

○同十三年、　家久公賜加治木士及給地七千六百餘石、以故總計一萬七千六百餘石全併領之、
○同十四年三月、爲質如江府、同十五年冬、任充歸國、其後又質江府三度也、
○延寶四年丙辰二月十六日病死、年六十四、法名僊島院傑心自英在家菩薩、

久薫

又八郎　兵庫

○寛永十年癸酉十一月十八日誕生、母島津中務忠榮女、
○同十八年首服、　太守光久公加冠、
○久薫爲質如江府數回、
○貞享三年丙寅正月十七日病死、年五十四、法名不二院雷峰一默大居士、

久孟

兵吉　伴兵衛

○母山田民部有榮女、
○伊集院右衛門久國後嗣、

久甫

權三郎　左京

○母同、
○穎娃右京久友後嗣、

久住

虎助　内匠　兵庫

○寛文元年辛丑八月十八日、誕生于江府芝第、母松平河内守定行女、
○久住　太守中將綱貴公之令弟也、
○同九年首服、　太守光久公加冠、且賜腰刀、町田勘解由忠代勤理髮、
○同十一年、扈從　綱久公初下著薩府、同年八月十五日、爲久薫之養子、同月二十七日、至加治木、
○元禄二年、供奉　太守綱貴公赴江府、同年四月二十六日、從　公登　玉城、拜謁大將軍綱吉公、奉獻御太刀一腰・馬代・時服、

久連

熊千代　内匠

○延寶八年庚申三月九日誕生、母穎娃左京久甫女、

○元禄元年十二月二十九日、　太守綱貴公渡御父久住之麗府宅、於是久連首服、　公加冠、島津市正忠弘勤理髪事、

○同十五年、　綱貴公參觀、爲一族扈從、同年四月二十八日、從　公登　柳營、奉拜大將軍綱吉公、獻上御太刀・馬代・時服、

○寶永元年十一月十三日、　太守吉貴公登　江城、禮謝家督之事、時爲一族扈從、奉見將軍家、奉獻御太刀・馬代・時服、

○正德二年壬辰七月二十八日、病死於加治木、享年三十三、法名瑞光院照久連珠大居士、

虎千代

早世、

○天和元年辛酉九月二十三日誕生、母同、

長熊

早世、

○天和三年癸亥正月九日誕生、母同、

久龜

熊助　助左衛門

○貞享元年甲子八月二日誕生、母同、

○元禄元年十月二十七日元服、　綱貴公加冠、島津助之丞忠守理髪之、

久（ママ）

彌吉

○貞享二年乙丑九月二十日誕生、母同、

○元禄五年壬申七月二十八日死、年八、法名玉毫院海峯覺圓法師、

久貞

龜千代　兵十郎　左膳

○貞享三年丙寅九月十五日誕生、母同、

○元禄九年正月二十六日首服、　吉貴公加冠之、賜脇刀、島津助之丞忠守理髪、

女子
早世、
○母同、

女子
○母島津主水久輔女、

女子
早世、
○母穎娃長左衛門久明女（實西金左衛門純乘、女、久明養之爲子）

島津周防久儔一流系圖（村森附之）

△久儔
初忠英　又久通　或久陳　虎德丸　三郎五郎
又八郎　周防
○貞享四年丁卯二月十三日、於武州江戸芝第誕生、
母江田五兵衛國重入道道用女（國夫人辭世後、備繼室、綱貴公逝而稱信證院）

○二十代之　太守綱貴公之二男也、
○元禄八年乙亥二月十日、　太守綱貴公手自加冠虎德丸、號三郎五郎忠英、乃賜脇刀一腰、佐多豐前久逵勤理髮、
○同十三年庚辰七月三日、　太守綱貴公以新納美作久珍、賜五千斛之采地及御判物矣、

『正文在島津周防久儔』
○此節其方江高五千斛宛行旱、所附之儀者、重而可申付之、當時者右高表方藏入方江預置、年〻之所務別格ニ致置、於後年一簾用事相達筋ニ役人共江可申含旨、新納美作江申渡之間、可被得其意之狀如件、

元禄十三年庚辰七月三日　綱貴（花押）

嶋津又八郎殿

（本文書ハ「旧記雜録追録二」七五六号文書ト同文ナリ）

397

『正文在島津周防久儔』

○　御袖判写

此節嶋津又八郎江高五千斛所宛行也、所付之儀者重而可申付之、當時者彼方江就無所用、表方藏入方江高共ニ預置、年〻物成別格ニ致支配置、於後年一簾用事相達樣ニ役人共江可申付者也、

元禄十三年庚辰七月三日

新納美作とのへ

（本文書ハ「旧記雜録追録二」七五五号文書ト同文ナリ）

○同十四年十二月三日、除前髪、時　太守綱貴公賜御書、

398

『正文在島津周防久儔』

猶〻、修理大夫へ可被申談候、以上、

一筆令啓候、其元無吴之由珎重存候、於此方も相替儀無之候間、可心安候、其方前髪取之儀尤ニ存候間、吉日次第ニ前髪被取可宜候、右之旨ハ修理大夫殿申越条、其心得尤ニ候、恐〻謹言、

薩摩守

十二月三日　（花押）

嶋津又八郎殿　御宿所

『在包紙』

嶋津又八郎殿　回章　薩摩守

封

（本文書ハ「旧記雜録追録二」一一〇二号文書ト同文ナリ）

○同十五年壬午六月二十五日、　太守綱貴公以島津勘解由久當賜教訓狀、

399

『正文在島津周防久儔』

教訓之條〻

一爲一國之守護、爲一郡之主、行國政撫育士民事、不知文武之道難成、文武者車之兩輪、鳥之兩翼、不可欠一事、

一志者諸道之根本也、大本不立則万事不遂、故先志

可堅固事、
一玩物則喪志、是聖人之格言也、況於專遊興而好勝負事、佚樂而耽酒色乎、此等之事曽而不可爲之事、
一忠孝愛敬者人性之自然、順之則榮、逆之則亡、愼以可順其性事、
一雖一日空不可過、少壯而不學、老大而雖悔、不可有其益事、
一能聞諫則必爲良將、三略ニ有之、將能受諫能採言云〻、實能可思之事、
一以臣知其君、以友察其人、故不知臣下之善惡、則之曰暗將、然者先能辨近臣之邪正、而正直之者賞之、邪曲之者敎之而歸正道、是君師之道也、如此則何陷佞奸之謀哉、能〻心懸肝要事、
右此條數者少して詞雖短、其義者則廣遠也、平生是を身邊ニ置て、讀之可味之、あしく心得、事新敷樣ニ引請ては、却而忠言逆耳、良藥苦口、能〻得心して可有信用、其方今年十六歳、已去年元服して益成長、特我等爲ニ者二男也、修理大夫爲ニ者差次之弟、家中一門之中ニおひては、諸士之崇敬第一也、然者修理大夫治世之節ニ者、おのつから政道補佐之任、其方を差置誰か可有之哉、躰により守護代をも可被勤事なれは、國人之所瞻仰節彼南山ニ可均欤、邪心の才力を以ハ中〻不及事也、其例を言に、遠き周世にてハ、周公旦聖德を以成王を補佐して天下を治め、近く我家にては日新齋賢德を以て陸奥守貴久を翼け、嶋津之正統中興之主となしませる、是等は皆聖德賢才之所爲也、されハ並〻之心懸にてハ、却而諸人之笑を招、先祖を恥しむるの基也、武門にをひて不珎事といへとも、朝夕讀四書・五經而通其義、弓馬武藝之儀者勿論、能軍法を學習、或手跡なともつたなからす書嗜、賦詩詠和歌彈琴ハ風流之事、皆以左文右武之業にしてひとつもかける時は車の一輪を折、鳥の一翼をおれるにひとし、光陰如箭時不待人、可勤學者今年生也、相構て徒に日を送る事有へからす、それ我嶋津之元祖豊後守忠久者、右大將源頼朝公之長庶子に

して文武之達人也、其文德及武功東鑑に載て昭晰たり、文治二年之春、八歳にして嶋津之御庄薩・隅・日之三州に封を受、同五年、奥州之泰衡退治之節、先陣之大將に命せられ、無事故逆賊を討亡して領國に歸り、以仁義士民を撫給ひしか、其積善之餘慶五百年來至于我等、今二十代相継て三州を領、且又代〻之先祖志を武將之家といふに決して文武に不暗し故也、近代にをひては、修理大夫義久、近衛關白前久公を師範として古今和歌集之奥儀を傳、青蓮院尊朝親王に附て入木之道を學ひ、九州を討隨て太守と仰れ給、是文武之德を兼備して能旗下之將士を指揮し給ひしゆへならすや、義久之舍弟兵庫頭義弘、初は守護代として政道を補佐し、幾度か大敵を討亡し給ひし、就中朝鮮國之大捷吴國までも無其隱、是又文武之德にして賢志の所致也、中納言家久初又八郎忠恒と申せし時、秀吉公之命に依て朝鮮にわたり、義弘に力を戮せ在陣之中、或逢風景者詠和歌、或帷幕之下に燈を挑、照高院如雪親王之御手跡を習學給ひしとかや、軍中にも文を忘給ハぬ御心さし、偏是先祖忠久頼朝公之長庶子日本第一武將之後胤、嶋津之家聲を穢すましきの心さしゆへ、朝鮮國泗川之新塞におひて、明兵二十万騎寄來し時に、義弘と一擧に切崩討取給敵三万八千七百余、吴國・本朝無雙之大勝利を得給事も、偏文武之道に身を投て勤學し給ひし證據也、其方事此記置條數之旨を專に相守、文武之道を學ひ令名を後代に可殘、志を能〻決定して愛親敬兄之義を忘さる、則是忠孝之道中武將之器なるへし、敢不可有油斷、仍教訓之狀如件、

元禄十五年六月廿五日　　綱貴

嶋津又八郎殿

（本文書ハ「旧記雜録追録二」一二三二号文書ト同文ナリ、但略文ハ、同一二三三号文書ト同文ナリ）

○寶永元年甲申十一月十三日、　太守吉貴公家督謁大樹綱吉公、時忠英以氏族、初奉謁

將軍家、獻上御太刀・御馬・御衣服等矣、

○同五年閏正月十五日、忠英別樹家、故獻上御太刀・馬代・三種二荷矣、

○同七年庚寅閏八月五日、賜日州末吉之地頭職、

○正德元年辛卯十一月二十六日、　吉貴公降命曰、於忠英家、二男以下以村森宜爲稱號、且不可用十文字之紋、島津帶刀仲休傳之、

○同三年癸巳三月二十五日、　吉貴公以肝屬兼柄降命曰、於忠英家、自今以往實名之字避忠字、至二男代代被免久字、三男以下實名者可改英字、且頂戴折紙、

○夫島津氏之曩祖　忠久公者、　賴朝公之長庶子而元源姓也、其後雖冒異父八文字民部太輔惟宗廣言之姓惟宗、承久三年辛巳六月、蒙　近衛前內大臣基通公之恩免、改惟宗爲藤原、爾來自世世之　太守至瓜瓞蔓生之氏族爲藤姓、雖然至　太守光久公、措固有之姓而不可冒他姓、遂溫故復源姓、以是正德四年正月十八日、　太守吉貴公降命曰、自今以後、島津氏之氏族可從　光久公以上用藤姓、以下爲源姓、仍當家爲源姓矣、

女子

早世、

○母喜入安房久亮女、

女子

○母同前、（ママ）

牛次郎

○正德二年壬辰十二月十二日誕生、母家臣北原八郎左衛門兼矩女也、

（表紙）

伊　久

一　流

新編島津氏世錄支流系圖

○伊久一流系圖

△伊久

大夫判官　上總介

○貞和三年丁亥二月一日誕生、

○七代薩州　太守上總介師久長子也、

『正文有之』

○　嫡子伊久分

一薩摩國守護職

一下總國所ゝ本知行分但除伯父下野入道跡

一信濃國南郷

一讃岐國櫛無保

一山門院西方

一薩摩郡地頭職

一宮里郷三分一地頭職

次男小法師分

一伯父下野入道跡

一信濃國大藏郷

一筑前國（豊カ）制田村（副カ）

一薩摩國河邊郡

女子尼分

一水田伍町・薗貳ヶ所一期分山門院樋渡之内

後家鶴田女房分

一山門院西方惣領門六内山下門二・同院内市來崎

次郎太郎入道跡・同彦五郎跡并多田入道跡田薗

焉、

一山門院内當知行分給分矣、
一薩摩郡光冨名内鳥取入道代官分・同前寒水田薗
・同人代官分、何毛後家一期之後者、可惣領知
行也焉、
貞治五年三月五日　『續目裏有之』（師久）
（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一五九号文書ト同文ナリ）

402

『正文』
○硫黄又所用事候、先度到來候し石交候て、下品候、
能〻撰られ候て、一万斤可被沙汰上候、早〻上着
候ハヽ、殊以可爲神妙候也、
三月六日　（足利義滿）
（花押）
嶋津大夫判官殿
（本文書ハ「旧記雑録附録一」五五一号文書ト同文ナリ）

『正文在串木野頂峯院』
○補任

401

薩摩國串木野村内冠嶽東谷西嶽兩山別當職事、
右、於職者、所宛行榮永也、早任先例、可令補任
之狀如件、
應安六年三月十二日　伊久（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」二五一号文書ト同文ナリ）

403

『案文有之』
○嶋津上總介伊久代本田圖書允奉光重謹言上、
欲早被經御沙汰、豐後國井田郷・豐前國副田庄
・日向國高知尾庄間事、
右、巨細言上先畢、仍彼所領等者、伊久於普代相
傳所領無相違之處、于今御沙汰遲引之條、愁訴無
極者也、所詮、九州御退治之間、彼所領等事、可
被閣御沙汰者、御静謐中間、先薩摩國闕所本宮方
之仁等（注文在別紙）進上之、爲彼替令拜領、弥欲抽忠節、
次讃岐國櫛無保、信濃國太田郷内南郷・同國大藏
郷、下總國相馬郡内符川・甲斐御房・發戸・黒崎
以下所〻知行分事、可預御吹擧京都之由、先度令

404

言上畢、然早此等條〻、急速爲被經御沙汰、粗言上如件、

應安七年六月　日

望申闕所事、

一鮫島掃部助跡阿多郡半分百五十町

一上益山・同下益山兩村三十町

一顆娃郡　名主職

一二階堂隱岐守跡阿多郡半分百五十町

井田郷・副田庄者、御方之輩當知行之間、世上靜謐之間、爲井田郷（ママ）・高知尾庄・副田村、爲彼替欲宛賜之、

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二六四号文書ト同文ナリ）

『正文有之』

○來廿七日可罷立候、如何も山通可然存候、其期は隨躰候て、次日山よせに陳を取候ハ、やと存候、如此事、兼日に披露候へは煩候間、山鹿に通候て、安入に陳をとるへきやうに披露仕て候へとも、山

405

よりにしかるへき陳をミたてさせて候ほとに、大村領内雄高邊ニ、明後日ハ打寄候て、やかて山よりに罷通候へきよし存候間、いかさまこなたとほりを御出可然候、諸事安入にて可申談候、如此事御心へたるへく候、又此邊事了簡仕候、子細候間、中〳〵うちすてゝ可罷立候、たゝし黒木邊物共ハ、皆〳〵めしくし候へく候間、可御心安候、尙〻道つかいの事ハ、郡春とほりよく候へく候、同候ハゝ、御共申へく候、ていにしたかひ候て、陳をとるへく候間申候、相構〳〵御披露ハあるましく候、恐〻謹言、

三月廿五日　了俊（花押）

嶋津殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二八七号文書ト同文ナリ）

『正文在澁谷如兵衛重增』

○薩摩國澁谷山城守重信申訴訟事、當國守護嶋津上總介伊久執申候、仍捧擧狀候、謹進覽之候、可被

經御沙汰候哉、於鎮西致忠節候之間、如此令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年四月五日　　沙弥了俊（花押）

進上　武蔵守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二九〇号文書ト同文ナリ）

『正文有之』

○『欠』國事、御一跡并所ゝ『欠』以下、不日ニ安堵被成『欠』　若うたかひ候ハヽ、日限をさし候て承候て、其中に『欠』堵をとり進候へく候、身か私曲公方の御あやまり候哉いなやみえ候へく候、『本之儘』あまりニく、今度承候分無念候、御あやまりかと存候間、以使者平子若狭權守申候、此左右ニ付て、重ゝ可申承候、たゝしハや伊集院禪門方ニ委申承て候しかハ、定被申行候哉、然者可目出候、越州御進退を猶とかくたすけ申され候ハんためニ、御現形遲ゝ候てハ、京都御うたかひ弥候ぬと存候、御急可然候、恐ゝ謹言、

四月八日　　了俊（花押）

嶋津上總介殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三三七号文書ト同文ナリ）

『正文有之』

○五月十三日御札委細承候了、抑如仰雖無何事候、速ニ可申承候之處、今河了俊以下凶徒當國山鹿・志ゝ木原依取陣候、無盡籌策計會云、御在所遠國之間、路次不輙云、無其儀候、背本意候、此堺事、先度者當國ゝ人大略令組御敵候、今度者無殘所御方候之間、他國勢縱雖大勢候、對治不可有幾候、筑後事、依　御所御座候、國ゝ仁等申通子細等候、彼云、是云、合戰勝利不可有子細候、就其候、其堺事被致御計策候、凶徒御對治候者、今時分一勢御合力、就公私可目出候、兼又　公方吹擧事、不可有子細候處、御使不待其左右、被通　御在所候之間、不及申沙汰候、毎事期後信候、恐ゝ謹言、

六月十日　　藤原武興（花押）

408

謹上　嶋津上總介殿　御返事

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二九六号文書ト同文ナリ）

『正文在末吉衆羽島新兵衛』

○　薩摩國御家人國分豐後守久成申軍忠事、

右、於國致忠節之段、守護人嶋津上總介伊久度〻令注進之間、達于御上聞畢、隨而去年應安七年自十二月、久成令當參谷河御陣之時分、數日令在陣旱、同八年四月八日、肥州日岡御陣被召之刻、御共仕、同七月十二日、菊池水嶋御陣被召之時、抽忠勤之条、無其隱、然早於于國、云戰功當座、云忠節、且預京都御注進、且下賜御判、爲備龜鏡、恐〻言上如件、

永和元年七月日　　承了（今川貞世）（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三〇〇号文書ト同文ナリ）

409

『寫歟有之』

已上

○いまた治定ハ不承及候へとも、去比又野部城にて合戰被仕候とやらん『けると欠本ノマヽ』聞候、これハ薩州より急と御張行候けると聞候、實事候者是又無勿躰候、如此事をこそ京都にもうたかいおほしめさるゝ事ニて候へ、所詮、何の儀も候ましく候、たゝ先御出陣たに候て、是事御合力候ハヽ、何事を可有御所存候哉、相良近江方へ人遣候之間、可然便宜候之間申候、此仁も御出陣候へきよし承候欠之間、令悅喜候、重澁谷人〻方へも狀を遣候也、恐〻謹言、

八月十九日　　了俊

嶋津上總介殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三五三号文書ト同文ナリ）

410

『正文在入來之本田傳藏』

○　下　本田左近藏人兼久分

右、山門院西方之内、祖父兼阿之跡村〻同散在田

411

蘭等事有注文別紙、早任先例、可知行之狀如件、

天授三年六月卅日　　伊久（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三七五号文書ト同文ナリ）

『寫在二三之卷』

○薩摩國地頭御家人等遲參輩事、不日可馳參之由、可被相觸之狀如件、

永和四年三月十八日　　沙弥在判

嶋津上總介殿

『二之卷續目裏判』（花押）（今川貞世）　『三之卷續目裏判』（花押）（渋川満頼）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三八八号文書ト同文ナリ）

412

『正文在卷本』

○讓与　伊作女房分

薩摩郡内羽嶋、永吉光冨名内あかさうつのかりや薗、同門付水田、同郡内中津町壹町、延時名内薗壹所、山門院内青木原村事、

右、田薗等ハ、一期之間所讓与也、聊無他妨可令

413

知行也、仍讓狀如件、

永和四年二月廿八日　　伊久（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三八七号文書ト同文ナリ）

『寫在二三之卷』

○嶋津上總介伊久申豐後國井田郷事、爲本領之間、先度被仰之處、不事行云々、太不可然、所詮、不日沙汰付下地於伊久代、可被執進請取之狀、依仰執達如件、

永和四年八月廿八日　　沙弥在判

大友式部丞殿

『二之卷續目裏判』（花押）（今川貞世）　『三之卷續目裏判』（花押）（渋川満頼）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三八九号文書ト同文ナリ）

414

『正文有之』

○筑前國須江庄半分事、任預狀旨、沙汰付嶋津上總介代、可取進請取狀之狀如件、

永和五年三月十三日（旧廿三）　　沙弥（今川貞世）（花押）

415

中野入道殿

那知入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」四〇三号文書ト同文ナリ）

416

『正文有之』

○　（足利義満）（花押）

鎮西凶徒退治等事、弥致忠節者、可被感思食之狀如件、

至德二年正月晦日

嶋津上總介殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」四三五号文書ト同文ナリ）

『正文有之』

○八代凶徒退治事、委細仰尉中訖、早令發向者可爲忠節候也、

十月七日　（足利義満）（花押）

嶋津上總介殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」五五三号文書ト同文ナリ）

417

『正文有之』

○嶋津又三郎令同道、可參洛事、尤所令然也、不日可有上洛之狀、依仰執達如件、

明德二年九月八日　右京大夫（細川頼元）（花押）

嶋津上總介殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」四八九号文書ト同文ナリ）

○伊久入道久哲與嫡子播磨守守久父子不快、且爲胡越之隔、守久不顧天倫、欲攻於父之居城川邊、而引率軍衆構陣於川邊平山、雖經數日未嘗有勝負、太守元久公敢不合力、且曰、父子鬪亂無是非之可言、速可有退陣云云、守久重命屈理、徒令開陣退去薩摩郡畢、其後伊久讓代代之重器於　元久主畢、

○久哲之勢漸減、以故去川邊於　太守元久主、移於薩摩郡者也、

○應永二年乙亥八月十日、伊久發向於高城、構陣營於横峯、作毛悉以拂除矣、當此之時、　元久使新納某・和泉某來于高城之陣達澁谷退治之道曰、引

418

率日向・大隅之騎歩、欲到其地增軍勢、然則爰有不慊我心者、匪啻經遠路越山中險路、有大河之不可徒渡、所以小舟之可乘者亦少矣、是亦所往還之不易也、吾所以願者、發向山田構陣營於高牧、越年而向樋脇(脇)・前田・市比野、則端城悉以不得堅守、待其佳期、自吉田・蒲生越一山攻入來、則半其勞、而屬手裏必矣、於茲伊久談件之旨趣於市來備後守忠家、忠家亦同此謀矣、是以定其議也、當此時也、大友修理大夫親世贈八月十六日書簡於久哲、其文曰、

『往言集ニ有之』

○今川殿上洛、博多逗留事難叶候之由申候之間、千葉方媒介ニテ、肥前小城ニ被落集候、小貳・菊池奔走候、彼一類家僕等皆一所ニ候、近日可有出津モノニ候欤、九州大儀一人而難計候之間、大内方『遺歟』ヘ遺狀候、未返札候、落髮之由聞得、法名義弘候哉、就中播磨守對奥州御陣合戰之由承候、定而不

419

可有差事候、恐〻謹言、

八月十六日　　親世『在判』

謹上　嶋津殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五五〇―二号文書ト同文ナリ）

久哲返書、『右同』

○今月十六日御狀同廿二日到來、謹拜見候、抑今河殿之上洛之事承、悅無極候、如御存知之三ケ國之凶徒等、此一家企隱謀叛逆之族被副力被差下大將之事、御意趣何事候哉、鎭西下向ノ手合ニ麻生山之合戰始トシテ、木山・所隈・山崎・瀨高・北鄕・川原ニ至迄、御馬之口ニ不付云事無、殊以肥州詫マ原之御合戰之時、舍弟三郎左衞門尉・新納左近將監、御目前ニ而討死仕候、ケ樣之忠節掛テモ被思食寄御氣色なく、小貳冬資事者、九州三人可爲親眤之由、享御意処也、於水嶋被討申候、依其恨歎之顏色薄、面目罷成在國仕候、有自然次者、元

久爲先馳上可致御合力之由、挿心底候之處、被成背上意上洛之事、尤以本望也、以此首途入來發向之事、定而可達本意候哉、當陣之事御使者護阿弥委敷可被申候、恐〻謹言、

八月廿三日　　前上總介伊久『在判』

謹上　大友殿

御返事

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五五〇―三号文書ト同文ナリ）

陸奥守元久亦返書之趣同意也、

『正文在田布施士二階堂三左衛門豐行』

○薩摩國入來院之内、澁谷形部少輔入道定順跡本領地事、

右、爲析所預申候也、任先例、可被致沙汰候、仍之狀如件、

應永三年二月十八日　　道哲（花押）

二階堂山城殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五六三号文書ト同文ナリ）

○去程、任　元久之所謀之道、發向山田、構陣營於高牧、而越年矣、應永三年丙子正月十一日、伐拂山野更闢通路、今夜樋腋城委去矣、同十三日、前田城沒落也、同十九日、陷市比野城、共三之城各入守兵、而後催薩・隅・日三州太軍、欲赴淸敷城之際、大友氏贈使書曰、四月十九日、澁川殿爲探題下著于博多也、由是被成下御教書、其上書曰、澁川右兵衛佐滿頼爲鎭西探題所差下也、急有在津可合力事、可達上聞、在大友修理亮・太宰小貳・嶋津上總介入道・同又三郎・九州地頭御家人等中、因茲翌年之春、稱　伊久　元久之名代、使山城守忠朝・修理亮久豐赴博多、于時市來某中村氏・伊集院某野田氏・別府某村原氏共三輩從忠朝、吉田某花牟禮氏・平山某西郷氏・肝付某渡邊氏・飫肥某南郷氏共四輩從久豐、各解纜於阿久寢、而著於肥前寺江、同國稱新山之地、而各遂對面、爲伸其返禮、探題有來儀之聲、則兩輩占旅宿於田手寺、俟來格時、四月廿日、迄秉燭之時寄光駕、久豐持

爝燭迎門外、忠朝蹲踞庭上、探題揖兩輩、而上堂上座右座角、忠朝上座下述一禮、又下庭上請板藏殿、而後候座席、先忠朝持銚子獻盃酒、而後以探題之酌、兩輩亦飲酒矣、今夜如新山還御也、春夏秋冬各有其地、十月下旬、兩輩得暇所以歸國也、

○欲攻清色城、應永四年丁丑四月下旬、從山北久哲爲大將、嫡子守久・姶良三郎左衞門尉忠安・阿蘇谷出羽守興久・子息四郎助久・伊地知伊賀守・下野宗十郎・信濃左近太夫・酒匂伊豆守伊景・本田次郎守親・天辰肥前小次郎守經・中條因幡守政春、近隣御家人國府左衞門尉・羽嶋豐後守・執印豐前守・永利長門守・宮里若狹守・石塚對馬守、南方之兵共二千餘騎、從麑島　陸奥守元久爲大將、新納越後守實久・北鄕讃岐守・樺山安藝守・佐多和泉守・川上某・本田・酒匂・阿多・平田・肥後・石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野・千代富・北原等爲一人當千之思、月杉兩一揆馳加、從山東伊東・土持・宮崎・跡江・木脇・清武・曽井・佐佐宇津・岡富・縣・盛長・八代・財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池尻・穆佐・加江田・飫肥・櫛間・和田・高木・眞幸・菱刈・馬越・平良・曾木・栗野・稅所・加治木・平山・平松・平瀨・中津野・餅田・吉田・蒲生之軍共五千余騎、殆引率八千騎、而久哲　元久・伊集院彈正少弼頼久構大陣於野頸、本田信濃守忠親爲杉一揆之將、構一陣於滿手野、播磨守守久・伊作大隅守久義構陣於木場原與黑瀨、新納越後守實久爲月一揆之將、構陣於壽昌寺之峯、故無通一絲之徑路、且復不嫌山野盤石、結間垣者二里五十町、堅密也、晝夜所攻責者、不可勝言、於茲乎、往昔圍亡父師久法師道貞於碇山城、又陷高江峯城、一族家臣宗徒勇士三十八人遂戰死焉、數年宿意今日所以消除也、城中士卒有餘、兵粮不足、且矢竭絃絕、是以不得支保、而乞通路免、以降城沒落、故國中屬無爲者也、

421

『正文北郷氏内都城永井銀兵衛後家有之』

○先日進狀候處、委細御返事于今畏存候、抑其堺之事、飫肥方敵方同心由事無念存候、就其薩州御大綱併察存候、雖然彼在所ニ被差寄候、所ゝ被取陣候之由承候、御退治不可有幾程候哉、目出候、又三郎參候、就諸事薩州御煩ニ罷成候条、無勿躰次第候、但弥此仁事者、堅可預御扶持之由承候間、御芳志至無是非候、殊以御方樣取分被懸御意候由承候間、千万難申盡御志候、敏ゝ世上思樣罷成候て、入見參、加樣御悦申持度候、定御同心候哉、次此方樣計略之次第、委薩州御方へ申候、定可聞召候哉、雖重言候、弥憑存候外無他事候、委細此仁可申候之間令略候、恐ゝ謹言、

卯月廿三日　　久哲（花押）

永井殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五八一号文書ト同文ナリ）

422

『正文』

○嶋津上總入道久哲申豐前國副田庄事、被官人押妨云ゝ、太不可然、所詮、可被沙汰付下地於久哲代、若又有子細者、可被注申之狀如件、

應永四年六月五日　　右兵衛佐（渋川満頼）（花押）

大内左京權大夫（義弘）入道殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五八八号文書ト同文ナリ）

423

『下野イ』

○伊作大隅守久義有宿意之未散別符某、欲遂其憤、應永四年丁丑十二月、率師旅已發向、而渡大河對敵城、構陣於鵜塚、以越年矣、同五年戊寅正月十二日、久哲越山于串木野、爲和夫亂逆、使市來某・吉田某爲和諧之謀、而未成、是以裁書簡達麑島曰、

『應永記ニ有之』

○新春御大慶千喜万悦不可有盡期候、抑伊作方之振舞、國之亂共可成候哉、澁谷一族多年挾野心候間、

424

去年以御合力加退治候旱、隨而探題方之御事、以子共應對申候キ、春永市來邊ニ參會、國中有催促上書之趣申上、亦去年之御辛勞欲令申候之處ニ、私之嗷訴不及了簡候、此段新納方有談合、被加諫言候者、可目出度候、恐〻謹言、

正月十四日　　沙弥久哲

謹上　大隅殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五九八―二号文書ト同文ナリ）

元久返書曰、

『應永記ニ有之』

○如仰之候、今春之御吉兆越例年候間、万事目出度本意滿足候旱、抑伊作方事楚忽之至候、實久被打越候者、急速彼陣被引退候樣ニ可申談候、兼亦雖相似次、去年舍弟次郎三郎山城殿御供申、探題方之事償申罷下候、依月迫、此子細不申候、京都之事者山北ニ參候間可申定候、恐惶謹言、

425

正月十六日　　藤原元久『在判』

進上　酒匂伊豆守殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」五九八―三号文書ト同文ナリ）

○其後新納越後守實久聞件之事、則大驚太憂、使本田次郎左衛門尉達諫言於久義數度、而後開陣矣、久哲之悅喜何有如之者乎、如斯與元久親暱雖異于他、應永六年忽爲冰炭者也、

『正文在入來院石見重頼』

○薩摩國之內谷山郡・同國給黎院半分事、

右、爲析所〻預申也、任先例、可被沙汰之狀如件、

應永七年十二月十三日　　久哲（花押）

澁谷彈正少弼殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」六六七号文書ト同文ナリ）

○應永八年辛丑四月廿三日、　元久率太軍發向市來、構陣營於鎭守山、久哲援市來之危急、而越山也、

市來筑前守忠家使直山新左衞門・有川彈正入道達酒匂某曰、　元久方者有可乘總陣尾之聞、如此則寄附敵於近所、雖有可決安否之臆念、未見急遽之可爲攻責道、謂緩鶴田之陣爲救渠之急謀略乎、敢非可怠慢之時、久哲速往祁答院、增勢於大村某者可乎、若容此言則息男太郎家親亦可爲供奉、久哲喜悅且爲評議、忠家具中村左京亮・田口左近將監、候久哲之陣、評議既定則赴祁答院矣、如忠家之言鶴田某歸心於　元久、雖爲密事既露顯矣、久哲催領土之騎步發向其地、構陣營於萩平、大村・清色・東鄕・高城已下勇士向鶴田攻責之際、應永八年九月五日、　元久自麑島・谷山・伊集院、至日・隅二州催騎步、共三千五百餘騎鳴兵鼓來、而登熊越構大陣矣、於茲乎久哲屯于諏方坊近所、嫡子守久・二男忠朝爲將、以率二百許輩、而過萩平・岩腋之陣、渡川進熊越之陣下、構一陣矣、同十日、熊越陣中之敵兵二千騎許乘于鶴田古城、又同廿日、古城之兵使一千餘騎渡川構陣於鶚巢(トビノス)、故我陣絶通路難儀之至也、于時相良讃岐守自賴率二百許、過萩平之陣渡川、鶚巢陣之乾構一陣於鶴翼形、同廿一日、古城之兵五百許登神崎山構陣矣、丁此之時、大村出羽守謂久哲曰、窺謀敵陣之道則一戰有近邇乎、敢勿徬徨、今夜築一陣於善福寺、對神崎山則絶惣陣之通路、然則我之得利或有之乎、是乎非乎宜依久哲之計、久哲亦是之、而後欲令東鄕・入來往以爲構陣、各應諾焉、就中副田淡路守謂久哲曰、重賴罹病痾歸私宅矣、雖通此令可移明日、當急難之時不可固辭、速可到其地、下庭下則久哲亦下庭上揖之者深厚也、淡路守領精兵百四五十人、陣善福寺、于時從球麻差一价曰、聞當陣無勢之聲不能忍宿、使實長領救兵速到于其地、其間楚忽合戰停之可也、同年十月中旬、實長與牛屎某領精兵三百騎、自紫尾山至簾迫古陣、先屯于此、以窺見敵味方陣陣也、十月廿五日、敵軍爲三分進千町田間、已及合戰、自酉初刻至日入挑戰、自侘戰死被傷者不知其數、於茲乎鶴田某請降、與　元久俱向菱刈

引退矣、雖爲多勢、戰場敗立有地利與天運乎矣、

『正文有之』

○鎭西邊賊船等、連〻令渡唐、以便宜在所及狼藉云〻、太招罪科歟、於風聞之輩者、不廻時日差遣軍勢、可加治罰、況至現形之族哉、彼是嚴密可致其沙汰、更不可有緩怠之狀如件、

應永九年八月十六日　（足利義滿）（花押）

嶋津上總入道殿

（本文書ハ「旧記雜録前編一」六八九号文書ト同文ナリ）

『寫在卷本』

○今度事上御使候事候間、朝山殿被參候、仍無爲落居、天下大慶此事候、就其者御申条〻、如何樣朝山方歸參候時、可被披露候哉、以其次可令注進候、一吉弘土佐入道進候事、盡存始中終、故一曇時より此仁存知事候間、能〻申へきため〻、やとい申候事、仍毎事きこしめしひらかれ候よし承候間、是も滿足候也、故玄久御時申入承候し事、更〻無御存知候けり、然間此年月我〻〻御不快尤御ことハり〻候けり、於身者、又もとより無私曲候、自他此時心底ほとけ候了、今も御參洛候ハヽ、御所〻直〻申入候し条〻も、又武州存知候し事等もことく〻きこしめしほとかるへく候間、弥身の不儀私曲なく候し事ハ、可有御心得候哉、所諸自今以後あひたかひ〻、爲天下わたくしなく、　上の御ため無煩樣〻可申談候、尙〻故玄久御時の事無御存知候けるゆへ〻、我〻〻御不快尤御ことハり〻候、如何樣以此下委細明春自五日以後可申承候、先此趣吉弘物語申候、悅入候間馳申候、毎事如此事、京都上意をうかゝひ候ハて、申行事なく候間、京都〻も可申上候、國策事ハ、先達被定置候間、是又可依　上意候、更〻身のため〻無是非候、恐〻謹言、

十二月九日　　了俊（御判）

嶋津上總介殿　御返事

428

（本文書ハ「旧記雑録附録一」五七〇号文書ト同文ナリ）

『寫有之』

○御狀委細承候了、

一去年依京都御意、自探題被進朝山候、自是も可使者之由、探題被申候間、進吉弘土佐入道之處、無子細無爲落居之条、爲身就公私令悅喜候、進人可申候處、態御使所仰候、

一奥州御事、是又無子細候、誠令悅喜候、殊今度椛山殿御越候、御慇懃之至難申盡候、何樣自是其恐可申入候、椛山殿入見參申承候間、殊ニ悅喜仕候、

一相良方事、自奥州探題へ被仰候間、定委細御返事被申候哉、

一京都今度御合戰事、於身驚入候之處、無爲落居候間、大慶仕事候、目出畏入候、定御同心候哉、天下大綱候間、無心元候つるに勝利候間、御心安存候、畏入候〳〵、

一京都大御所御隱之由承候、御所樣以外御非歎由承

429

候、爲御訪先博多まて出津候、何樣連〳〵可申入候、恐〳〵謹言、

『應永十二年歟』八月十五日　　（大友）修理權大夫親世『在判』

謹上　嶋津殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七三五号文書ト同文ナリ）

『正文有之』

○去月十七日御狀、今月十二日到來、委細承候畢、抑其方樣御事、屬無爲候、仍可有御出津之由承候、先以目出候、定探題悅喜申候哉、則彼方御返狀、付遣之候、兼又、京都御礼傳申事目出候、隨而代官安治方ニも、種〳〵拜領候由申下候、不思寄事候、乍去御『此間欠』（旧懇志）之至恐悅候、尙〳〵恐入候、雖不甲斐ニ候、自然之時者、可立御用候之旨申付候、將又筑後凶徒對治事、去月廿二日、馳渡長田河候、於溝口及合戰候、則時打勝候、仍菊池武朝家僕等以下三百余人討取候了、其身事者、具足切捨候、落散候、當『欠』（旧日）肥後山鹿ニ罷着候、其後取籠菊池

430

陣城候之間、自是差遣一勢候、又貞公致籌策候之間、依難堪忍候欤、今月七日、捨在所、山中ニ逃籠候、於今者無差事候、其段先日りよ阿弥陀仏申候、遁世人被參之時、委細令申候、定參着候哉、尙〻京都事無御等閑之樣、連〻被申候者、尤可目出候、他事併期後信候、恐〻謹言、

十二月十三日　　親世（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」三三〇号文書ト同文ナリ）

『正文在卷本』

○

下　幸久（薩摩國於于山門院之內水田參拾壹町同薗事、坪付別紙、在之）

右、爲給分所宛行也、任先例、可致沙汰之狀如件、

應永十四年二月六日　　沙弥（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」七五九号文書ト同文ナリ）

○應永十四年丁亥四月六日卒『五月四日イ』、年六十一、法號久哲道觀、

久安

號碇山、三郎左衛門尉　○子孫記別紙也、

△守久

大夫判官　播磨守　入道名得佛、

431

『正文有之』

○薩摩國知行分所〻事、去年九月以來嶋津陸奥守押妨云〻、甚不可然、早止其妨、爲亡父久哲遺跡、惣領嶋津判官入道德佛領掌不可有相違之狀如件、

『應永九年也』

（本文書ハ「旧記雜録前編二」六九七号文書ト同文ナリ）

432

『正文有之』

○　契約

當國凶徒對治事、就善惡可成一味同心之思候、殊以山北野心仁等、誅伐之程者、何樣雖違所存事候、

433

或破在陣或不成歸宅之思、以一躰同心之儀可加對治候、此上者、就公私御大事者存身大事、相互見繼被見繼可申候、此條〻八幡大菩薩　諏方上下大明神御照覽候へ、向後不可有違變之儀候、恐〻謹言、

二月廿三日　　重豐（入来院）（花押）

嶋津大夫判官殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」二四二号文書ト同文ナリ）

『正文在入來院石見重頼』

○薩摩國山門院西方之事并薩摩郡之内荒皮（河）・羽嶋之事、可有御忠節之由承候之間、所置進候也、任先例、可有知行之狀如件、

應永拾年十二月七日　　守久（花押）

澁谷彈正少弼（重頼）殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七一二号文書ト同文ナリ）

434

『正文在出水野田山内寺』

○「（外題）任此狀、可領掌之狀如件、

嶋津『欠』判官入道沙弥得佛（守久）（花押）」『判形虫食不明』

讓与

薩州山門院山内寺社院主職田畠等事、

四至

東限馬場大道　　南限新御堂堀『欠』居

西限田（田）線（堀）城大道　　北限陣内堀東殿（堀）城（堀カ）在成宛也

右、件寺社田畠者、自先祖師匠祐範重代相傳之所領也、然者子息最珎房依爲器量之仁、限永代讓与早、迄到子〻孫〻仁、無相違可知行也、仍爲後日狀如件、

應永十三年丙戌六月廿九日

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七四七号文書ト同文ナリ）

435

『正文在北郷氏内都城野村大右衛門』

○薩摩國山門院惣領河嶋門内壱町、給分所宛行候、別在所出來候時者、可立替候、其間者早可有知行狀

如件、

應永十八年十二月廿九日　沙弥（花押）

上原大學殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」八六五号文書ト同文ナリ）

『正文在出水野田山内寺』

○寄進狀

薩摩國山門院之内井具居田七段、新御堂宮崎八幡所奉寄進也、仍狀如件、

應永廿五年十一月廿八日　沙弥得佛（花押）『判形虫喰不明』

（本文書ハ「旧記雜録前編二」九七三号文書ト同文ナリ）

○守久之武威漸衰、居住于山門院之際、　太守久豐使嫡男又三郎貴久（後稱忠國）率多勢來、攻於予者甚急、是以失防禦術、捨山門院、出奔于肥州、不經于幾程、而死彼國、法號義山道觀、『仁イ』

忠朝

山城守　○相馬氏祖也、子孫記別紙矣、

久照

字生黑丸　又彌北殿、又三郎　○法名道音、『言イ』

『正文有之』

○　讓与　生黑丸分

右、薩摩國山門院西方内三ヶ村、所讓与也、但、僧になすへき之間、けさころもの爲析足、はからひあつるところなり、もし弓矢をとり、在家のふるまいあらん時ハ、惣領生若知行（脱カ）すきなり、仍爲後日讓狀如件、

應安七年八月廿九日　伊久（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二七〇号文書ト同文ナリ）

○本田忠親有挾恨於　太守、而以久照爲大將、發於櫛間院、向於志布志、既及合戰矣、

△久世

兵衛尉　三郎左衛尉　上總介

○嘉慶元年丁卯誕生、

438

『正文在入來院石見重賴』

○薩摩之國莫祢院一曲之事、依今度志宛行所也、致(到)

子〻孫〻無相違可有御知行、仍狀如件、

應永十八年九月十五日　兵衛尉久世（花押）

清色(重長)殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」八三一号文書ト同文ナリ）

439

『正文在田布施衆二階堂三左衛門豐行』

○　契約

一世上如何躰雖轉變候、捨親子兄弟、大事お身之大綱と存、用ニ可立申事、

一大少事共ニ無腹藏可申談事、

一自然有和讒凶害之仁、不慮之荒説出來覽時者、互以面可申披事、

若此条〻僞申候者、

日本國中大小神祇、殊以伊勢天照大神　八幡大菩薩諏方上下大明神　天滿天神　稻荷大明神御罰お可罷蒙候、

應永十八年九月十八日　久世（花押）

二階堂六郎殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」八三二号文書ト同文ナリ）

440

『正文在肝付伴兵衛』

○　宛行

日向國柏原之內蒲生方知行分三十町爲新所、任先例、可有知行狀如件、

應永十九年十一月十三日　久世（花押）

波見殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」八八八号文書ト同文ナリ）

441

『正文在澁谷如兵衛重增』

○薩摩國薩摩郡於時吉名內八十町、此之內串木野入一曲坪付有別紙之、同國河邊郡七嶋之內嶋一、伊集院內三十町、山門院內老松庄菓成河村塩屋一之事、

右、爲析所ゝ進置也、早可有知行、仍之狀如件、

應永廿一年九月十六日　　久世（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」九三四号文書ト同文ナリ）

『正文在肝付伴兵衛兼屋』

○先日進使者候之處、雖不始事候、慇懃之御返事悦入候、兼又其方向之合戰之次第爲申談候、霜臺被參候、尤罷越此間御辛勞之通申達度候へ共、先進使者候、定心底可申披候哉、適伊集院被參候へハ、諸事堅く御談合可目出候、委細使者可申候之間、令省略候、恐ゝ謹言、

十月廿九日　　久世（花押）

波見殿

（本文書ハ「旧記雜録附録二」一四三六号文書ト同文ナリ）

○寄心於我一揆之輩、漸變志而歸於　太守、由是忽武威衰微、於茲乎、與伊作四郎左衛門尉勝久俱、爲評議止鬪亂成和睦計、而後勝久已往于麑島、見于　太守矣、　太守先來川邊見我、我亦應永廿三年丙申十二月、往麑島見　久豐、會合之懇志酒燕之和樂超過尋常、不可勝言、同廿七日、丁欲歸川邊之時、圍千手堂坊之旅宿曰、數年欝憤無所欲止、以故如斯、雖然去川邊居城者、宥罪科可解圍、如有所辭者不許誅戮云云、　忽將自殺之際、福昌寺大『田敵』轉和尚來入旅宿、而曳裾執裳諫曰、或去領地、或去居城、以爲和諧屈同僚之旗下、依時之運所以古今之不能無也、去公之居城何爲恥辱乎、保生全身宜後來之俟佳時不止、故不得已而使小田原彈正・柳田大膳達件旨於川邊息犬太郎、其返言遲延不至、空越年矣、小田原彈正反命曰、群臣等共議云、去居城不能、於茲乎、嘆曰、容和尚之言徒逾年、今也雖悔無甲斐矣、乃正月十三日、遂自殺於千手堂坊畢、年三十一、法號惟馨久德大禪定門、殉死一族家臣、侍中太郎・本田伊賀・小田原彈正・天辰助次郎・黑田・伊駒・金田已下勇士共十一人、中間等戰死也、

△久林

犬太郎　左兵衛尉

○應永廿年癸巳誕生、母伊作大隅守久義女也、

443

『正文在巻本』

○就南蠻船事三月廿七日御狀、卯月十三日到來、則令披露了、仍　上意慇懃ニ事を御とゝけ候よし、本望之由候、それよりの御狀、南蠻船着岸の御注進、明後日十七日京都へ被立候、同御申次第修理亮不義之条、先度之目安案文をうつしとゝめ候てのほせられ候、御面目之至候、同愚身御方へ狀もそへ被上候、就中京都雑掌事、(旧京都への吹挙雑掌)此時御身躰をも被定候ハんと存候へハ如何に候も、御奔走あるへく候哉、若又京都事大慶候ハヽ、早ゝ犬太郎殿御參可然存候、兩条ニ一ケ条、今度御定候ハてハと存候、此旨可得御意候、恐ゝ謹言、

卯月十五日　(芥河)愛阿（花押）

知寛長門殿

石塚大和殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」五六七号文書ト同文ナリ）

444

『正文在手鏡』

○隨而南蠻舟、則時に上洛候様、御催促可爲肝要候、委細之段、石塚使にて可申候之間、無是非候、尚ゝ今度彼大和於于御身者大忠之事候歟、能ゝ使にて被仰談可有悦、兼又罷越見申度存候へ共、時節から打つゝき取乱候間、無其儀候、如何様少も得便候者、罷越可見申候、萬事大慶此節候歟、毎事期後信候、恐ゝ謹言、

三月六日　沙弥得佛（花押）

謹上　嶋津殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」五五七号文書ト同文ナリ）

445

○追而申入候、それにて石塚方御使にて、南蠻船御公事の料足間事御はからいたるへきよし承之候間、

内へ其子細令披露候處、上乘又ハ今度注進御狀に
も其分不見之間、面ゝ御不審候、京都へ此船出候
ハぬ先ニ重而御さ右承候へく候、事ゝ期後信候、
恐ゝ謹言、

『寫在田布施衆前田彌左衛門重信』

○下　宮古若狭守久種

薩摩國薩摩郡之内宮古村十町事、

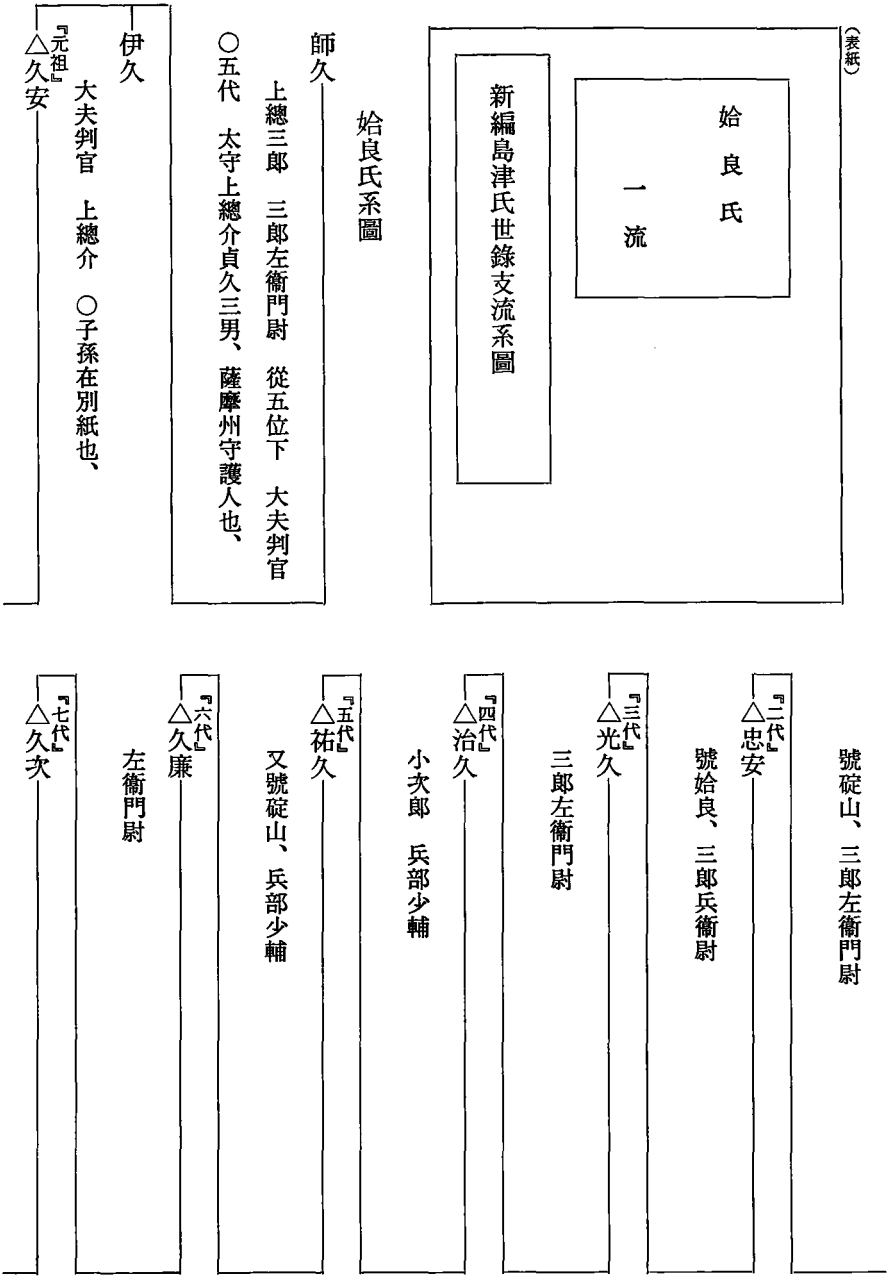
右、依名字地所望如此、早任先例、可知行之狀如
件、

應永卅五年九月二日　　犬太郎丸

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇八二号文書ト同文ナリ）

○所屬我之旗下之士卒漸減矣、由是川邊居城無恙難
拘、故去居城於　太守逃於山門院、然而山門院亦
不得居住、出奔于肥前州高來者也、

○永享二年庚戌十一月一日、來于日州眞幸院、於德
滿城、爲　太守忠國所凡誅、年十八、法號大義道
椿、家臣本田石見・小田原木工追跡殉死、嗚呼是
亦天乎命乎、　師久子孫枝葉至于茲、靡有子遺矣、


(表紙)
姶良氏
一流
新編島津氏世錄支流系圖
姶良氏系圖
師久
上總三郎　三郎左衛門尉　從五位下　大夫判官
○五代　太守上總介貞久三男、薩摩州守護人也、
伊久
大夫判官　上總介　○子孫在別紙也、
『元祖』
△久安
號碇山、三郎左衛門尉
『二代』
△忠安
號姶良、三郎兵衛尉
『三代』
△光久
三郎左衛門尉
『四代』
△治久
小次郎　兵部少輔
『五代』
△祐久
又號碇山、兵部少輔
『六代』
△久廉
左衛門尉
『七代』
△久次

又九郎

『八代』
△忠親
又號始良、彌九郎
○於大隅生別符戰死、

用哲
時宗
○爲伊作道場之弟子如斯、雖然兄忠親戰死而無繼子、由是　太守義久公蒙可連續當家之嚴命、不得已而既還俗稱次郎右衛門尉久近、爲忠親之跡矣、

△久近
次郎右衛門尉

△久次
新次郎
○永禄十一年戊辰誕生、母新穗藤二郎女、
○於三之山（或天正十三年乙酉閏八月十三日戰死于肥後堅志田）戰死矣、年十八、法號一然道超上座、
○太守義久尊君感久次所戰死之志、安位牌於鹿兒島南林寺、修一七个日之法事、且復爲後世菩提所寄進八木五石、現住陽月和尚之時也、

僧
久尊
三郎兵衛　他腹、
○敷根之士也、
○法名心翁凉源居士、

久武
伊右衛門
○慶長十七年壬子誕生、
○元禄四年辛未二月二日死、法名了法禪達居士、

久次
新右衛門
○法名一林喜昌上座、

安督（ママ）
喜左衛門
○正保四年丁亥誕生、
○久次依無實子爲猶子、實岡元喜右衛門重盈二男、
○正徳六年丙申二月三日死、法名瑞雪自詳居士、

安通
喜右衛門
○寛文五年乙巳九月九日誕生、母西郷仁右衛門宗孫之女、

安曹
喜八郎　十郎左衛門
○寛文九年己酉十二月二十日誕生、母同前、

安族
喜平次
○元禄十年丁丑十二月二日誕生、母隅州福山社人坂本肥前高通女、

女子

安惇
十左衛門
○正徳元年辛卯七月十五日誕生、母同前、

安代
喜作兵衛
○元禄二年己巳誕生、

久次
喜三左衛門　早世、

女子
隅州清水之士赤塚仙右衛門重次之妻、
○母同前、

安當
喜兵衛
○元禄十六年癸未五月二十九日誕生、母同前、

女子

隅州國分之士永田藤左衛門義言妻、
○母同前、
女子
伊集院主水久明妻、
久重
次郎兵衛　伊右衛門
○正德三年癸巳七月朔日死、法名大翁徵通居士、
女子
隅州曽於郡之士中瀨佐左衛門兼滿妻、
僧
幼名龜三郎
○日州志布志永泰寺住持呑國和尚、
久長
宗三郎
○同所上松次郎右衛門之爲猶子、
○元禄七年甲戌九月十六日死、法名本然儀空居士、

安號
三次郎　次左衛門
○延寶七年己未誕生、母薩州鹿兒島之士木村彌兵衛重家女、
女子
○母薩州鹿兒島之士木村鄕右衛門重治女、
安穩
伊右衛門
○正德五年乙未二月誕生、母同前、
△忠種
新次郎　三郎兵衛
○新次郎久次戰死、而無後嗣、慈母奉訴之於　太守義久公、令姪忠種相續當家、實木塲新次郎子也、
○承應三年甲午死、法号開田元盛居士、
女子

鎌田源助政武之妻、

○母新穂讃岐女、

△久包

初久通　又久寛　乙千代　次右衛門　十郎兵衛

次右衛門　入道道鉄、

○寛永九年壬申二月十七日誕生、母同前、

○久包自幼少奉仕　太守光久公、承應二年癸巳之春、

忝蒙　嚴命以爲忠種之後嗣、實喜入久右衛門久守

子也、母仁禮藏人頼景女也、

○於隅州國分小村御假亭奉見　光久公、鎌田藏人政

昭執達之也、

○寛文十一年辛亥四月朔日、奉　綱久公之高命、改

姶良號碇山、是以爲元祖之稱號兼日所以奉願之也、

○延寶六年戊午之極月、　太守光久公使喜入次兵衛

久甫蒙　嚴命、而勤御近習役、時加賜新恩地百石、

○同七年己未二月、被補日當山地頭職、

○同八年庚申七月二十日、轉日當山賜薩州高城地頭

職、

○天和三年癸亥三月六日、轉高城賜山田地頭、

○貞享元年甲子九月二十九日、轉山田被補樋脇地頭、

○寶永七年庚寅十二月朔日死、法號道鐵秀石居士、

△久與

初久富　長十郎　仲左衛門

○延寶二年甲寅九月十五日誕生、母本田吉右衛門親

直女、

○天和元年辛酉十二月二十八日、奉見于　拾遺綱貴

公、獻上太刀・馬代、

○正德三年癸巳、肝屬兼柄傳　命曰、久與之家至嫡

子者許久之字、二男以下以安之字可用實名、因賜

證帖也、

久規

初長次郎　次右衛門

○元禄七年辛亥九月三十日誕生、母猿渡仲右衛門信

方女、

○寶永三年丙戌三月朔日、奉見于　太守吉貴公、獻
上太刀・馬代、

女子

○母吉田分右衛門信方女、

安次

傳九郎

○寶永八年（即正德元年也）辛卯正月十三日誕生、母同前、

（表紙）

相馬氏

一流

新編島津氏世錄支流系圖

相馬氏系圖

『五代太守貞久三男』
師久

上總三郎　從五位下　大夫判官

○正中二年乙丑八月十六日誕生、母大友兵部太輔親張女、

○永和二年丙辰三月廿一日卒、年五十二、法號定山道貞、

伊久

上總介　大夫判官

○貞和三年丁亥二月朔日誕生、

○應永十四年丁亥四月六日卒、年六十一、法號久哲道觀、

久安

號碇山、三郎左衛門尉

○於肥之後州白川戰死、

守久

播磨守　大夫判官　○法號義山道仁、

○嚴親伊久有可去畀守護職於忠朝之子鹽房丸之命、守久深以辭焉、由是匪啻父子不會、爲冰炭催兵革及合戰矣、雖然隨　陸奥守元久主之言爲和諧也、

『元祖』
△忠朝

初忠明　山城守　上總介　入道名道世、

○應安二年己酉八月三日誕生、

447

『正文在串木野頂峯院』

○敬白

奉寄進冠嶽山三所權現、

限永代薩摩郡内天辰谷口参段叉、

右、寄進志趣、偏只爲天長地久御願圓滿、且爲家、且爲當代弓箭、且爲子〻孫〻、或郷内安穩、或諸人快樂、爲取分息災延命、恒受安全、朝夕之祈禱奉憑故也、

依志趣若件、

應永十二天ひのとの亥二月九日　　嶋津山城守藤原忠朝（花押）

『上書有之』「天辰寄進田文書」

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七六〇号文書ト同文ナリ）

448

『正文在串木野頂峯院』

○敬白

冠嶽山三所こんけんにりうくわんの事、

右、こんとの世上目出度候て、弓箭のうんをひらき候ハ、、よせ田しほ入の本寄進の事かへし申へく候、かさね候て一所寄進申へく候、せい〳〵の御きたうをいたされ候へく候、仍くわん書如斯、

應永十二年ひのとの亥八月廿一日　　嶋津山城守藤原忠朝（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七六四号文書ト同文ナリ）

449

『正文在串木野頂峯院』

○冠嶽權現御供田

薩摩國薩摩郡之内勝目迫壹町如本返付申候了、

右、件在所者、早守先例、可有領知狀如件、

應永十九年二月廿八日　　島津道世（花押）

『上書有之』（山ノ誤カ）

嶋津大城守　　沙弥道世

（本文書ハ「旧記雑録前編二」八七一号文書ト同文ナリ）

450

『正文在田布施衆前田彌左衛門重信』

○宮子若狭守

久種

應永廿八年十一月十五日　忠朝（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一〇〇九号文書ト同文ナリ）

○相馬氏系圖曰、應永十五年戊子正月三日、於川内平佐安之城自害、年四十、以軍記考之、則不然、未知是乎否、法號梅巖道眞、謚號慈雲院、

久照

『三イ』又五郎　治部少輔　號北、○法名道言、

『二代』△忠氏

鹽房丸　彦二郎　三郎兵衛尉『左衛門尉イ』

○明徳二年辛未、於大姶良八幡城誕生、佗腹、

○文安二年乙丑九月一日、於肥之後州山鹿莊死、年五十五、法號心翁了性、謚號瑞龍寺、

干扇

出家、母同前、

女子

上總禪尼　林香庵住持、『幸イ』

女子

禪尼、伊集院圓通庵第三代住持、

忠長

三郎左衛門尉　上總介　母二階堂某女、

○初薙髪名繁藏主、伊集院廣濟寺之爲住持、後還俗如斯也、

『正文在田布施衆二階堂三左衛門豐行』

○薩摩國之内田布施『欠』之事、

右、任先例、可致沙汰之狀如件、

康正三年卯月廿六日　　忠長（花押）

二階堂殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一三六三号文書ト同文ナリ）

○山北四个所一揆之時、澁谷黨立忠長於大將、爲謀略致合戰之際、我軍敗欲退渡祁答院虎居川、則櫓折楫摧、悉沈渡舟、與諸卒俱溺死也、

○法號了嶽常智、

伊忠

彦三郎　左衛門尉

○應永十年癸未八月三日誕生、母與忠長同、

○十有五歲之時、從兄久世爲　太守所圍、而自殺、伊忠將殉、則上野加賀守強以諫之、故得全命、而遁身於求麻、其後赴洛陽歷年月、嘉吉元年辛酉六月廿四日、赤松滿祐弑大樹義教卿、越京師一亂、同七月十八日、『廿日イ』於權大納言義嗣公旗下、遂戰死矣、年卅九、法號義翁道忠、

『三代』
△忠成

彦二郎　山城守　初號相馬、

○永享十一年己未十月二日誕生、

○當家五代　太守上總介貞久法師道鑒、讓與于　師久國郡之內、有下總國相馬郡、因爲相續之地、故初冒相馬之號者也、

○永正八年辛未四月四日死去、年七十三、法號久嶽良椿、

久國

上總介　○法名雲嶽道禪、

女子

村田越後守妻、○法號得安妙薫、

『四代』
△久續

彦二郎　山城守

○文明十二年庚子三月八日誕生、母佐々木道德女、

○永祿六年癸未十二月廿九日卒、年八十四、法號深阿眞久、

久森

號黑川、　彌五郎　○法名長川忠壽、

『五代』
△裕忠

彦二郎

○明應九年庚申九月廿五日誕生、母曽祇女、

○永正十五年己卯十二月十二日自害、年十九、法號歡笑道喜、

女子

法號深譽妙心、

『六代』

△久伯

初祐久　越前房

○永正七年庚午八月十六日誕生、母佐竹伯耆守義明女也、

○久伯者元豐之前州人宇佐美濃守祐泰第四息子也、大永之始、祐泰遭殞大内義興、掣身於長州、其頃久伯孤、辭其荘園草野（アカ）・三保・鏡山・夏脇等、而投寒山密乘院、初斟役小角之餘流、而卿佛乘耳、遂漂淪日州飯野來、于時彦二郎裕忠夭死其跡將絶、於茲久續自議、使久伯妻其女而爲嗣子也、

○北郷左衛門尉時久相攸於下財部營作宮寺、勸請新霧島、欲久伯於補座主職、應諾而後從志布志移其地矣、實永禄四年也、尒來爲北郷氏之家臣也、

○天正六年戊寅十二月十四日死去、年六十九、法名宗祐、

『七代』

△祐忠

善財房

○弘治元年乙卯二月十日誕生、

○寛永十二年乙亥十二月二十五日死、年八十一、法名覺吽（ウン）、

安久――女子

千代丸　右近

○永禄元年戊午七月二十一日誕生、

○慶長三年戊戌七月二日死、年四十一、法名心翁道安、

女子

知覽右京久猶妻、

○於種子島死、法名妙蓮、

忠恕

勝善房

○永禄八年乙丑五月十五日誕生、

○正保元年甲申十月二十九日死、年八十、法名三

友、

忠尊
實相房
○元龜元年庚午六月四日誕生、
○寛永十四年丁丑九月十三日死、年六十八、法名道教、

久信
善兵衛
○於泉州堺死、法名祐信、
○無子孫、

女子

忠次
初久與　良泉房　覺巖法師
○天正十六年戊子十月二十日誕生、母長井若狹利貞女也、
○法名宥翁、

久遠
忠三郎　彌五左衛門　內記　助左衛門
○元和七年辛酉十一月四日誕生、母稅所五兵衛敦貞女、
○寛文七年丁未十二月二十五日、於武州江戸死、法名明室貞静居士、

女子
內藤善左衛門利眞妻、
○母同前、

女子
相馬七右衛門久雅妻、
○母財部法師成賢女、

忠經
初久晴　福壽　民部左衛門　勝善房
○慶安二年己丑十月六日誕生、母同前、
○貞享三年丙寅五月二十二日死、法名大法師忠經、

氏副
初久茂　長壽　金彌　十左衛門　彌五右衛門
○承應元年壬辰六月二十一日誕生、母同前、
○受家嫡之令實名改氏字、且稱家號成山、
忠繼
忠三郎
○萬治二年十二月朔日誕生、母同前、
○寛文四年甲辰七月十二日死、法名如幻、
女子
日置右近兵衛忠質妻、他腹、

氏有
初忠宣　久馬之助　內記　勝善房
○寛文九年己酉八月三日誕生、母內藤七左衛門利繼女、
○受家嫡之令實名改氏字、且稱家號於成山、
氏興
初久喬　又忠雄　三次郎　伴左衛門
○延寶五年丁巳七月十四日誕生、母同前、
○實名改氏字、且號成山、
女子
○母野邊仲助盛辰女、

氏敷
初久重　忠洪　久馬之助　助左衛門
○元禄六年癸酉二月朔日誕生、母內藤長左衛門利昌女、
女子
○母同前、
氏昌
彦七郎
○寶永四年丁亥六月朔日誕生、母同前、

『八代』
△忠清
長善房
○天正三年乙亥十月二十四日誕生、母財部法師舜盛

女也、

○寛永二年乙丑八月一日死、歳五十一、法名節巌、

久岑

良圓房

○天正十一年癸未正月二十日誕生、母同前、

○正保二年乙酉七月二十六日死、歳六十三、法名松翁、

元忠

宮松

○慶長十三年戊申正月十五日誕生、母佐佐木平左衛門基綱女、

○元和二年丙辰八月十六日早世、法名自性、

忠益

吉左衛門　勝善房

○慶長十九年甲寅七月二十四日誕生、母荒川大煩儀定女也、

○久岑雖有一子早世、以故爲養子、實相馬見性房久東之嫡子也、

○爲霧島山錫杖院・金剛院・荒嶽權現之座主職、

○延寶四年丙辰七月七日死、年六十三、法名權大僧都法師忠益、

女子

忠益妻、

○母同元忠、

女子

北郷九左衛門久林妻、

○母良圓房久岑女、

久雅

伊織助　七右衛門　長存房

○正保三年丙戌三月二十二日誕生、母同前、

○寶永四年丁亥五月六日死、法名權大僧都法印久惟、

久通

音松

○承應元年壬辰九月二十五日誕生、母同前、
○石坂仁右衛門忠堯之養子也、

忠興
左門　太仲　太次兵衛　善光房
○寛文九年甲辰五月八日誕生、母相馬助左衛門久遠女、
○寶永五年戊子九月十八日死、年四十五、法名大法師忠興、

久武
吉太夫
○延寶三年乙卯十一月四日誕生、母同前、
○種子田齊因重賢之養子也、

氏陽
初忠延　三位　新五兵衛
○貞享三年丙寅閏三月四日誕生、母得能加兵衛盛良女、

○受家嫡之令實名改氏字、且稱家號於成山、

女子
○母同前、

女子
○母有馬五右衛門純治女、

久東
初良忠　菊壽　見性房
○慶長元年丙申二月十日誕生、母長井法師頼盛女也、
○慶長十九年甲寅二月九日自害、年十九、法名義室、

忠益
宮菊
○幼年有出家之約、故不相續父之跡、後年良圓房久岑之爲猶子妻其女也、

女子
菊池主水重高妻、

○母同前、

『九代』
△忠仍

千菊　傳左衛門

○慶長十六年辛亥二月二十八日誕生、母同前、

○兄久東早世、故相續忠清之遺跡者也、

○北鄉家之臣而鷹尾口之地頭也、

○貞享二年乙丑十月死、七十五、法名久巴、

『十代』
△久賢

千菊　長十郎　三郎右衛門　仲右衛門

○寛永十三年丙子十月二十三日誕生、母北鄉右衛門忠辰女、

○北鄉家之臣鷹尾口之地頭也、

○正德三年癸巳正月二十一日死、法名天德梅雲居士、

忠村

初久憲　主馬　七郎兵衛

○母同前、

○北鄉內藏助久和養子、

女子

土持吉右衛門綱寛妻、

『十一代』
△氏芳

初忠堯　千壽　主税　藤左衛門

○明暦四年戊戌（即萬治元年）二月二十八日誕生、母伊集院清左衛門忠洪女、

○北鄉家之臣而勤家老職、且弓場田口・志和池等之地頭也、

○正德三年春、太守吉貴公降命於久龍曰、於家臣相馬氏者、自今以後實名賜氏字、且於嫡家者如元冒相馬、二男以下之家者可改家號於成山、仍久龍件件書與忠堯、以故忠堯改氏字冒相馬氏、庶族亦改氏字稱家號於成山者也、

久知

熊之助　傳左衛門

○寛文七年丁未正月八日誕生、母谷山了兵衛秀親女、

○伊集院喜右衛門忠陳之養子也、

女子

氏福妻、

○母北郷九郎右衛門久政女、

氏福

初忠照　又忠里　傳彌　彌市右衛門

○元禄二年己巳正月十七日誕生、母伊集院喜右衛門

忠陳女、

○忠堯有一女無男子、故嫁一女而爲養子、實伊集院

傳左衛門久知之嬬子也、

（表紙）

新編島津氏世錄支流系圖

薩州
用久
一流

452

薩州氏系圖

『元祖』
△用久――
初好久　中持久　薩摩守　母伊東氏女也、
○九代之　太守陸奥守久豐公二男也、
『正文在書入衆志志目正兵衛義辰肝付伴兵衛兼屋旗下』
○嶋津御庄大隅方祢寢院大祢寢内瀨筒村地頭職、爲
給分所宛行也、早任先例、可領知、并先知行代地
事、闕所次第可致其沙汰之狀如件、
永享五年五月十九日　　好久（花押）
冨山殿
（本文書ハ「旧記雜録前編二」一一四〇号文書ト同文ナリ）

453

『正文在澁谷如兵衛重增』
○嶋津御庄薩摩方郡之内、白波市并中嶋之事、爲析
所所宛行也、早任先例、不可有相違領知狀如件、
永享七年五月廿四日　　好久（花押）
（本文書ハ「旧記雜録前編二」一一六九号文書ト同文ナリ）

454

『正文在田代縫殿清長』
○嶋津御庄大隅方田代村一圓并佐多内川口三栗事、
依爲本領所宛行也、早任先例、不可有相違領知狀
如件、
永享七年六月九日　　好久（花押）
田代肥前守（清定）殿
（本文書ハ「旧記雜録前編二」一一七一号文書ト同文ナリ）

455

『正文在福昌寺』

○　（花押）

福昌寺慧燈院各〻田畠寄進狀

一薩摩國麑嶋郡花棚村之内琵琶田三段、本田安了寄進狀、有義天御判、

一薩摩國麑嶋郡西田村之内水田五段、益山傑叟寄進狀、爲二親也、有義天御判、

一薩摩國麑島郡西田之村内水田二段、住吉大明神義天御寄進之狀、

一向嶋西堂之村平田重宗爲玄親禪門寄進狀、有義天御判、

一谷山福本之内住吉之内水田五段、祢寢山本殿寄進狀、爲圓清禪門於河邊打死之時、

一谷山中村之内水田一町、平田重宗寄進此内五段者、爲慈母有義天御判、

一麑嶋郡岳之村内水田一町、蒲生美濃守寄進狀、有貴久御判、

一向嶋野尻村貴久御寄進爲義天毎日靈供、

一向嶋赤水之内園一ヶ所、高崎太傳禪門寄進狀有義天御判、

右、彼寄進狀者、　慧燈院殿義天大禪定門各〻有御判、依寺家回禄彼重書失却、仍爲停止萬雜公事諸役等、本寺大檀那持久御判重而取置者也、若後代於彼寺領有違乱時者、以彼狀可有沙汰者也、

永享十一年二月十八日

前惣持中翁老衲誌之（朱印）（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一二一六号・一二三三号文書ト同文ナリ）

456

『正文在福昌寺』

○奉寄進

薩摩國麑嶋郡坂本之内山下水田三段者

右、彼所領者、爲壽山久公大師（姉）菩提料、奉寄進惠燈院所也、若於此所有違乱輩者、不可爲持久子孫者也、仍爲後代寄進之狀如件、

永享十一年二月十八日　持久（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一二一五号・一二三四号文書ト同文ナリ）

457

『正文在安養院』

○奉寄進　諏訪大明神

鹿兒嶋郡上伊敷流田之内門田三段（此内一段嶺大樂寺稻荷同二段諏方田二氣之彼岸）、御祈禱大般若經於于御拜殿、可有轉讀狀如件、

永享十一年六月吉日　　持久（花押）

諏方座主律師慶任房

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一二一七号文書ト同文ナリ）

458

『正文在本田作左衛門宣親』『持久守護職之時御判形』

○嶋津庄大隅方溝邊六町・同城并向嶋内有村事、爲給分所宛行也、早任先例、領知不可有相違狀如件、

嘉吉二年三月十七日　　持久（花押）

本田殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一二八〇号文書ト同文ナリ）

○長禄三年己卯二月廿九日卒、法名道存號松夫、龍光寺、

—女子

『二代』

△國久—

太守立久公簾中、號舟航、

三郎太郎　薩摩守　名齊爲甫、

○嘉吉元年辛酉誕生、

○立久公之時、爲守護代者六个年也、

459

『正文在阿久根蓮華寺』

○改年之御吉賀千喜万幸、不可有際限候、珎重〻幸甚〻、抑年明候者、最前之御祝言可申上候處、此境ニ依逗留候無其分候、如何樣近日可罷越候間、以面上心事可申承候、次之時者可預御披露候、恐惶謹言、

正月十七日　　藤原國久（花押）

進上　侍者禪師御中

（本文書ハ「旧記雜録附録一」九号文書ト同文ナリ）

『正文在阿久根蓮華寺』

○薩州阿久根院連華寺之叀、号開山南溪和尚并檀那開山藤原國久、於子〻孫〻、此寺他門之妨候者、以此狀、可有其沙汰候、仍爲後日如件、

文明二年庚寅十月九日　藤原國久（花押）

連華寺監寺法盛侍者

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一四六四号文書ト同文ナリ）

『正文在出水ノ内野田感應寺』

○天辰周防入道淨慶爲菩提依望申、山門院西方之内水田松本三段付畠地二所之事、限永〻、令任付所也、仍所定如件、

文明十年十月十五日　嶋津薩摩入道國久（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一五二三号文書ト同文ナリ）

○明應七年戊午七月廿九日『八イ』卒、年五十八、法號桂林國久、號保泉寺、

延久

中務大輔　下野守　大田氏元祖也、入道名爲定、

子孫記別紙、

忠量『續久イ』

彈正忠

『三代』

△成久

初重久　字菊千代丸　三郎太郎　薩摩守

○三月四日卒、法號天倫西賢、

忠貞

忠綱

駿河守　大野氏祖也、子孫記別紙、

秀久

三郎九郎　伊勢守　吉利氏祖、子孫記別紙、

爲心『威津イ』

南花和尚　成應寺住持、

女子

光久

又次郎　越後守　寺山氏祖、子孫記別紙、

└女子
　菱刈大和守重副室、
└女子
　佐多氏某室、
└女子
　御東
『四代』
└△忠興
　字初千代丸　三郎太郎　薩摩守　母修理亮忠廉
　女也、

462

『在清敷衆山崎助左衛門』

○永正三年七月十一日、寄田於土川与申在所合戰候、比志嶋殿討取候而、頸を和泉へ致持參候、　薩州忠興様上意之趣者、無比類之通蒙御感候、今時分高名之人、大略民部左衛門と被成官途之條、如其被仰付候由思食候、如何被存候哉与老者中へ御尋之上意候キ、尤可然之由、阿多彈州被申候、然者民部左衛門尉ニ被任候而、塗籠之御多羅枝給候、此官途之事、於子孫代〻如此候由、可致覺悟候条、書付候了、此御弓箭之事、從始種〻雖御申候、無御承引、自　屋形様被召懸候而、其後三年ニ成候時、薩州さま御理運無紛候事ニ候とて、福昌寺天雄東堂様和泉へ御越、被入御手色〻御意候て、六月かこしまへ、（本ノマヽ）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一七九四号文書ト同文ナリ）

463

『正文在本田作左衛門宣親』

○　『欠』

改年之御大慶千喜万祥雖申上支舊候、猶更不可有際限候、多幸〻、抑就如此之御祝詞、任佳例捧慶書候、如何様以參上自他御滿足之儀、重疊可申加候、仍五明貳本致進上候、誠万歳不易奉表御祝儀計候、以此旨、可預御披露候、恐惶敬白、

正月十一日　　薩摩守忠興（花押）

進上　本田因幡守殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」二二二号文書ト同文ナリ）

○大永五年乙酉十月九日卒、法號隆岳興公、

女子

比丘尼、松岩妙泉、雪慶院、

筑前守

女子

實久室、上之城　妙朝、

伊勢守

號西川、

女子

越後守室、

上野守

祁答院駿河守

又十郎

女子

満淨寺『成イ』

女子

常陸守室、

法息寺『恩イ』

464

女子

太守忠兼初室、○法號雪山了昌『香イ』、

△久意『五代』

初實久　三郎太郎　八郎左衛門尉　薩摩守

『正文在奈良原清左衛門長』

○就今度弓矢、子息三人高名之事無比類候條〻、無礼之至候、何様其方へ可罷下候之間、期面候事候、恐〻謹言、

卯月九日　實久（花押）

奈良原殿

『上包』奈良原殿　實久

八郎左衛門尉

（本文書ハ「旧記雑録附録一」二二〇号文書ト同文ナリ）

『正文有之』

追而、自然境目隙入子細候者、以親類中申上肝要候、何方へも從其方可被成御意見候、御奉公此旨候、

勝久樣就御光儀、先日東光寺爲使僧進之候処、御奉公之心底承候而、千秋万歳可然存候、其當概眞幸へ銘〻申入候、定而可爲御悦喜候、此節之事者、各自身參上專一候、殊更其方之支者、御奉公無余儀候、御分別之前候間、不及申候、方〻御奉公之義無餘儀被申候間、我〻事來月五日、眞幸へ參上可申之覺悟候、其砌無油断賴存候、何樣於眞幸面談可申候間、不能詳候、恐〻謹言、

七月廿八日　　實久（花押）

伊地知周防守殿　御宿所

（本文書ハ「旧記雜録附録一」六四〇号文書ト同文ナリ）

『正文在出水感應寺』

○薩摩國感應寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

天文九年十一月拾六日　　嶋津實久（花押）

從薫首座

『上包』

從薫首座　　嶋津實久（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編一」二三九八号文書ト同文ナリ）

○先是　太守忠治・忠隆早世、以故其弟忠兼爲太守、娶予之姉、使我掌國家政事、漸夫婦不和而離別、予亦不合　太守之意、而爲氷炭矣、丁此之時、使島津相模守忠良司國政、且息男虎壽丸爲猶子、加冠稱又三郎貴久、禪守護職、去麑島隱伊作、然而不經幾程、匪啻悔返其約再入麑島、爲國家之大亂、實久亦再會而雖在于麑島、漸漸武威衰微、而自加世田至薩摩郡、五ヶ年中令不知行、唯和泉四箇所（和泉・高尾野・野田・阿久根）所以領知也、

法號昌嶽源久、

―大隅守

女子
禰寝氏室、
女子
種子島某室、
女子
新納四郎忠茂室、
攝津守
山城守
中務
女子
女子
女子
いせじやう加護結婚、
女子
菱刈大和守重猛入道天眼室、
女子
祁答院義重室、

467

『六代』
△義虎
初晴久　次陽久　次義利　三郎太郎　薩摩守
母成久女也、
○在京之際、賜
将軍家諱字、是以改陽久稱義利、又改爲義虎也、

『正文在阿久根蓮華寺』
○爰蓮華前住勅佛智慈勝禪師仁室和尚、寺外被求隱
之居所、而以有亡父昌岳居士深志、就(旧于)予懇望之条、
彼居号昌岳庵、万歳〻〻多幸〻〻、
于時弘治三年十二月吉日
薩摩守藤原陽久（花押）
昌岳庵主
玉床下
（本文書ハ「旧記雑録後編一」九六号文書ト同文ナリ）

468

『正文在出水専修寺』
○當寺佛法興隆之事、尤以神妙也、弥可奉抽宝祚延
長之懇祈之由者、

470

天氣所候也、仍執達如件、

永禄六年七月十日　　左大弁（花押）

専修寺弥阿上人御房

469

『上包』

専修寺弥阿上人御房　　左大弁俊光

（本文書ハ「旧記雑録後編一」二五八号文書ト同文ナリ）

『正文在出水専修寺』

○今度寄宿之處、種〻馳走神妙候、然者當寺之儀、

向後相定勅願所、可爲家來之狀如件、

『天正四年』

三月三日　　（花押）

専修寺上人

『上包』

▽㊐謹上△　専修寺上人　　（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編一」八三一号文書ト同文ナリ）

『在出水専修寺』『先住覺書也』

○　関白殿様御下向之事、

天正三年乙亥

拾二月廿五日

御名乗　前久と申奉る、

御供之人數

伊勢因幡守殿

貞知

因州被官

湯浅掃部助

小者岩松

武田竹松殿

小者三郎

福壽軒

小者吉六

二俱左馬助殿

倉光主水助殿

森弥十郎殿

大塚新二郎殿

関白殿様御中間

与左衛門尉

天正四年三月拾七日ニ鹿兒嶋へ御下向候、同年七月二日ニ、從鹿兒嶋御上候而、同年八月廿二日ニ、如八代之御上候、

天正四年二月拾四日之夜、於川原被召出、殿樣御面を以高城下之坊被下候、御前ニ市來加賀守殿御座候而御承候、　関白殿樣御下向、前代未聞に候、御寄宿被成候御事、　到寺家後代可相殘爲證據、

下坊被仰付候由

上意候、

天正四年拾月末ニ、抱節八代へ被召候而罷上、霜月初罷下候、　関白殿樣より瀬崎川原毛之御馬被下候、於八代之事也、抱節茂御刀一腰・御馬一疋御家門樣へ致進上候、又　御家門樣より御書被下候事、鹿兒嶋・八代・豊州、又從京都數〻之　御書令　頂戴候、

（本文書ハ「旧記雜録後編一」八二五号文書ト同文ナリ）

471

『正文在出水專修寺』

○當寺之事、可号　勅願所之由被聞召旱、然者弥令專佛法興隆之沙汰、可奉抽國家安泰・國郡無爲之懇祈之由者、

天氣所候也、仍執達如件、

『天正五年』
正月五日　　右中辨（花押）

專修寺弥阿上人

『上包』
專修寺弥阿上人　　右中辨淳光

（本文書ハ「旧記雜録後編一」九〇二号文書ト同文ナリ）

472

『正文在出水專修寺』

○去天正三年乙亥拾貳月廿五日、　関白殿前久樣御下向之刻、到專修寺被成　尊宿、翌年三月十七日、麑嶋江被成、同七月二日、還御之砌、又當寺被寄高駕、同八月廿二日、及御歸洛、御滯在中万事被抽馳走之旨、依尊感當寺可被任　勅願所御一翰頂戴之儀、前代未聞、至我等茂大悦不過之候、然者

今年戊寅八月廿二日、　御綸旨被下賜之段珎重候、
右之趣爲祝言進此書候、恐〻謹言、
天正六年
八月吉日　　藤原義虎（花押）
専修寺

『上包』
専修寺　　薩摩守
藤原義虎

（本文書ハ「旧記雑録後編一」九九七号文書ト同文ナリ）

『正文在出水専修寺』

○去天正三年乙亥十二月廿五日、到當所和泉庄、
関白殿前久様御下向之刻、貴寺江被成　尊宿候之
處、種〻被抽御馳走候、依　尊感専修寺之事可被
任　勅願所之段被　仰出、今年天正六戊寅、　御倫（綸カ）
旨御頂戴之儀、御前代未聞、其身之御規模永代之
亀鑑彼段候、仍從殿様爲御悦被成御書候、彼是御
大慶奉察候、萬賀以參上可申入候、猶可得貴意候、
恐惶謹言、
天正六戊寅
八月吉日　　家諸（花押）

則武（花押）
忠雄（花押）

専修寺
參御同宿中
佐多大和守
寄田内記允
市來加賀守
忠雄

『上包』
専修寺
參同宿中

（本文書ハ「旧記雑録後編一」九九六号文書ト同文ナリ）

○天正十三年乙酉七月廿五日卒、法號大通元廣庵主、
女子
巽伯耆守妻、母川上上野守忠克女也、
女子
甑島小川某妻、
忠繼
初忠豊　號三葉、東市正　左近大夫　母川上
上野守忠克女也、

○領水引居住于當所矣、
○有八幡大菩薩靈夢之得告、而後號三葉也、
○元和七年十二月十一日死、法號用窓竹庵、

久三郎
○又太郎忠辰改易之後、他國流浪、
忠吉
万千代丸　久八
○南郷治部左衛門爲猶子、
忠角
千三郎　左馬助
○大田吉兵衛尉忠綱爲猶子、
女子
佐多吉左衛門久良妻、
女子
志岐藤右衛門尉親重室、他腹、
『七代』
△忠辰

初忠永　又太郎　薩摩守
○天文廿二年癸丑誕生、母　太守義久公長女、
○文禄元年壬辰、就朝鮮國征伐、賜
殿下秀吉公朱印御教書、記左、

『寫』
○其方儀陣普請等者、兵庫頭一手ニ可仕候、薩摩一國義弘爲進止被　仰付上者、可成其意候、殊更不遁間柄之儀候、自他可然様ニ互入魂尤候、猶二位法印・石田治部少輔可申候也、
『文禄元』正月十九日　御朱印
嶋津薩摩守とのへ
（本文書ハ「旧記雜録後編二」八一二号文書ト同文ナリ）

○文禄元年、依
殿下秀吉公之有嚴命、催師旅迄孟夏、渡海于朝鮮國也、
○文禄二年之春、罹病痾不得勞軍務、而徒以在釜山

浦矣、匪啻不到軍陣、密揚歸帆、經七个日著名護屋之岸、則有風聞之難遁、曰、薩摩守忠辰雖渡朝鮮國、不赴軍陣徒緩然、而在釜山之海浦矣、此事既達

殿下之上聽、我之家危宛如風燈也、聞此變事、則不歸出水、再渡楫朝鮮國、而在加德島矣、此間有改易之　嚴命、仍病惱逐日增重火急不經數日、八月二十七日、死異國之島嶼畢、年四十一、法號通津宗要大居士、

○前太守龍伯尊君曰、薩摩守忠辰對天下盡不忠、匪啻會改易之難遁、於當家亦瑕瑾非甚是乎、且復先是、　殿下秀吉公西征之時、不發一矢無一戰功、而却爲指南謀我之外城、其罪不容誅、由此絕彼家之後矣、至子子孫孫勿立後嗣云云、

忠隣

三郎次郎

○爲島津左衛門督歳久猶子、

忠清

又助　備前守

○母　太守義久公長女、

○元龜二年辛未、於出水誕生矣、後依于兄忠辰之罪、與母堂及弟忠富・忠豐、但爲小西攝津守行長肥後守都領主之預、在肥後州者有年于茲、慶長五年庚子九月十四日、濃州關原之役關西之軍敗、而行長就囚遂遭誅、繇焉後移住居同州熊本加藤肥後守清正之領土、　太守義久公愁之、而徵之、忠清之姪島津下總守常久三郎次郎忠隣之男亦欲邀之、遣舩促歸國矣、慶長十四年十二月三日、忠清牽一女十歳一男七歳着舩于薩州阿久根、來乎麑府胥處焉、

○忠清之女爲　太守家久公妾、生　光久公、遂爲國夫人、依焉忠清受恩遇最渥矣、

○息男忠影以　太守之命、相續于新納家、故忠清佐忠影而在忠影之宅矣、元和六年庚申正月五日、忠清病頻漸、達于　家久公聽　公辱與　君夫人同扛尊駕乎忠影之宅、視東首諸牀褥歎永訣籍甚也、島津又五郎久慶下總守常久之男・島津大膳忠榮・澁谷石見重

國等供奉來矣、而還　尊駕、少焉示屬纊、享年五十、號恕岳院殿節翁玄忠大禪定門、葬興國寺、

女子

太守家久公御簾中、

○慶長五庚子年、誕生于肥後、母皆吉久右衛門續能小西攝津守行長之臣之女、

○愛幸于　太守家久公、生　光久公十九代太守及北鄕式部太輔久直・島津玄蕃忠記・女子二人一女者忠記之姉而嫁島津大和久章、一女者忠記之姉而嫁肝屬半兵衛兼屋　卒立爲　國夫人、

○寛永二乙丑年七月二十一日、逝於江戸第、號心應慶安大姉、安置牌于惠燈院、

忠影

又助

○慶長九年甲辰、於肥後州生、母同、

○爲新納近江久元之後嗣、號新納近江也久元者島津圖書忠長之男也、辭新納家、復于忠長之家之後、忠影相續于新納家也

○寛永五年戊戌十二月二十九日死、法號大鑑宗智、

久基

彌二郎　又作　孫四郎　六郎次郎

○元禄七甲戌年七月十三日、未上刻誕生、實新納市正久珍之二男也、母高崎權太夫能冬女、

○久基以久珍之二男、同十四年辛巳十一月十五日、登　城元服、改幼名號孫四郎久基、辱　太守綱貴公手自加冠、喜入安房久亮理髮、于時獻上于天井折六合・柳樽二荷・御太刀一腰・御馬一匹代銀一枚、　綱貴公賜御脇指和泉守忠重作、長一尺二寸二分、

○同十七年正月十四日、除前髮、

○寶永六己丑九月九日、蒙　太守吉貴公之嚴命、爲御側小姓、比志島隼人範房傳之範房者御側詰兼大御目附役督御小姓、

○忠清無後、而家斷絕九十年于茲、久基之父市正久珍者忠影之直孫也、是以歎無其後、曾奉訴之于前太守綱貴公今　太守吉貴公、越今茲寶永六載己丑十月十六日、　吉貴公以比志島範房、降命云、以久基爲忠清之後嗣、宜相續乎家焉、夫忠清者義虎之三男而兄三郎次郎忠隣爲歲久之養

嗣、則自受二男之格位者也、雖然不今以其二男之家位興之且以薩州家之胄樹之、專所追思者以忠清者慶安大姉之父之故也、因以忠清爲義虎之三男所立其後也、幸久基者忠清之玄孫也、故所　命如斯而已、許汝獻御太刀・兩種一荷矣、加旃所定家之格位者爲家老直觸（家老職者直傳令者曰、直觸是相亞于組頭列者所居也）、即日於御休息所奉拜謝、範房奏之、是爲御小姓之故也、

○同十月十六日、　吉貴公製衣服之紋、於御前拜領之定家之紋、山本仙太夫清純（御小納戸竝）授之久基、

○同十一月十三日、於　御前賜名六郎次郎、山澤十太夫盛香（御小納戸）傳之、

○同月十五日、奉獻御太刀・馬代（白銀一枚）・二種　兩樽、伸繼目之拜禮、黑葛原源左衞門忠雄執奏之、

○任物頭、

○正德元年辛卯十一月二十二日、　太守吉貴公降命曰、久基之家自今以後二男以下之稱號可改栗川、仍賜證帖矣、

○同三年癸巳三月、　太守吉貴公降　命曰、久基之家自今以後實名嫡子者代代被免久之字、二男以下可改用之字、仍賜證帖、

—忠榮—

初忠俊　藤四郎　大膳亮　越前守

○天正二年甲戌誕生、母同忠清、

○殿下秀吉公西征之時出質、則爲細川兵部大輔入道幽齊之預、在豐州小倉矣、忠辰改易之後去小倉到日州佐土原、憑豐久、則令其娣嫁忠榮、而在于此矣、豐久於關原戰死之後、豐久之家臣等起一揆、將誅忠榮、以故逃于隅州國府、請　龍伯公在彼之際、賜母堂之領地也、

○轉補于日州高原・飯野、隅州牛根等之地頭職、

○寛永十九年壬午九月晦日、於隅州牛根死、法號大雲源龍庵主、

—忠富—

初久秀　彌一郎　石見守　伯耆守　後稱重國、

○爲小西攝津守行長之預、在肥後州之際、諸士卒渡

朝鮮國、忠富亦同渡楫而在行長之旗下也、
○朝鮮國在陣之際、請　兵庫頭義弘公、而潛去行長之陣、爲　義弘公之旗下也、
○入來院又六重時於濃州關原既遂戰死、有一女無男子、由是蒙　太守之命爲猶子、妻其女連續彼家也、

忠豐

小七郎

○在肥後州而不欲歸入薩摩州、於隈本病死者也、

久基

初久盛　鎌菊　彌市郎　美作守　民部少輔

○慶長十七年壬子九月八日誕生、母入來院又六重時女、
○忠榮依無世子爲猶子、實入來院伯耆守重國子也、
○寛永二十年癸未、令麑島諸士之組分十與、此時與伊集院源助久朝、俱勤於六番組之與頭職、
○轉補于隅州牛根・薩州高尾野等之地頭職、
○延寶八年庚申正月十二日死、法名高山元白庵主、

久弘

鎌菊　彌市郎

○寛永五年戊辰八月二十四日誕生、母島津下野久元女、
○正保四年丁亥十一月十三日、於武州江戸王子村、張行於犬追物、備將軍家之台覽之時、久弘在射手之列、而奉謁將軍家矣、
○明暦元年乙未八月八日死、法號德翁離三居士、

久矩

初久明　菊千代　長七郎　民部

○承應元年壬辰四月十日誕生、母相良新右衛門長貞女、
○寛文二年壬寅春、　嗣君綱久公加冠菊千代號長七郎久明、乃賜脇刀、伊勢兵部少輔貞昭勤理髮矣、

○元禄八年乙亥二月十六日死、法號本光院道然傑心
庵主、

女子
夭亡、

女子
早世、

久近
菊千代　彌市郎　伊織
○延寶元年癸丑十月十六日誕生、母島津豐前久守女、
○天和三年癸亥十月十五日、　嗣君綱貴公加冠菊千
代、號彌市郎久近、乃賜脇刀、島津甲斐久賢勤理
髪矣、
○元禄九年丙子十一月四日、補薩州中郷之地頭職、
○正徳元年辛卯十一月二十二日、　太守吉貴公降
命曰、久近之家自今以後二男以下之稱號可改岩越、
仍頂戴御折紙矣、
○同三年癸巳三月二十五日、　太守吉貴公降　命曰、
久近之家自今以後實名嫡子代代被免久之字、二男
以下可改用之字、且頂戴御折紙矣、
○此家至初及家督等之時、拜謁于　太守公、則奉獻
御太刀・三種二荷、

經東
鎌菊　與三左衛門
○母村田與左衛門經尚女、
○爲村田郷左衛門經武之養子也、

久昌
菊千代　彌市郎
○元禄九年丙子九月十七日誕生、母伊東仁右衛門祐
秋女、
○寶永三年丙戌二月朔日、　太守吉貴公加冠菊千代、
號彌市郎久昌、時賜脇刀、島津帶刀忠雄爲理髪矣、

女子
早世、

用（ママ）

鎌菊　號岩越、

○元禄十四年辛巳二月五日誕生、母同、

女子

（表紙）

薩州庶子
大田氏

新編島津氏世錄支流系圖

大田氏系圖

『元祖』
△延久

新三郎　中務大輔　下野守　入道稱爲足、

○島津薩摩守用久次男、母　太守忠國公女也、

○領知于川邊郡居住于當所矣、

○法名物外、號道超、葬玉泉寺、

女子

島津駿河守忠綱室也、

女子

佐多伯耆守忠和室也、

『二代』
△昌久

中務大輔　下野守　入道稱世加、

○雖居于薩摩守重久旗下、獻居城川邊於　太守忠昌、以爲昵近居住于南鄉、其後居于田布施也、

○大永六年丙戌十一月、賜隅州帖佐地頭職於　太守忠兼、以故移居彼地矣、

○島津八郎左衛門尉實久專所貪婪之者、强有守護職而已、由是須運僞謀、令人企謀叛聲於達彼此者多矣、其中世加亦得其聲矣、無犯罪而大永七年丁亥五月七日、　忠兼主使日新齊誅世加畢、法號世加法尊庵主、世加寺、

忠福

新三郎

○加世田城主而居于當城之際、與薩摩守忠興忽相爲冰炭、是以明應九年庚申十一月十一日、忠興率師

475

旅來攻我之城者甚急、丁此之時伊作河內守久逸率騎步來欲增其勢忠福之救危急、于時忠興之兵對之而挑戰、久逸不幸而遂戰死矣、是亦兄昌久者久逸之孫壻、故不忍忠福之聞窮困、所以援來也、

『正文在坊津一乘院』

○ 寄進申塩屋之事、

右、薩摩國南郷之內塩屋一間、限永代、坊津龍嚴寺一乘院ニ寄進申候事実也、仍爲備末代之亀鏡、證文狀如件、

文亀二季壬戌卯月十六日

嶋津新三郎藤原朝臣忠福（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一七八一号文書ト同文ナリ）

忠聖

初忠孝　式部少輔　山城守　入道禰安心、法號孝翁等忠、

女子

伊集院氏妻也、

女子

島津常陸守勝久妻也、

女子

忠光

筑前守　母新納氏女、

忠秀

筑前守　初號大田、法名三喜、

女子

御松

○天正七年己卯誕生、母種田氏女也、

○慶長五年庚子、關之原敗績之時、從　太守簾中在大坂之宅、　簾中之歸國、

秀頼公之大老不敢許之也、丁此之時、吾請曰、代　簾中堅可在宅中、于時廿歳也、聞吾言、上

下共以莫不先美譽之後嘆息焉、實雖如斯、僉議有爲別策、以故全身從　簾中爲歸國也、於茲乎、於大坂稱忠言賞、賜三百石之領地、一期之後、讓與之於弟忠安者也、

○寛永廿一年五月十三日死、年六十七、法號海月妙知、

女子

西俣彦右衛門尉妻也、母同前、

忠安

新左衛門尉　筑前守　又兵衛尉　母同前、

又右衛門

○無子孫、

忠富

左近將監

○母同前、

○法名照庵宗鑑、

○子孫薩州川邊士也、

忠廣

又八郎

○於日州飫肥戰死、法號航舟忠得、

女子

伊佐敷加賀守遊久妻也、

女子

新納式部少輔妻也、

久存

又五郎　淡路守　初號大田、母日置氏女也、法名宗悅、

女子

藤崎雅樂助公速妻也、

久治

八郎

○於朝鮮國戰死、年二十、

久信

清右衛門

○丁幼少時爲平山氏猶子、及壯年違變、由是如元雖冒大田號、既弟久浩連續父家、故爲二男也、

○無子孫矣、

久浩

傳左衛門

○慶長十八年癸丑三月十日誕生、

○延寶六年戊午四月二十四日死、法名祖室快翁、

女子

長兵衛久次妻、

○母薩州川邊士菊野清右衛門景次女、

久次

長兵衛

○寛永二十年癸未十二月四日誕生、

○久浩無男子、故爲智養子、實薩州田布施士二宮傳兵衛忠清之三男也、其後附屬當家於一子久辰、自己者去當家復本氏、

女子

田布施士坂元正右衛門清航妻、

○母久浩女也、

用宣

初久辰　虎千代　傳左衛門

○寛文七年丁未十二月五日誕生、母同前、

用將

熊之丞

○正德元年辛卯十二月二十三日誕生、母薩州頴娃士二之方主左衛門盛庸女、

『三代』

△忠成

四郎三郎　中務大輔

○母伊作又四郎善久第二女也、

○老父世加凡誅之後、與母堂俱屈居于阿多矣、雖然實久之僞謀漸既露顕、由是當　貴久公代、賜加世

田之內田中門・久木野門、田布施之內大園門・中窪門共二十町、而後應叔父　日新齋之招、移居于加世田也、

○於加世田死、法號禪翁增參、

女子

○母同前、早世、

忠績

初忠弘　五郎三郎　治部左衛門　周防介　入道太閑、

○母同前、

○與兄忠成同時賜阿多之內宮崎、而居住于此、法號玄光宗玖庵主、

女子

○母同前、

忠與

四郎三郎

○伯父中務大輔忠成依無世子爲猶子也、

女子

吉利山城守久金妻也、

忠辰

三郎五郎　兵部少輔

○慶長十一年丙午十一月一日死、法號湧江壽泉、

久康

尾張守

○丁少之時爲時衆宗、而後還俗如斯、

僧

講代坊住持、

女子

初也嫁吉田六郎右衛門清秀、後也爲平田左近將監歲宗之妻矣、

久次

新次郎

○母大野駿河守忠宗女也、早世、無子孫矣、

女子
田尻荒五郎妻、
○母長谷場長門守治純女也、

女子
二階堂治部左衛門尉妻、
○母同前、

忠純
三郎五郎　丹後守
○天正四年丙子誕生、母同前、
○慶安五年壬辰六月二日死、年七十七、法號虎溪
俊龍居士、

久次
勝次郎
○慶長五年庚子九月十五日、於濃州關之原戰死、

女子
上原大藏大輔尚演妻也、
○母帖佐彦左衛門尉宗光女也、

忠政
三郎五郎　○母同前、
○寛永十三年丙子正月二十九日死、年二十一、法
名了岳淨然、

女子
田中平次郎光綱妻也、
○母同前、

鶴千代丸
○母同前、早世、法號幻身童子、

忠興
初久行　又久秀　或忠喜　山上　內藏之助
筑左衛門
○寛永十年癸酉四月二十三日誕生、母丹後守忠純
女也、
○忠政早世無繼子、故爲猶子、實上原大藏大輔尚
演之三男也、
○任奏者番役、補日州倉岡之地頭職、

○元禄十三年庚辰八月十七日、於武州江戸死、年六十八、法名鐵卯宗牛庵主、

女子

大田小平次忠赴妻也、

○母濱田主水重親女、

忠近

山介　佐太夫

○寛文五年乙巳二月七日誕生、母同前、

○元禄十五年壬午正月十二日死、法名松岩清林居士、

重名

初忠直　三次郎　平内　武兵衛

○寛文八年戊申九月九日誕生、母同前、

○爲三原大藏重朝之後嗣、

用致

初忠宣　八之進　内藏之助　五郎右衛門

○元禄八年乙亥三月八日誕生、母仁禮六左衛門頼宣女也、

○此家至家督及繼目等之時、奉獻御太刀、且勤小番、是家格也、

女子

肝付彈正忠兼堯妻也、

○法號鏡窻慶聚、

女子

寺山出羽守直久妻也、

『四代』

△忠與

四郎三郎　治部少輔　周防介

○天文六年丁酉誕生、

○忠成有女子二人而無男子、故爲猶子、實周防介忠績長男也、

○永禄元年戊午十二月二十七日、承　太守之令一門數多定稱號、故始號大田、是亦薩摩州阿多郡中津野村之内領知上大田門、其地省一字所以爲稱號也、

○補先阿多後加世田地頭職也、
○天正六年戊寅八月七日、於薩州加世田死、年四十二、法號澄巖銀清居士、

『五代』
△忠好
初久成　又忠綱　仙千代　四郎三郎　右近將監
吉兵衛尉
○元龜元年庚午四月二十八日、於薩州阿多誕生、母吉田若狹守宗清女也、
○文禄元年壬辰、朝鮮國征伐之時、　太守兵庫頭義弘公・又一郎久保主與諸將俱渡楫難海、忠綱有供奉之列、文禄四年、應殿下徴、　義弘公揚歸帆、直上洛越兩年、而後再渡楫于朝鮮國、此間不去膝下抽臣節也、
○大明大軍攻朝鮮國泗川新城、于時討強敵一人也、
○慶長三年戊戌之孟冬、日本諸將欲歸朝之解纜、而守順天之五將、大明艨艟遮水路不得逃去、於茲乎、義弘公爲救五家進向大明艨艟挑戰移刻、素忠綱在于　公之舩競戰之際、被矢傷於左額、忝　義弘公手自加療治得平復、所以遂供奉於伏見也、
○薩摩州出水郡爲　義弘公之領地、丁此之時、使忠綱下國爲彼地警衛者數月也、
○慶長五年庚子之秋、石田治部少輔三成拒關東起兵革、聞其急難、則與伊勢平左衛門尉・阿多長壽院等俱首途於帖佐遂上都、從于　惟新君向美濃州、東西大軍相對於關之原挑戰之際、關西之軍敗、然而　惟新君切通於大軍中、無恙入領國矣、忠綱不離　主君之傍爲軍勞矣、匪啻賜感牘且復賜百石領地、眉目之至也、
○慶長八年癸卯正月十八日、忽罹奇病不得事君上、所以入來之屈居私領也、
○慶安三年庚寅五月十六日死去、年八十一、法號超嶽常越居士、
—安鶴丸
○母同前、早世、八歳、
—女子

猿渡新助信商妻、母同前、

久千

彌市郎　治部左衛門尉

○天正七年己卯誕生、母同前、

○慶長五年九月十五日、於濃州關之原戰場討強敵一人、不去　太守之膝下、遂扈從歸國者也、賞其軍勞賜感牘及新恩五十斛之地也、感書記左、

476

『正文在吉田次郎兵衛爲清』

○今度美濃國關か原之合戰致粉骨、從其伊勢・近江・伊賀・大和・河内・和泉ニ到り、歸國之路次傳、片時茂側を不相離、抽奉公之段、神妙之至、尤感入候、仍知行五十石宛行者也、

慶長五　拾月十日　　維新◯（印）

大田弥市殿

（本文書ハ「旧記録後編三」一二三〇号文書ト同文ナリ）

○吉田美作守清孝依無世子爲猶子、故改久千稱清次、

○慶長十年乙巳四月十七日死去、年二十七、法號花岩了春居士、

女子

爲忠角妻、忠角死後再嫁桂太郎兵衛尉忠增、産一女也、

○母税所宮内少輔篤正女也、

『六代』

△忠角

千三郎　左馬頭

○天正十八年庚寅、於阿久根誕生、母栖木六郎女也、

○忠綱靡翅罹奇病蟄居、有一女無繼子、故承　太守義弘公命爲猶子、妻一女連續當家、實島津薩摩守實久之庶子三葉左近太夫忠繼入道竹庵三男也、

○太守義弘公賜法度之條目、其愛情何岱山高滄海深乎、珍載以藏櫃矣、其奉書記左、

477

『正文在大田小平次久知』

○　覚

一於御奉公之儀者、何事によらす疎略いたすましき事、
一連〻可勤軍役覚悟之事、
一父母之儀そむくましき事、
一あしき人にともなふましき事、付さと宿を取間しき事、
一手習・学文無油断可耆事、
一夫婦之中悪有間敷事、若悪儀於在之者、養子を可被召離事、
一酒女之耆可爲肝要事、
右之條〻大田吉兵衛尉養子ニ被相定付而爲御異見被　仰出事候間、時〻被遂披見、無疎意可被相守者也、
慶十四　七月朔日　　比志嶋内藏允（国詮）（花押）
本田源右衛門尉（親存）（花押）
大田千三郎殿まいる
『右續目裏判』◯（印）
（本文書ハ「旧記雑録後編四」五八九号文書ト同文ナリ）

○元和二年丙辰五月二日死去、年二十七、法號華月宗蓮居士、

『七代』アキ
△忠服
松千代丸　四郎三郎
○慶長十九年甲寅正月十四日、於隅州加治木誕生、母忠綱女也、
○寛永十四年丁丑閏三月二十九日死去、年二十四、法號固岳宗堅居士、

忠正
初忠昌　千代次　休兵衛　加賀右衛門
○元和二年丙辰三月五日誕生、母同前、
○明暦三年丁酉四月十三日、於武州江戸死去、年四十二、法名大儀、號宗田、

用好
七郎兵衛
○慶安三年庚寅四月九日誕生、母薩州山野士森隼

人女、
○元禄九年十二月九日、喜入安房久亮以富山九右衛門降　高命、使用好爲忠正之後嗣、實薩州山野士上井孫右衛門兼安之男也、

用信
庄右衛門
○貞享二年乙丑十月朔日誕生、母鎌田平右衛門女、

女子
重田幸左衛門正免妻、
○母同前、

『八代』
△久知
仙千代　四郎三郎　治部左衛門　小平次
○寛永十二年乙亥九月十日誕生、母税所因幡篤經女、
○寛文十一年辛亥三月十日死、年三十七、法名一無實性居士、

女子
深栖加右衛門政義妻、
○母桂民部忠秀女、

『九代』
△忠起
四郎三郎　小平次
○寛文二年壬寅十二月十一日誕生、母同前、
○元禄十年丁丑十二月十六日死、年三十六、法名郭雲了然居士、

忠宣
三五郎　彌左衛門
○寛文七年丁未四月十五日誕生、母同前、
○爲外伯父桂吉兵衛忠豐之猶子、

女子
伊集院權右衛門盛央妻、
○母同前、

女子
○母大田筑左衛門忠興女、

『十代』
△用松

初忠昶　平七　吉兵衛

○元禄十一年戊寅五月二十五日誕生、母小平次久知女、

○忠起無男子、故爲養子、實伊集院權右衛門盛央二男也、

○正徳三年三月二十五日、肝屬主殿兼柄降　高命曰、於用松之家者、自今以後避久忠兩字、以用字宜用實名字、故改忠昶号用松、庶族僉同之、

○此家至初及家督等之時、奉獻御太刀・二種一荷、且勤小番、是家格也、

（表紙）

薩州庶子

大野氏

新編島津氏世錄支流系圖

大野氏系圖

『元祖』
△忠綱

駿河守

○島津薩摩守國久三男、居住加世田山田也、

○法名節傳、

『二代』
△忠悟

三郎二郎　駿河守　淡路守

478

女子

忠康

右衛門太輔『淡路守イ』

○早世、法名恕山、

忠鄕

三郎五郎

○於吉松戰死、

久重

將右衛門尉　○法名仁宗、

○高山地頭也、

久武

彌三郎　右近將監　將右衛門尉

○天正十年、於伊作誕生、母寺山出羽守直久女、

『正文在大野正三郎久種』

○今度美濃國關か原之合戰致粉骨、從其伊勢・近

江・伊賀・大和・河内・和泉ニ至り、歸國之路次傳、片時茂不相離側、抽奉公之段、神妙之至、尤感入候、仍知行佰石宛行者也、

慶長五
拾月十日　惟新◯（印）

大野弥三郎殿

（本文書ハ「旧記雜録後編三」一二二一号文書等ト同文ナリ、但シ石数異動アリ、大野弥三郎宛ノモノハミエズ）

○補日州綾之地頭職、移彼地矣、
○轉補薩州甑島之地頭職、移彼地也、
○正保四年丁亥十二月十二日、於甑島死去、年六十六、法名孝山良忠居士、

久商

初久命　權三郎　權兵衛

○天正十四年丙戌誕生、
○兄久武補日州綾之地頭職、居彼地、故久商亦從、而子孫爲綾之士矣、
○寛文六年丙午七月二日死、年八十一、法名仁庵慶恕居士、

女子

村田三郎右衛門經昌妻、

久慶

權之允

○元和五年己未誕生、母日州綾士椎宮内左衛門女也、
○元禄四年辛未六月二十五日死、年七十三、法名長徳保壽居士、

久鄕

源左衛門

○寛永十八年辛巳誕生、母綾士土橋正兵衛女也、
○天和二年壬戌九月五日死、年四十二、法名義觀源恕上座、

久隈

五右衛門

○寛永十九年壬午誕生、母同前、
○綾士土橋九郎左衛門忠長依無嗣子爲養子、
女子
綾士兒玉七兵衛盛時妻、
○母同前、

用之
初久芬　權兵衛
○寛文九年己酉四月三日誕生、母綾士湯前傳兵衛女也、
用將
初久矩　菊千代　正兵衛
○寛文十二年壬子九月二十三日誕生、母同前、
○日州綾士也、

用全
正八
○元禄九年丙子十一月二十九日誕生、母日州野尻士永田堅右衛門秀房女也、
女子
○母同前、

用充
初久房　權右衛門
○元禄七年甲戌四月七日誕生、母綾士鷲巣兵右衛門重張女也、
用秋
權平
○元禄十二年己卯六月二十四日誕生、母同前、
女子
○母同前、

久恒
彌三郎
○母村田雅樂經宣女也、
○寛永五年戊辰四月十二日死、法名玉容玄瓊居士、

女子
比丘尼妙智、
○母日州綾士瀬戸口新左衛門女也、
女子
早世、
○母同前、
用常
初久種　八十郎　正三郎　正右衛門
○寛永十四年丁丑三月十日、於綾誕生、母同前、
久慶
正三郎　早世、
○母樺山諸右衛門久廣女也、
女子
吉田澤右衛門兼清妻、
○母薩州坊津士入田市郎親照女也、
女子
夭亡、

○母妾、
久近
源之丞　爲右衛門
○寛永十一年甲戌九月十二日誕生、母藤田猪右衛門種昌女也、
○久種依無嗣子爲養子、實隅州恒吉士岩下源右衛門重明之三男也、
○寶永七年庚寅九月三日死、年七十七、法名丹溪宗心居士、
女子
長崎甚左衛門義之妻、
○母薩州久志士久木元吉右衛門信之女也、
女子
○母同前、
用春
初久當　源次　源之允　源兵衛
○寛文七年丁未九月二十九日誕生、母同前、

○父久近不家督而死、故久當相續祖父久種之跡、
○此家避久忠字以用字可爲實名字、家嫡七郎太夫
久矩受　命傳之、故改用字、

長十郎
○元禄十一年戊寅四月九日誕生、母河野休左衛門通
弘女也、
○同十二年己卯五月十六日夭亡、法名玄露童子、

女子
○母花田玄喜行充女也、

女子
○母同前、

『三代』
△忠元
三郎次郎　太郎左衛門尉　駿河守
○法名花岩忠榮、

直久
出羽守

○寺山越後守光久爲猶子、

女子
大野將右衛門尉久重室、

『四代』
△忠宗
三郎次郎　治部少輔　駿河守
○有違　太守義久主之事、而文禄元年、所以誅戮於
川邊堂尾者也、法名蓮忠、

女子
新納近江守武久室、

女子
妙春、
○忠宗有一女無男子、故請樺山兵部太輔忠助之二男
七郎久高、爲猶子妻一女、已産二女之後、文禄元
年、嚴親忠宗既被凡誅、由是久高亦屈居寺院矣、
于時　又一郎久保主朝鮮國渡楫之時、徵久高於屈
居、去大野如元爲樺山加供奉列也、

○匪啻嚴親凡誅之會大變、與久高亦已所離別、寡婦無告者不得父母之居生國、而欷歔綿綿赴上方在京師者五个年、其後辭京師歸生國居川邊者二个年也、

○先是所産生之二女、長嫁本田伊豫守親正、次嫁島津下總守常久矣、

○慶長十年乙巳孟秋、島津豐後守忠朝少女爲太守質、赴上方矣、丁此之時有　惟新尊君之命曰、當國婦人無知上方風俗者、妙春數年在京都所以能知美風也、今從所質宜赴上都矣、妙春報曰、數年窄籠寡婦何得供奉乎哉、固辭迨再三矣、雖然不許曰、今度爲供奉抽忠貞、則宜亡父忠宗之立後嗣、由是隨君命勤局之役遂上都也、

○經年月之後、所質之女子嫁　松平隱岐守殿、住遠江州掛川、漸已産男子、夫婦膠漆之交也、於茲乎得歸國免矣、

○既歸生國斯不違前約新賜二百石領地、故撰一二童子、而雖爲繼子不遂退去者也、妙春迨老年而未有繼子、孔以患之、以三原左衞門佐重饒二子爲猶子也、再所興赴當家者偏妙春之所致也、

○寛永十五年戊寅五月二十三日死去、年七十六、法號俊玉妙春大師、

△久行

初久利　久近　藤次　藤四郎　內記

○母鎌田藏人政富女也、

○妙春爲猶子、實三原左衞門佐重饒二男也、

○正保四年、久行補薩州鶴田之地頭職、

○慶安二年五月、轉鶴田賜隅州山田之地頭職、

○明暦三年丁酉十月朔日死去、法名弓箴玄的居士、年三十六、

女子

樺山權左衞門久清妻、

○母樺山安藝久守女也、

女子

久明妻、

○母和田讃岐政貞女也、

△久明

初久嘉　久木　助之進　源右衛門　隼人　通眞

○寛永九年壬申十一月二十八日誕生、母妾、

○久行依無世子爲猶子、實新納右衛門久詮之二男也、

○轉任奏者番・京都藏奉行・用人等之役、

○轉補薩州坊泊・同吉田・同串木野・同百引・同羽月、日州松山等之地頭職、

女子

新納主殿忠鎭妻、

○母三原左衛門重饒女也、

女子

夭亡、

○母久行女也、

助龜

夭亡、

○母同、

△久矩

萬五郎　權之丞　隼人　七郎太夫

○元禄元年戊辰十月二十五日誕生、母薩州高江士羽月彌六兵衛元重女也、

○久行依無世子爲養子、實島津備前久達之三男也、

○寶永二年十月三日、賜日州松山之地頭職、

○同三年三月十五日、任目附役、

○同六年八月二十三日、任與頭・番頭、

○當家代代加首服之時者、　太守公爲加冠、且至始及家督等之儀、奉獻御太刀・二種一荷、是家例也、

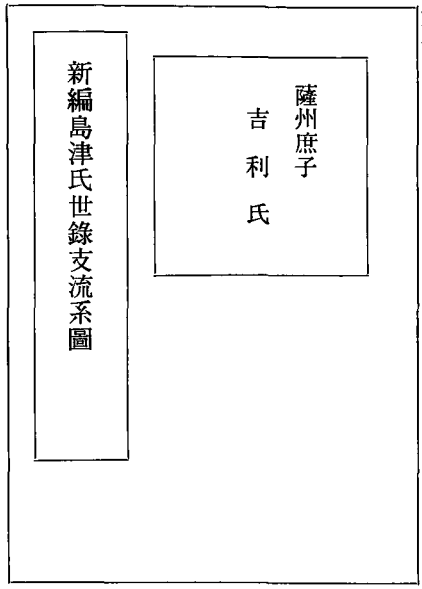
○正德三年三月二十五日、肝付主殿兼柄傳　太守公之高命曰、當家之實名嫡子代代免許久字、二男以下不許焉、以用字可爲實名字、故氏族皆改用字矣、

女子

○母伊勢兵部貞顯女也、

女子

○母同前、



吉利氏系圖

『元祖』
△秀久
三郎九郎　伊勢守　入道名休外、
○島津薩摩守國久四男、居住于加兒也、
○弘治三年丁巳九月廿日卒、法名道周、號文學、

『二代』
△忠將
三郎九郎　治部少輔

○明應九年庚申誕生、
○天文元年、於中鄕戰死、年三十三、法名寂公、號安叟、

女子

久起
六郎　刑部少輔
○天文元年、於中鄕與兄忠將俱遂戰死畢、

女子
新納尾張守室、

女子

女子
初嫁白坂七右衞門尉、生一男後離別、後嫁壹岐加賀守幸則産一女、此女嫁平田盛右衞門尉純正生一男、此男連續幸則之家、即壹岐源左衞門尉幸伯也、

忠知
六郎　刑部少輔

女子

久通

六郎　覺右衛門尉　備後守

久商

六郎　兵部左衛門尉

○慶長十二年丁未七月十四日誕生、母市來壹岐守入道宗盛女、

○住于市來、子孫在彼地、

○寛文八年戊申十二月二十四日、於市來死、法名越山玄超、

久隆

初久秀　細千代丸　傳助　喜左衛門

○慶長十七年壬子誕生、母同前、

○住于市來、子孫在彼地、

○元禄二年己巳六月十六日、於市來死、法名禪室常參、

女子

上床源右衛門國方妻、

女子

石神善吉重弘（鹿島士）妻、

久敬

長三郎　治兵衛

○慶安二年己丑正月十七日誕生、母田尻主水安常（高岡之士）女、

○元禄二年己巳六月十六日死、法名高屋淨天、

女子

安藤休右衛門實次（鹿島士）妻、

用昌

初久寛　長三郎　喜右衛門

○延寶八年庚申三月十四日誕生、母上村木工右衛門清勝女、

女子

肝屬金右衛門兼明士寛島妻、

用信
長千代
○寶永五年戊子閏正月二日誕生、母江田傳兵衛國蜜女、

女子
臼井仲左衛門常昌妻、

久虎
長千代　六郎
○寛永十六年丁卯九月二十七日誕生、母山田與市兵衛有金女、

久次
○寛文四年甲辰七月二日死、法名春山久蔓、

久命
三三郎　早世、

兵九郎
○正保三年丙戌正月七日誕生、母同前、
○兄二人早世、故家督、
○寶永八年辛卯正月三日死、法名達山照通、

久豐
兵左衛門
○兄久命依無嗣子爲養子、

僧

用成
初久豐　兵左衛門
○慶安二年己丑三月十一日誕生、母久命同腹、
○相續兄久命之跡、

女子

用武
甚五郎
○元禄九年丙子三月二十九日誕生、母上村木工右衛門清勝女、

女子
村田越前守經定室、
『三代』
△久定
三郎九郎　右衛門太夫
○永正十六年己卯誕生、母島津相模守忠幸女、
○太守貴久主賜吉利於久定、而居住于此矣、
○弘治三年丁巳九月十二日卒、年三十九、法名舜公、
號日山、
久金
三郎次郎　左衛門佐　山城守
○享禄三年庚寅誕生、母同前、
○元和二年丙辰三月二日死去、年八十七、法號休
卜常貞、
忠富
縫殿助
久次
三介
女子

平田狩野介室、
久盛
三郎五郎
○於肥後州水俣戰死、年十八、
久元
左近允　治部右衛門尉
○正保三年丙戌十一月三日死去、年七十七、
頼撰
阿闍梨法印知足院
○霧島山花林寺十三代住持、
坊次
早世、
女子
早世、
忠春
九郎右衛門　治部右衛門
○慶長十六年辛亥十月十八日誕生、母木原宗兵衛

家弘女、

○住于谷山、子孫在彼地、

○延寶五年乙巳六月五日死、法名雲岩永春、

珍寶

早世、

正三郎

女子

指宿齊淵忠繼士 鹿島 妻、

金德

早世、

忠膳

百千代　治左衛門

○承應三年癸巳八月九日誕生、母岩崎藤右衛門頼喜女、

○寶永六年己丑八月二十一日死、法名義山全忠、

女子

壹岐嘉左衛門秀行士 鹿島 妻、

用循

百左衛門　六郎兵衛

○延寶三年乙卯正月九日誕生、母松田三右衛門爲勝女、

用員

治助

○延寶八年庚申二月二十四日誕生、母同前、

用榮

次郎兵衛

○貞享三年丙寅正月六日誕生、母同前、

女子

高城半七重恭士 鹿島 妻、

用親

百左衛門

○元禄十五年壬午三月九日誕生、母池田助右衛門兼里女、

用陽
三郎右衛門
○寶永三年丙戌十二月二十九日誕生、母同前、

忠澄
初清久　三郎九郎　狩野介　下總守
○天文十八年己酉誕生、
○永禄元年戊午十二月廿七日、初號吉利、
○文禄四年乙未八月四日死、年四十七、法號性梅宗乾、

女子
伊集院右衛門大夫忠棟室、
○忠棟凡誅之後、息男等隱謀既以露顯被加誅戮、吾亦同誅於阿多矣、

女子
白坂式部大輔室、

女子
甑島小川某室、

忠張
初忠位　三郎九郎　木工右衛門尉　下總守
○天正元年癸酉十一月十三日誕生、母上井武藏守爲秋女也、

忠紹
三九郎　織部佐
○天正十六年戊子誕生、母忠張一腹、
○寛永十七年庚辰七月廿七日死、年五十三、法號雲岩宗白、

忠秋
三郎兵衛尉　廿二歳、早世、

久重
三四郎

女子

女子

仲四郎久守室、

久在

三郎九郎　山城守

○元和二年丙辰十一月二日誕生、母比志島紀伊守國貞女也、

○寛永十六年己卯正月廿四日死去、年廿四、法號元心中本、

初久村　中久連　虎菊丸　三郎九郎　木工右衛門　治部

○正保二年乙酉二月六日誕生、母祖父忠張女、

○明暦三年丁酉正月十五日、　太守光久公手自加冠虎菊丸、號三郎九郎久村、乃賜脇刀、

○元禄十年丁丑四月、補番頭、

○元禄十五年壬午八月晦日死、法名性壽院一覺良二、

久良

初忠豊　中久守　菊壽丸　仲四郎　狩野介

○慶長十八年癸丑八月八日誕生、母野村大學介元綱女、

○久在早世無繼子、故妻久在之姉、而連續當家、實義岡宮内大輔久達之長子也、

○明暦元年乙未正月十日、補薩州山崎之地頭職、

○明暦三年丁酉八月九日死、法名空山性直、

忠名

忠員

虎鶴丸　休二郎

○延寶元年癸丑十一月七日誕生、母諏方木工右衛門兼利養女、

○天和三年癸亥十月十五日、　太守綱貴公手自加冠虎鶴丸、號休二郎忠員、賜脇刀、島津中務久輝理髪矣、

○元禄九年丙子十月十日死、法名心宗明眼、

女子

夭亡、

忠儀

萬千代　仲三郎　木工之助

○延寶九年辛酉三月十一日誕生、母同前、

○兄忠員早世、故相續家督、

○寶永三年丙戌七月二十三日死、法名清雲院法岩宗心、

女子

○元禄十六年癸未九月十日誕生、母米良五郎兵衛重郷女、

○寶永二年己酉三月二十日夭亡、

久副

初忠記　長虎　木工右衛門

○寶永二年乙酉五月五日誕生、母同前、

○正徳三年癸巳三月朔日、　太守吉貴公手自加冠長虎號木工右衛門忠記、乃賜折紙及脇刀、島津將監久當理髪矣、

○同年三月二十五日、肝屬兼柄傳　太守吉貴公之命曰、當家自今以後嫡嫡實名被免久之字、二男以下可改用之字、故庶流皆改用之字、

（表紙）

薩州庶子
寺山氏

新編島津氏世錄支流系圖

寺山氏系圖

△光久
又次郎　越後守　寺山元祖、
○薩摩守國久六男也、

△直久
出羽守
○光久無世子爲猶子、實大野駿河守忠悟法師瑚璉二男也、
○谷山神前城和睦之時爲質、實直久九歲也、其後貴久主賜同所五ヶ別符、居住于夫地矣、
○奉　太守之命、島津氏之朋族、永祿元年戊午十二月廿七日、各以所領之地定稱號、故直久亦初號寺山、有其故、五ヶ別符村之內有稱寺山之狩倉、是以如此也、
○後補吉田地頭職、故移其地居住之際、永祿十年十二月七日、爲羽月守兵到其地爲軍務、翌年三月九日、歸陣之路求麻之衆潛出大口城設伏兵、于時吉田之士數多、家臣廿人許遂戰死、直久亦被深傷歸入吉田本城、則以死去畢、法號壽山源棟居士、

女子
肝付雅樂助室、母島津中務太輔忠成大田氏祖也末女也、

女子
三原神祇重行室、母同前、

『三代』
△久兼

四郎左衛門尉　入道定雲、
○永禄十年丁卯誕生、母猿渡休覺女、
○朝鮮國征伐之時、爲　太守之供奉、守晋州之城之際、大明大軍丁寄來時、抽軍功者也、
○慶長三年戊戌十月一日、大明大軍竪羽旄鳴兵鼓來、攻我之　太守父子所警衛之營泗川新寨、　太守父子開城門提三尺直進入數十萬軍中、軍一時潰、雖然一將不與衆軍敗向來、島津圖書頭忠長對之挑戰、死生存亡之際、久兼指揮衆兵、横令攻討所向來之後軍、由是前軍亦敗、悉所以斬戮也、
○慶長十六年辛亥十月晦日死去、年四十五、法號即安淨心居士、

源左衛門尉
廣田某爲猶子、母同前、

甚右衛門尉
○慶長四年、於莊內山田戰死、年三十三、法號良翁玄張居士、

女子
肝付主税助室、夫婦共他國出奔、

女子
大寺主計助室、

『四代』
△久豐
善四郎　出羽守
○母河上彦七郎久昭女也、
○寛永七年庚午十月十三日死去、法號梅甲玄咲居士、

甚右衛門尉
○寛永二年十月廿九日死去、年卅三、法號三阿弥陀佛、

久堅
土佐守
○伊集院備後守爲猶子、
○寛永六年七月三日、於武州江戸死去、年廿七、法號仲岩全昌居士、

女子

又右衛門妻、

『五代』
△久貞

初忠昌　右近　四郎左衛門　又右衛門

○慶長十七年壬子正月八日誕生、母鎌田藏人政富女也、

○久豐有一女無男子、故妻一女爲猶子、實佐多伯耆守忠充三男也、

○轉補薩州坊津・隅州姶良等之地頭職、

○正保四年之冬、　太守光久公於武州王子村張行犬追物、備將軍家之台覽、時久貞奉　命爲射手、其後　公登營、射手之輩皆供奉、拜謁將軍家、且賜衣服、久貞亦在其列矣、

○元禄三年庚午十一月二十八日死、年七十九、法名齡嚴玄龜居士、

女子

伊東次郎右衛門祐之妻、

○母久豐女也、

女子

仁禮覺左衛門景治妻、

○母同前、

『六代』
△久任

善四郎　四郎左衛門

○慶安四年辛卯六月二十一日誕生、母同前、

○元禄五年壬申四月十一日死、年四十二、法名禪關自參庵主、

女子

早世、

○母同前、

女子

久年妻、

○母島津豊前久守女也、

『七代』
△久長

四郎右衛門

○寛永四年丁卯二月十九日誕生、母坊津浦人長濱彌右衛門女、

○久長者素薩州坊津浦人、被免許坊津之士而號森甚兵衛重信、于時貞享二年之春、蒙　太守光久公之恩免、爲久任之養子相續當家、　太守綱貴公降命、此家之家格雖不賤、久長素卑賤而相續當家、故貶家格樹其名跡、繇繫此家至初及家督等之儀、奉獻中紙、且勤大番矣、

○元禄十一年戊寅十二月九日死、年七十二、法名清雲壽天居士、

久賢

次右衛門

○母宅萬與左衛門女也、

○元禄二年己巳九月十九日死、法名一法禪心居士、

『八代』△久年

初久矩　太郎左衛門

○明暦三年丁酉十一月三日誕生、母同前、

○寶永八年辛卯即正德元年也正月十九日死、年五十五、法名慈航委帆居士、

用親

初久起　權右衛門

○延寶二年甲寅五月二十日誕生、母喜入安房久亮家臣田代五右衛門妹也、

久重

喜兵衛

○延寶四年丙辰十一月二十五日誕生、母同前、

○元禄八年乙亥十月四日死、年二十、法名廓安了智居士、

女子

二階堂傳右衛門行衡妻、母妾、

用信

初久次　萬龜　太次右衛門

○元禄十一年戊寅十二月二十日誕生、母築瀬次郎右衛門女、

用益
初久次　金平　四郎右衛門
○元禄十三年庚辰六月五日誕生、母同前、

女子
用長妻、
○母久任女也、

女子
宮之原甚五兵衛重治妻、
○母同前、

女子
木脇五郎兵衛祐遠妻、
○母同前、

女子
○母同前、

『九代』
△久繁
又之助　又助　十兵衛
○元禄六年癸酉二月二十四日誕生、母北郷宗次郎忠昭女也、
○久年無男子故爲養子、實者北郷作左衛門久嘉之二男也、
○寶永五年戊子六月二十七日於江戸死、年十六、法名關津静玄居士、

『十代』
△用長
初久門　忠次郎　七左衛門　源右衛門
○元禄七年甲戌七月二日誕生、母與久繁同、
○兄久繁雖爲久年之養子不幸死、因茲用長嫁久年之嫡女爲久繁之後嗣、實北郷久嘉之三男也、
○正徳三年夏、以肝屬主殿兼柄降　命曰、此家之實名避久忠之字以用字宜爲實名字、仍賜用字之證帖、

女子
○母久年女也、

（表紙）

薩州庶子
西川氏

新編島津氏世錄支流系圖

西川氏系圖

- 女子
  - 菱刈大和守重副妻、
- 女子
  - 佐多氏某室、
- 女子
  - 御東
  - 『薩州家四代』
  - 忠興
- 字初千代丸　三郎太郎　薩摩守
  - ○母修理亮忠康女也、
- 女子
  - 比丘尼松岩妙泉雪慶院、
- 筑前守
- 女子
  - 實久室、上之城妙朝、
- 『元祖』
- △興久
  - 紀伊守　伊勢守
  - ○母同忠興、
  - ○法名天倫賢公大禪伯、
- 女子
  - 越後守室、
- 久任
  - 平三郎　三郎兵衛　上野守
  - ○母同忠興、
- 祁答院駿河守
- 又十郎

女子
『成イ』
滿淨寺

女子
常陸守室、
『恩イ』
法息寺

忠則
平三郎　源右衛門　號西川、
○請家號左京亮久守、號西川爲庶族、

清貞
千代菊　貞左衛門尉
○母伊勢守忠陽之女也、
○吉田大藏清盛依無嗣子爲猶子、

久諸
權左衛門
○母仁禮藏人頼景妹也、
○久諸者貞左衛門清貞之二男也、清貞爲吉田大藏清盛之猶子、故西川家將斷絶、因是久諸相續祖父源右衛門尉忠則之跡、
○寛永八年辛未三月十日死、法號場安祖道、

忠張
左京
○正保二年乙酉誕生、
○延寶六年戊午六月十五日死、年三十四、法名貫室文道居士、

忠尚
權左衛門
○元禄十年丁丑六月十一日、於武州江戸死、
○法名涼屋智清居士、

用將
次郎助
○延寶五年丁巳十二月誕生、母東郷市左衛門重利女也、

用益
初忠榮　次郎左衛門
○寛文十年庚戌七月三日誕生、母薩州谷山士羽月治兵衛元辰女也、
○忠尚無實子故爲養子、實薩州谷山士折田七郎右衛門重成之二男也、
○此家避久忠之字、以用字可爲實名字、家嫡六太夫用應受　命傳之、故改用字、

用嵩
駒之助
○寶永四年丁亥三月十九日誕生、母足輕永谷源兵衛女也、

用尉
小八郎
○正徳二年壬辰二月十八日誕生、母同前、

『二代』
△忠陽
初忠直　伊勢守
○天文七年戊戌誕生、
○天正九年辛巳八月二十日、於肥後國水俣戰死、年四十四、于時藤川萬兵衛尉・石塚八左衛門尉・八郎右衛門亦戰死也、
○法號貴山慶富、

女子二人

女子
西川源右衛門尉忠則妻、

『三代』
△久守
號西川、稲菊　佐平次　左京亮　入道名素伯、
○天正七年己卯九月二十六日誕生、母妾、
○萬治二年己亥八月八日死、年八十一、法號明窓素伯居士、

『四代』
△久吉
稲菊　新右衛門

○慶長十二年丁未十月二十三日誕生、母薩州大村士
赤崎甚左衛門姉、
○寛文元年辛丑閏八月七日死、年五十五、法號心嶺
主一居士、

久當
初頼益　菊千代　十左衛門
○元和三年丁巳六月十三日誕生、母同前、
○初雖爲小田氏之猶子、承應三年甲午、辭彼家歸
本家西川、爲島津圖書久通之屬士、
○元禄七年甲戌二月十九日死、年七十八、法號即
天是心居士、

久次
千菊
○元和七年辛酉誕生、
○寛永九年壬申十月七日早世、法名花安童子、

女子
東郷奉膳兵衛尉妻、
○寛永四年丁卯正月十一日誕生、

女子
○母薩州大口士鎌田掃部女也、
○上原七郎左衛門尚昌妻、

用貞
初久重　清左衛門
○正保四年丁亥誕生、母同前、
○隅州國分士也、

喜三郎　早世、
○母薩州大口士高城萬左衛門女也、

女子
川上甚助久孝妻、
○母同前、

用應
初久祀　左平次
○寛文八年戊申二月八日誕生、母同前、
○薩州鶴田士也、
○家嫡六太夫久憲死、一子亦早世無後嗣、故正

徳三年癸巳十一月五日、奉　高命相續久憲家、
且用應跡使二男十左衛門用薫相續矣、

女子
○母薩州鶴田士山下次郎兵衛盛陳女也、

用懸
萬左衛門
○元禄十三年庚辰二月五日誕生、母同前、
○從父用應爲家嫡之適子、

用薫
十左衛門
○寶永三年丙戌十一月十日誕生、母同前、
○兄用懸從父爲家嫡之嫡子、故用薫連續用應跡、

女子
早世、
○母島津圖書久通家臣村原源右衛門家加女也、

左兵衛

○延寶二年甲寅十一月誕生、母同前、
○元禄十二年己卯八月五日死、年二十六、法名一空
了心居士、

菊松
○母同前、
○早世、法名花清童子、

用喜
叚兵衛
○貞享二年乙丑九月二十三日誕生、母同前、

女子
○母同前、

『五代』
△久憲
稲助　六太夫
○寛永六年己巳二月十日誕生、母島津圖書忠長家臣
兒島四郎兵衛高繼女也、
○久憲者自祖父久守相繼、而雖爲薩州鶴田之士、至
久憲去鶴田爲薩州出水士者也、

○寶永七年庚寅八月三日死、年八十五、法名天諶常
保居士、
女子
早世、
○母同前、
女子
○母同前、
○初嫁出水士伊藤甚兵衛、後爲同所士伊藤與右衛門
妻、
女子
○母鹿兒島士本田與市右衛門親貞姉也、
○隅州鹿屋士中馬兵部左衛門重記妻、
女子
○母同前、
久共
左京
○延寶六年戊午十一月六日誕生、母同前、

○元禄五年壬申六月十二日死、年十五、法名天鑑照
心居士、
『六代』
△用應
初久昶　佐平次　六太夫
○寛文八年戊申二月八日誕生、母薩州大口士高城萬
左衛門女也、
○久憲死一子亦早世、故正徳三年癸巳十一月五日、
奉　高命相續久憲跡、爲薩州鶴田之士、實島津圖
書久通屬士西川十左衛門久當之二男也、
○正徳三年十一月十八日、肝付主殿兼柄傳　高命曰、
當家之實名避久忠字以用字可爲實名字、故改用字、
氏族僉然矣、
女子
○母薩州鶴田士山下次郎兵衛盛陳女也、
用懸
萬左衛門
○元禄十三年庚辰二月五日誕生、母同前、

用薫

十左衛門

○寶永三年丙戌十一月十日誕生、母同前、

○父用應爲家嫡久憲之後嗣、先是用應別樹家、故用薫連續其跡矣、

（表紙）

豊州
季久
一流

新編島津氏世錄支流系圖

豊州系圖

『元祖』
△季久

修理亮　豊後守　越後守

○應永廿年癸巳誕生、母上原某女也、

○九代之　太守陸奥守久豊主三男也、

○居住于帖佐瓜生野也、

『二代』
△忠康

二郎三郎　修理亮

○文明十五年癸卯、税所新介欲犯帖佐之城圍之、卻失利不得退、匪啻請降、去渡曾於郡城與所領於忠康、以解圍者也、

479

『正文在串木野衆無言』

○今度唐船若不慮事候者、可被致忠節之由、嶋津方江被成　綸旨候、於自然之儀者、同可被成其心得候也、謹言、

八月十四日　（花押）

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雜錄附錄二」一四〇三号文書ト同文ナリ）

○文明九年丁酉八月六日卒、享年六十五也、法號柱道題橋、

480

『正文在坊津一乗院』

○不存寄候之處、遂拜顔候、誠祝着之至候、仍來廿六東郷江可有御手仕由候、大朦金剛御看經奉憑候、如何樣重而參會可申承候、事〻、恐〻敬白、

十一月廿三日　　忠廉（花押）

一乗院
御同宿中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一五五七号文書・「旧記雑録附録一」二五一号文書ト同文ナリ）

481

『正文在本田作左衛門宣親』

○今度上井城就退治、一段御動、誠爲悦不少候、仍敷祢六町進所也、恐〻謹言、

『文明十五敷』
三月十九日　　忠廉（花押）

本田殿
進之候

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一五五一号文書ト同文ナリ）

482

『正文牛王在本田作左衛門宣親』

○　契狀

一弓矢者如何樣にも成行候へ、近所之間可申談候、雖然可寄御志事、

一如此申談候之處、和讒方候て雜説之時者、直ニ申承候て可致其沙汰事、

一雜務之事、任理運早〻可送遣之事、

若此条〻僞申候者、

正八幡大菩薩
霧嶋六所權現
諏訪上下大明神
御罰可蒙候、

仍意趣如件、

文明十六年十一月十五日　　藤原忠廉（花押）

本田殿（兼親）
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一五七一号文書ト同文ナリ）

○文明十八年丙午、　太守忠昌公賜日州飫肥・福島、
故去帖佐所以入部其地也、

『正文在島津豊前』

○日向國飫肥院南北一圓・同櫛間院一圓之事、
右兩所、爲領知所宛行之也、早任此旨、可有知行
之狀如件、
文明十八年十月十九日　　忠昌（花押）
修理亮殿

『上書』
修理亮殿　　忠昌

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一六五四号文書ト同文ナリ）

○延徳二年庚戌八月廿日、於攝州天王寺卒也、法號
雲溪忠好、

『久繼イ』
忠康
號平山、又次郎　九郎右衛門尉　越後守

近久
又二郎　　越後守
滿久
三郎五郎　右衛門佐
○加治木三郎實平無世子、故爲猶子連續於彼家、
守興
喜叟和尚　帖佐摠禪寺住持、

『吉久イ』
幸久
六郎三郎　藏人　淡路守
二郎四郎
遠江守
藏人助

『忠時イ』
安久
源七　兵部少輔　備前守
芳清叟
蒲生寶聚寺住持、

久歳
六郎　紀伊守
○於飫肥切腹、
六郎
與父俱切腹、
忠吉――六郎三郎
六郎三郎
○於串良戰死、

484

『三代』
△忠朝
初忠頼　二郎三郎　豐後守

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○雖未申通候、以次染筆候、仍太刀一腰宗近進之候、
隨而渡唐船之儀、委細陶安房守可申候、無御等閑
候者、可爲祝着候、恐〻謹言、
『永正十六歟』
十月十日　　義興判

485

嶋津豊後守殿
（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九一三号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○左京大夫以狀申候、仍渡唐船之事、於御分國中可
被相留之由申候處、興國寺東堂以御入魂蒙仰候趣、
先以祝着候、近日必重〻以使者可申入候、『本ノマヽ』智水境、
池永修理事者、此方申付候、然者彼仁申舩事、於
何方許容可然候、委細定可申入候、恐〻謹言、
『永正十六歟』
十月十日　　陶安房守　弘詮
嶋津豊後守殿　御宿所
（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九一四号文書ト同文ナリ）

486

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○御札之趣具令拜見候旱、殊御太刀一腰宗近誠賞翫
畏入存候、抑就渡唐船之儀、蒙仰候之趣、奉得其

487

心候、細碎陶房州江令申候、仍從是信房一腰金覆輪
進入之、聊表御祝礼計候、以此旨、宜預御披露候、
恐惶謹言、
『永正十六歟』
十一月四日　　忠朝
京兆
御返報人〻御中
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九一五号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○御屋形様御書并示給候趣得其心候、抑渡唐船可相
留之由、御意之旨、不可存疎略候、但此方之事、
所詮、可應忠兼下知之条、御得心前候之哉、池永
修理船許容之儀、不可有等閑候、委曲猶一中軒令
申候間、不能詳候、恐〻謹言、
『永正十六歟』
十一月四日　　忠朝
陶安房守殿
御返報
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九一六号文書ト同文ナリ）

488

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○就渡唐船之儀、吉河出雲守令下着之處、無別儀之
由候、弥入魂可爲喜悦候、恐〻謹言、
永正十七
十一月十六日　　高國
嶋津豊後守殿
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九三三号文書ト同文ナリ）

489

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○爲渡唐、於貴國船新造之儀申候之處、御懇承候、
于今祝着之至候、次以塩田壹岐申子細候、是又御
入魂所仰候、仍太刀一腰進之候、猶委細陶安房守
可申由、恐〻謹言、
永正十八
十一月二日　　義興
嶋津豊後守殿
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九五九号文書ト同文ナリ）

490

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○就渡唐船之儀、以前被申候之處、御懇示給候、祝

491

着候、重而以書狀申旨候、弥御入魂所仰之由申候、猶塩田可申候、恐〻謹言、

『八欠』
永正十七
十一月二日　　弘詮「裏付陶安房守」

嶋津豊後守殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九六〇号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○如蒙仰候、池永修理渡唐艤之事、於當津造畢候、肝要存候、猶爰元之儀、陶房州へ令申候、定而塩田壹岐守可被述候哉、仍御太刀一腰拜領畏入候、從是同太刀一腰奉表御祝儀候、以此旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

永正十八
二月十一日　　忠朝

京兆
御返報人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九四一号文書ト同文ナリ）

492

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○如仰、就渡唐船之儀、已前示承候處、重而預御書候、誠過分之至候、弥不可存疎略候、修理大夫申旨、委細塩田壹岐守可被相述候条、不能詳候、恐〻謹言、

永正十八
二月十一日　　忠朝

陶安房守殿
御返報

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九四二号文書ト同文ナリ）

493

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○京兆様御書・同御太刀一腰并陶房州書狀贈給、慥令拜見候旱、抑渡唐船之儀、日向屋修理企聊尓之次第、已前細碎被仰含候キ、存其旨候處、又從細川殿彼二艘之事警固可仕之由、度〻承候、京都之御談合如何候哉、御兩家皆以難相黙御事候、所詮、委細之儀定年行共可申候、以其趣御心得可爲肝要候、恐〻謹言、

494

永正十八
二月十一日　　忠朝「裏付等同前」

塩田壹岐守殿

「右、鹿児嶋迄爲使下向之時、返状之案文」

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九四三号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○御札之趣令披見候旱、抑絹川佐渡『欠』事、不可有許容之旨、修理大夫『欠』從最初如申候、爰元之儀者順逆『欠』今以同前候、恐〻謹言、

永正十八
四月一日　　忠朝

陶安房守殿
御返報

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九四七号文書ト同文ナリ）

495

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就渡唐船之儀、度〻以貴札蒙仰『欠』、悉皆修理大夫可任下知之条、不可『欠』旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

496

永正十八
四月一日　　忠朝

京兆
御返報人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九四八号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○連〻可申上候之處、依遼遠不能其儀候、頗奉失本意候、抑永源寺主席承儀、　勅号之懇望、彼僧二人致參洛候、以御入魂事達候者、誠本望可畏入候、仍雖左道之至候、北絹一端令進献候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

永正十八
五月十九日　　豊後守忠朝

進上　甘露寺殿
參人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九五一号文書ト同文ナリ）

497

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○渡唐之内二号船事、被申付絹川佐渡入道處、種〻御懇之由喜悦間、以直書被申候、然間佐渡尤可罷

498

下之処、於當津愈申付儀『本ノ儘』依在之、愈相留候条、被成其心得、弥預御入魂候者、可爲祝着之由、猶自秋相心得可申由候、恐〻謹言、

永正十八
八月十四日　　元盛「裏付香西四郎左衛門尉」

嶋津豊後守殿　御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九五五号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

499

○今度渡唐之内二号船之事、申付絹川佐渡入道候處、御懇之由候、弥預入魂候者、可爲祝着候、猶委細四郎左衛門尉可申候、恐〻謹言、

永正十八
八月十六日　　高國

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九五六号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

500

○爲其堺無事之調法、至伊東尹祐加助言候旨趣、定惠院可申達候、安全御覺悟肝要候、仍太刀一腰持・次・鞍一口本所進之候、猶期後音候、恐〻謹言、

永正十八
八月廿三日　　親敦

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九五七号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就三ヶ國御弓矢之儀、任代〻之旨、爲無事調法、定惠院祐順僧都被進之候、可然様可被仰談事此時候、兼又先年二号船歸朝之刻、御懇志之御礼志賀宮内大輔被申付候之處、近年依國中亂念延引、聊非疎儀候、是又祐順可被達候、恐惶謹言、

永正十八
八月廿三日　　本庄伊賀守右述
臼杵民部少輔長景
大神遠江守親照

嶋津豊後守殿　進覧之候

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九五八号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○態令啓候、抑已前以趣傳申入候之處、旨趣被遂御披露、御懇之儀誠畏入存候、然者爲其辻、至伊東尹祐被加無爲之御助言候之由、先日定惠院委細達承候、御累代連綿御芳志之条不及申候、殊僧都御歸國之砌、從都於郡如承候者、彼方進迎可被應貴命之由候き、可然存候、弥庄内安全之御調法併奉賴候、就之北郷左衛門尉進一行候、猶具明星院申含候、預御入魂候ハヽ可爲本望候、恐〻謹言、

大永元年
十二月八日　　忠朝

本庄伊賀守殿
臼杵民部少輔殿
大神遠江守殿　御宿所

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九六一号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○去年者乍若輩以明星院申入候處、雖每度之儀、御懇之御執申、殊於御殿中御意過分之由物語候、誠以忝存候、抑已前如申候、至伊東尹祐御助言之次第、御丁寧之至不及申候、就其彼方被申事逐可承候、先庄内弓矢之事、北原對山田競望之時者、可有与力之由候、然者其旨北原江申遣候、如返事者、對北郷左衛門尉徹底雖不構疎略候、伊東代〻知音之事候、又者領中近所之間、應彼進迎候之由候、兩方區之儀不及分別候、山田・野〻美谷之事、本主へ可返付之由候、北郷申事者、山田者先年北原兼珎去渡候刻、直又鹿兒嶋之儀安堵之地候間、於于今者從他方可被相綺事無覺悟候、野〻美谷樺山安藝入道以談合、事既治定候上者、是又不可及違変之由候、兩条實難成子細候、次黄揚尾・三俣領地之由被申候哉、大濫吹之儀無是非候、所詮、条〻寄事於左右、難澁之儀迄候者、舊冬已來至此、彼北郷被官之者被討捕候、剰去九、山田・野〻美谷堺數勢差寄合戰候、北郷雖得勝利候、彼方之計略如此不相止候、然間度〻爲返報黄揚尾へ近日被

503

遣候、此方不出手儀候間注進候、又〻庄内出張之風聞候、急度被加成敗候様、御入魂併奉憑候、御老中各雖可令申候、就便宜染筆候間、無其儀候、得御意候者可爲祝着候、毎事期後喜候、恐〻謹言、

大永二年
二月廿八日　　忠朝

本庄伊賀守殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九六四号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就渡唐船之儀、度〻從御屋形様以御書蒙仰候、誠忝奉存候、絹川佐渡入道船之事、去年既令渡洋候、吉河出雲守待居順風候、各不可有疎略之由、宜預御披露候、恐〻謹言、

大永二年
六月十八日　　忠朝

香西殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九六六号文書ト同文ナリ）

504

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○御書之趣具拜見仕候旱、抑二号船之事、就當津着岸、警固之儀蒙仰候、奉得其心候、於于今者客衆各歸國之条、肝要令存候、以此旨、宜預御披露候、恐〻謹言、

六月廿三日　　豊後守忠朝

謹上　寺町石見守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九六七号文書ト同文ナリ）

505

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就二号船之儀、從御屋形様御書并御添狀之趣、具令披見候旱、彼客衆依不慮之錯亂、大友義長頻雖欝憤之儀候、以無爲御入魂各歸國也、肝要存候、定而時宜可被聞召及之条、不能詳候、恐〻謹言、

六月　　忠朝

寺町石見守殿
御返報

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九六八号文書ト同文ナリ）

506

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○雖未申通候、連〻御床敷存候、殊御親父樣於京都、吴于他申承候之間、不相替得御意度心中候之条、乍次令啓候、遼遠事候共、自然相應之儀蒙仰可致馳走候、於向後者無指題目候共、細〻可申承候事本望候、猶此仁令申候之条、省略候、恐〻謹言、

大永三年
二月廿六日　　賴興「裏付吉見大藏大輔」

嶋津豊後守殿
参御宿所

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」一九七六号文書ト同文ナリ）

507

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○其後連〻可申入候之處、依弓矢執亂罷過候、頗失本意候、抑就隱謀之族御成敗、貴國聊御念劇候由、旧冬縣傳風聞候、誠無御心元奉存候、雖然早速御平均千秋万歳候、猶當時之儀爲可承、飛脚幸藏司進之候、將又庄内弓矢之事、未相止候、爰元之儀委曲彼僧申含候、弥御入魂所仰候、恐〻謹言、

大永三年
二月廿八日　　忠朝

本庄伊賀守殿（右述）
御宿所

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」一九七七号文書ト同文ナリ）

508

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就舊冬爰許之時宜其聞候、示預候、祝着候、逆心之族一兩輩加成敗、聊無吴儀之趣、猶本庄伊賀守可申候、恐〻謹言、

大永三年
三月廿八日　　親敦

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」一九七八号文書ト同文ナリ）

509

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○誠依遼遠連〻不通之至、背本意候、抑就舊冬爰元之時宜、委細示預候、内〻申聞候、祝着之段以直書被申候、今春以來當國弥靜謐候、可御心安候、其方角御弓矢之事、于今無一途之由承候、無御心

元候、時宜必追而可申談之由候条、先令省略候、
恐〻謹言、
大永三年
三月晦日　　右述
長景
嶋津豊後守殿
「裏付
臼杵民部少輔大友殿家子也
本庄伊賀守」
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九七九号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○去春之比進飛脚僧申入候處、雖不始儀候、御懇之
御執合、殊以御直書蒙仰候、寔忝存候、抑毎度如
申候、庄内弓矢伊東尹祐弥其結構候、先年爲御助
言、定惠院御下向之時、尹祐被申事者、山田・野
〻美谷本主江返付候て、不然者從守護知行候者、
鉾楯可相措之由候き、然處山田城近來小原入手候、
野〻美谷先年守護格護之樣候、已前尹祐被申候辻
成行候、此節御調法併奉憑候、北郷左衛門尉已及
難儀候、以御憐愍御入魂所仰候、委曲從鹿兒嶋可

被申候間、不能詳候、恐〻謹言、
大永三年
六月廿日　　忠朝
臼杵民部少輔殿
小原四郎左衛門尉殿
本庄伊賀守殿
御宿所
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九八〇号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』
○　將又雖左道之儀、打曇百枚・毛錐子卅對令進
入候、表祝言計候、
如仰愚父上洛之砌、甚深得御意候由承及候、連〻
御床敷令存候處、御珎書之旨拜見、怡悦誠不淺候、
并打曇百枚・毛錐子卅對贈給候、賞翫之至候、殊
於向後者、其方相當儀可得御扶助之由蒙仰候、令
祝着候、至此增亦琉球邊御用等示給候者、可致奔
走候哉、心緒幸福太夫申含候之条、閣筆候、恐惶
謹言、

512

大永三年
七月廿一日　　忠朝

吉見大藏太輔殿
御返報

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九八一号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○　雖些子之儀候、沈香十兩・唐扇二本進入候、
表不空計候、
林鐘十日御札委細令拜見候、到肥後國依在陳之儀、
御報延引爲恐千万候、抑其堺弓箭之事、伊東尹祐
猶以結構候欤、無是非候、當方覺悟之躰、先年以
定惠院被申述候之趣、今以同前候、當時就中國干
戈、大内殿爲合力、諸勢發足之刻候之条、被取亂
無合期樣候、雖然必其面靜謐之調法、可令入魂之
由、猶期後音候、令省略候、恐〻謹言、
大永三年
八月十一日　　右述
長景

嶋津豊後守殿
參貴報

「裏付曰杵民部少輔
本庄伊賀守」

513

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九八二号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○雖未申通候、以事次令啓候、就御家門御由緒、連
〻匠作被仰通候、御無案内之条、于今御無音被背
御本意候、仍以御書仰候、并五明三本得其心可申
旨候、抑近年依都鄙忿劇、御家門領一向有名無実
候、公私零落過賢察候、以旧好匠作御助成之事被
仰懸候、同艘馳走申候也、可爲御祝着候、併御賴
之由仰候、猶使節青色山伏可令申候間、令省略候、
恐〻謹言、
九月二日　　進藤筑後守
長并

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九八三号文書ト同文ナリ）

514

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○御札具令披閲候旱、抑就修理大夫蒙尊儀候、至私

515

被成御書候、誠過分之至候条誠忝、并五明三本拜受、畏頂戴賞翫吳于他候、兼又都鄙之忿劇御領等御『欠』意之儀承候、定忠兼可致馳走候哉、可準彼儀候、此方干戈之轉變、又御使節可有奏述候欤、雖些子之至、墨一丁（圓形鱗文）・香一斤令進上候、萬可然樣御執申憑存候、恐〻謹言、

九月四日　　忠朝

進藤筑後守殿　御返報

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九八四号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○先度鹿兒嶋使僧之使宜令啓候、御返札慥披見祝着不少候、其後連〻雖可申通候、依遠路相似如在候、非本意候、仍尹祐父子去月初荘内越山候、然者新納忠勝一味之現形候間、北郷方爲与力從守護隅州・薩州之人衆被差遣、荘内互之鉾楯最中候、已前從豊州老中承候趣者、尹祐へ先可有無爲之御助言之

516

由候き、無承引次第歴然候、於爰者一途之御計議憑存候由、今度具申入候、彼方被慰御裁許、其堺目御武略所仰候、荘内落去候者、我等亦難儀必然覺候、忠勝回變以來串良防敵路候、旁氣遣可有御察候、雖遼遠候、毎事被添御心者可爲本望候、猶此僧申含候間、閣筆候、恐〻謹言、

大永三年十一月六日　　忠朝

土持右馬頭殿　進之候

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九八五号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○去秋就薩州使僧之使宜申入候、御返事御懇之至祝着仕候、抑至伊東尹祐可被加無爲之御助言之由承候間、得其心候處、首尾如何候哉、去月初旬已來、尹祐父子荘内令越山、競望弥奔走候、然者新納四郎一味候之条、當國之忿劇倍増無是非候、先札如承候、以無爲之御調法、屬其儀候欤、於無承引者、

土持親栄被添御力、一途之儀偏奉憑候、北郷左衛門尉不運相窮分候、彼堺没落候者、我等難儀亦可爲當日候、御累代仰御扶持事勿論候、荘内之御調併可爲御助成候、以御入魂早速預御裁断候様、御執申可畏入候、委曲猶彼僧可申述候哉、恐々謹言、

大永三年
十一月六日　　忠朝

臼杵民部少輔殿

本庄伊賀守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九八六号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○衆徒評議之狀逐一令披閲早、抑犬神事當家風專之、著于書中其然乎、凡狐犬神呪咀惡靈之祟、洛夷古今往々人普所謁之、何限此境之俗、縱雖曰卑劣盗賊之輩、功言構虚以有可宥比丘之心乎、況又於即事而眞之宗旨措、即以成佛之觀念、可想衆生之惱亂乎、倩加凡慮堆忘法衣住慳貪欲心、爲人發憾一念屈執以被此非者乎、又依過去之因償夙債者乎、一行阿闍梨、遇於菓孤之難肇、法師係於獄中之閲思之、則幸与不幸道俗豈可知乎、所詮、平日於不修行戒比丘豫可有擯出者也、被許容破戒之故、終逮衆中之瑕瑾矣、向後眞邪心之僧侶、於神前可遂起請之明決事專一也、然而怨靈惡鬼借巫祝之口、妄誑言在可稱證人其身耶、若又有欲證人者糺明可爲勿論、其時爭有偏頗嘗不構疎略堕慢之機、後來亦不可變易、然則娑門弥守嚴密清淨之意、檀那增事信心堅固之思至祝々々、

爰阿多源次郎号第々敵殺客威德院非所及是非、就之門徒中停止彼祈禱云々、當然之理也、雖然還可準擬調伏人者乎、濟迷妄之輩可爲慈悲廣大之本然、必後日所可訴申也、

次門中五戒慎之兩条、尤以神妙也、毎年理繆不断之勤行、併郡郷之繁榮、軍容勝運之基也、仍可勵敬心之狀如件、

大永三
霜月十五日　　忠朝

衆徒中

518

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九八七号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○串良院之事、安千代殿讓進候之通申出候キ、已忠勝御領常之上者、寄ゝ人衆早速以御奔走、警固之儀可爲肝要候、聊不可有變違之条勿論候、然者彼堺番衆已下無吴儀様可送給之事、可爲祝着候、并地下人之儀憑存候之由、志布志へ令申候、同被添御心、被加不便候も本望候、恐ゝ謹言、

大永四年
九月十三日　　忠朝

新納尾張守殿
進之候

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一九九三号文書ト同文ナリ）

519

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○其後連續可令啓候之處、依執亂無其儀之条、非疎略候、抑年來如申候、當國之忿劇更不穩候、畢竟伊東爲張本如此候、彼方被加御下知候之由、与黨不可有差事候、御代ゝ奉憑候辻、急度被添御力候之由、誠可畏入候、以連署雖申候、別而御入魂所仰候、仍見來之間進之候、猶此僧可申述候、恐ゝ謹言、

大永五年
六月十六日　　忠朝

小原伊与守殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇〇七号文書ト同文ナリ）

520

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○毎ゝ御床敷雖存候、依遼遠無音之儀非本意候、抑此方弓矢之執亂被聞召及候之哉、度ゝ如申入候、貴國之御力奉憑候外無他儀候、就之御老中へ進使僧候、此節被添御心候様、御入魂誠可爲祝着候、諸事可得御意之由、彼僧申含候、御指南所仰候、仍進之候、左道至極候、恐ゝ謹言、

大永五
六月十六日　　忠朝

田所勘解由左衛門尉殿
御宿所

521

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇〇八号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○以連署雖申候、別而令啓候、抑伊東方武略弥無間
断候、一途不預御助成候者、難儀可爲必定、御累
代奉憑事候、可然樣御取合併憑存候、委曲之旨此
使申含候、仍薄板一端進之候、祝儀計候、恐〻謹言、

大永五年
六月十六日　　忠朝

臼杵民部少輔殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇〇九号文書ト同文ナリ）

522

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○連〻可申通之處、依遼遠無音之至、聊非疎意候、
御同前候之哉、近來其堺之時宜不承及候、委細示
預度候、仍去年以來薩隅干戈之事者、已前令申候
欤、鹿兒嶋家督之儀、相州嫡男虎壽丸殿江被相讓、
忠兼事者、去卯月中旬之比、薩州伊作院隱居候、
其次第早〻雖可令注進候、豊州飛脚之僧先日歸國
之時、定而可有物語候之間、令油断候キ、抑至爰
漸可爲靜謐欤之由存候處、本田因幡守在城清水ニ
楯籠、猶以相支候、然者曽於郡衆中對城柱思案相
違候欤、新納・北郷方入計略之案裏近日去渡候、
依此時之變化、守護譜代之家人等、亦寄〻少〻新
納忠勝隨逐候間、彼弓矢弥事起分候、悉皆我等可
歸一身之難儀事暦然候、但無面目乍申事、當家之
破滅時至候上者、不及力候、薩摩南方邊者鹿兒嶋
雖義絶、互戰防等之事者、當時無之候欤、近所堺
目之儀未相替候、如何樣武略不可措候、自然之儀
御入魂憑存候外無他候、此飛脚豊府路次傳又可爲
御煩候、無申事候、恐〻謹言、

大永五年
六月十六日　　忠朝

土持右馬頭殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇一〇号文書ト同文ナリ）

523

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○先年者態〻芳信御懇切之至、于今祝着不少候、其以後尤可令啓候之處、依弓矢之執亂罷過候、非疎略候、抑伊東方計議猶以倍增候条、一途預御助成度之由、御老中へ申入候、此方入部已來奉憑事、其上二号船之時、已爲御瑕瑾之由、度〻承候間、勵忠儀候次第歷然候、就其伊東此堺競望候之由、別而可被添御心之由、御約諾与證之御狀等給置候、來秋者又必可蜂起趣候、御入魂併憑存候、向後甚深被懸御意候ハヽ、可爲本望候、仍薄板一端・花瓶一對進之候、心事期後音候、恐〻謹言、

大永五年
六月十六日　　忠朝

佐伯殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇一一号文書ト同文ナリ）

524

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○其後可申通候之處、當國更以不平均候之条、依執亂疎遠之至非本意候、抑伊東方隱謀之結構弥顯然之儀、不及是非候、每度如申入候、此節御助成併奉憑候、爰元之安危委曲常春院申含候、可然樣御入魂所仰候、恐〻謹言、

大永五年
六月十六日　　忠朝

本庄新左衛門尉殿
木上大炊助殿
臼杵民部少輔殿
小原伊与守殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇一二号文書ト同文ナリ）

525

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就爰元之儀、御老中迄進使僧候、時宜任先例、預御取合候者、可爲祝着候、抑御親父樣御懇切之次第、難忘存候、向後亦不相替可申承事本望候、國中之干戈無止候、被添御心候之樣、御馳走所庶幾候、仍進之候、猶此使申含候、恐〻謹言、

526

大永五年
六月十六日　　忠朝

本庄新左衛門尉殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇一三号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○連〻雖可申上覺悟候、依念劇不能其儀候、頗失本意存候、任連綿之旨、弥御扶助可畏入候、仍御太刀一腰正眞・鍮銘火鉢一令進取免之候、誠奉表御祝儀候、以此趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

大永五年
六月十六日　　豊後守忠朝
（義鑑）

謹上　大友殿
人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇一四号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○爲先日御音問御礼、被進使節候、仍其境鉾楯之事、先以至伊東被加助言候、定而境目可爲靜謐候欤、猶以及亂念候者、追而一途可被申談候、此謂至鹿

527

528

兒嶋被申候、委曲定惠院可有演説之条、不能一二候、恐〻謹言、

大永五年
閏十一月三日　　右並「上之実名右並」
長景「裏付曰杵民部少輔小原伊与守」

嶋津豊後守殿
進覧之候

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇一八号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就先日其堺之儀、御使僧祝着候、先以至伊東加助言候之趣爲可申、定惠院進之候、仍太刀一腰・織物一端進之候、猶老共可申候、恐〻謹言、

大永五年
閏十一月三日　　義鑑

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇一九号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○去年閏十一月三日之御札今月十七到來、具披見怡

529

530

悦不少候、抑此堺鉾楯之儀連〻令申候、以其辻至伊東御助言之由承候、誠本懐之至候、定而不可有違背候哉、於難澁者一途可被仰談事、是又所庶幾候、就之以御入魂、遠路之御使節、一段畏入存候、弥奉憑計候、爰元之委曲定惠院可被仰述候、猶從鹿兒嶋可被申之条、不能詳候、恐〻謹言、

大永六年
三月廿七日　　忠朝

小原伊与守殿
臼杵民部少輔殿
御返報

（本文書ハ「旧記雜録前編一」二〇二三号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○御書之旨具拜見、并御太刀一腰・織物一端領之候、誠以畏入令存候、抑至伊東御助言之趣、定惠院細碎被仰含候、本懐之至弥奉憑候外不可有他儀候、仍從是助次一腰・段子一端令進上之候、聊表御祝礼候、此由宜預御披露候、恐惶謹言、

531

大永六年
三月廿七日　　豊後守忠朝

謹上　大友殿
御返報人〻御中

（本文書ハ「旧記雜録前編一」二〇二四号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○貴札令拜見候、如蒙仰候、至伊東方以使節被申候、其返札先日爲御披見、至鹿兒嶋令進覧候、於于今者定而可爲御存知候、曽而不存疎略之趣、始中終之儀候、於事実肝要存候、猶以謀略無止候者、於其上追而一途可被申談候、小原伊与守某事、大内殿爲合力至藝州、可致出張之由被申付候間、今日廿八罷立候、小原事一兩日已前、至豊前境令發足候条、同前不申候、御入魂之旨申聞、從彼陳中可申述候、諸慶猶期來音候、恐惶謹言、

大永六年
十月廿八日　　臼杵民部少輔
長景

嶋津豊州
參貴報

（本文書ハ「旧記雜録前編一」二〇四六号文書ト同文ナリ）

532

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○貴國鉾楯之儀、于今無靜謐之由、其聞候之条、無御心元被存候間、被進狀候、每事匠作与御一味之由候、尤可然候、早〻無事御調儀、可爲肝要之由候、仍太刀一腰金覆輪無銘・織色五端被進之候、猶委細傳芳院可有演説候之条、省略候、恐〻謹言、

大永八年七月廿三日　　杉三河守興重

謹上　嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二一二五号文書ト同文ナリ）

533

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○先度雖染筆候、依通路不輙候、不相屆候、抑當國念劇之儀無心許候、每事匠作有御一味、靜謐之調儀可然候、仍太刀一振・織色五端進之候、猶杉三河守可申候、恐〻謹言、

大永八年七月廿三日　　義興

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二一二六号文書ト同文ナリ）

534

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○如蒙仰候、爲御專對御往還之次、奉遂拜顔候之条、祝着之至候、其已來者、依遼遠閣筆候、令失素意候之處、預尊翰候、誠畏入存候、殊兩種拜領賞翫仕候、於向後甚深可被懸御意事所庶幾候、兼又先年御光儀之時、　前皇樣御紹書并濟〻致頂戴候勅答令達之候之處、慮外之次第不及是非候、於當御代者、先加斟酌候、依御助言、可得其心候、仍雖些子之儀候、椀一束令進献候、此旨宜預御披露候、誠惶敬白、

大永八閏九月九日

天界寺

尊答衣鉢侍者禪師

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二一三〇号文書ト同文ナリ）

535

『正文在志布志野神村帶刀』

○日州安國寺事、爲副使可有渡唐之由申遣候、領納候之樣、御意見可爲祝着候、尚陶安房守・杉三河

536

守可申候、恐〻謹言、

十月六日　　義隆（花押）

嶋津豊後守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一三一号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○御札之趣令披見候早、抑就當方之鉾楯、御屋形様御書、同以傳芳院被加御懇儀候、誠畏入令存候、何様勝久如本意、可屬無爲候哉、當時之儀御使者委曲申入候之条、不覃筆端候、御太刀一腰令進覧之、旁可然様御執申所仰候、恐〻謹言、

大永八
十月　　豊後守忠朝

謹上　杉三河守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一三二号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○就當國忿劇之儀、被添御心蒙仰候之条、誠畏入奉存候、殊先度被添芳翰候之處、至路次滞留之由、

537

御懇切之儀候、爰元之趣、定修理太夫可令申候之哉、仍御太刀一振・織色濟〻忝致拜領候、從是御太刀一腰、聊表御祝礼候、以此旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

大永八年
十月　　豊後守忠朝

謹上　京兆様
貴報人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一三三号文書ト同文ナリ）

『案文在都城衆野邊惣右衛門』

○其後連〻雖申入度覺悟候、當家之忿劇、更以依不相止執亂、無音之至非疎略候、已前佐伯御成敗之事、其遼遠之故、已後風聞候条、兎角不令申候キ、于今無是非存候、當時伊東祐裔其方御助言之儀も候欤、鹿兒嶋爲一味、對新納鉾楯最中候、忠朝事者、所詮、無爲之本意候之間、其懇望仕候、不珎雖申事候、自然之儀奉憑候外無他候、例之爲飛脚、此節乗令進候、委曲申含候間、不能詳候、恐〻謹

538

539

言、

大永八年
極月　　忠朝

本庄新左衛門尉殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二一三四号文書ト同文ナリ）

『正文在本田作左衛門宣親』

○如蒙仰候、歳暮之御満足重疊雖申事舊候、猶更不可有御邊際候、萬歳〻、抑就是等之御慶儀、御佳例之以御書被仰下候、誠目出忝奉存候、明春者早〻御繁榮之兆可申上候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

十二月廿七日　　藤原忠朝（花押）

進上　本田因幡守殿

（本文書ハ「旧記雑録附録一」一四〇六号文書ト同文ナリ）

○天文九年庚子三月四日卒、法號月舟道海、

540

『在川邊衆日置太郎介』

夫吾朝天神七代地神五代之後、神武天皇以來禮樂征伐自天子出焉、爰人皇五十六代

從

清和天皇十代之后裔鎌倉右大將賴朝卿誅伐平氏、其功覆天下、　是以

後白河院叡感之餘、被任六十餘州之惣、自是天下之號令出乎諸候矣、其后胤當家之先祖　島津忠久公十一代之孫薩・隅・日府君　藤氏忠昌公爲　豊後守於山東之固、而自隅州帖佐郷被量移日州飫肥福島之院、此時文明十八年丙午十二月初吉、公年廿一歳矣、自尒以降國家悪（惡カ）劇而蔑公道、乱君臣之禮、何異桀紂之乱哉、然間府君　忠昌公爲三州安寧、以　豊後守忠朝公之吹擧、被與奪三俣之高城於伊東尹祐、其後不經數年而剩爲伊東長本、而國家起乱者于茲有年矣、是故　豊後守運武略、率一門之群勢、天文元年壬辰十一月廿五日、出場之始也、同二年癸巳暮春廿八日、　豊後守自身發足、

屯猛勢動天地、震雷電、如雲似霞、兵卒充滿、而不知其員幾千万矣、雖得多々勝利、不遑敢記耳、同三年潤正月七日、奪取彼城郭、創家國安平之基、武功以無双者也、粤串良郷者以故府君　忠昌公之重恩一所懸命之地也、然處永正十七年庚辰八月朔、伴氏兼興一族密談而同心企隠謀、催群勢欲奪彼住城矣、時越後守久武爲大將而調衆評、下號令逃於所圍敵軍矣、其翌年大永辛巳八月十八日、　豊後守自身出張矣、同廿一日、押寄鹿屋之城、間近攻倚打破乱株逆木雉堞等、一心防戰、各致忠於馬前、欲揚名於后代、引足於鹿屋原合戰也、崩敵軍以得勝利引退矣、少息汗馬甘氣而歸宅矣、而後大永三年癸未八月廿日、新納忠勝公與肝付兼興同意、而或留陸地、或塞海路矣、故同四年甲申九月廿九日、城已落矣、主君　豊後守以他年之齎貢、天文五年丙申八月十一日、絶通路而欲雪會稽矣、寔兄弟鬩于牆、禍起於蕭牆之謂是也、然其爭已及兩三年、至同七年七月廿有六日、弓折矢盡矣、噫嘻天哉、騷然掃跡去于四方者殆千人矣、同廿七日、　豊後守忠朝公入部居住于救仁院廣朝城矣、把定封疆、鎮撫社稷、猛將謀臣出入幕下、俠客談士環列座傍、其仁及乎庶民、其威振乎隣國、諸人僉言、知國似知兵矣、抑亦遊心於翰墨之場、專倭歌之道、仰乎難波津之古風、酌乎冨緒川旧流者也、嗟夫孜々不怠者乎、天文九年歳舍庚子姑洗初三日、公年七十五齡而蛻然率矣、於此之時無貴無賤、緇素紛然自遠方來、不亦感乎、況於院内乎、同十有四日、日州飫肥院就于大龍精舍、以法闍維矣、法名　道海、道號月舟、號常春院殿焉、於是家臣　藤氏久岑寫眞、忝命山僧令記其徳、以要傳千載矣、忠義之至誠大哉、

皆天文九年庚子林鐘如意珠日

春山野衲佛日常光勝一蘭謹誌焉

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二三九五号文書ト同文ナリ）

—女子

薩摩守成久室、

久盈
初忠利　二郎四郎　左馬助

忠秋
徳三郎丸　二郎五郎　兵庫允　備中守
○天文六年死去、
女子

三郎五郎
女子
新納孫四郎忠常室、

忠敦
助四郎

二郎四郎
右衛門大夫　武藏守
女子
僧

541

『四代』
△忠廣
二郎三郎　右馬頭　豊後守

『正文在本田作左衛門宣親』
○如示預候、去十八九伊東定徑到東少〻『本ノマヽ』相餘候、其砌依洪水此方之人衆河不渡候、乍去退足之刻足輕付送、別府治部少輔爲始名字之者七人討執候、中途手負四人捨置候、大慶此事候、其以後者定而洋〻と可動存候處、無其儀引退候、不審之至候、將亦以瀨戸口美作守、御懇之儀共承候、御賴敷令祝着候、爰元義彼方委物語可被申候間、令省略候、恐〻謹言、

三月廿四日　　忠廣（花押）

本田紀伊守殿　御報

『上包』
本田紀伊守殿　御報　　忠廣
『上包裏ニ有之』
豊後守

542

（本文書ハ「旧記雑録附録二」一四〇七号文書ト同文ナリ）

『正文在本田作左衛門宣親』

○就鵜戸堺目之儀、早〻御使僧示承候、誠畏入存計候、弥〻可被添御心事頼存候外無他候、恐〻謹言、

卯月一日　　忠廣（花押）

本田殿
御返報

『上包』
本田殿
御返報

忠廣
『上包裏ニ有之』
豊後守

（本文書ハ「旧記雑録附録二」一四〇八号文書ト同文ナリ）

女子

禰寝某室、

『五代』
△忠親

尾張守　豊後守

543

○忠廣依無世子爲猶子、實者北郷讃岐守忠相長子也、十有余年務北郷氏家督之後、忠廣強請爲後嗣、故不得固辭、而天文十四年乙巳十二月十八日、移于飫肥本城、連續當家者也、

○天文十七年戊申七月七日、伊東氏犯飫肥本城、攻入城麓、對于八幡馬場、防禦不緩、以敵軍退去矣、丁此之時、北郷圖書頭忠茂已下士卒數十人、遂戰死者也、

○天文十八年四月五日、飫肥業毎之辻之伊東陣攻之、敵軍悉没落也、

『正文在肝付半兵衛兼屋』
『牛王』
○起請文條〻事

一此度就和融媒介　守護之御分別、於已後相違之時者、無余義可爲御同前之事、

一就和平取持、自然以和讒雖雑説之儀候、相互申分不可有信用夏、

右此旨於僞者、

神名

天文十八年十二月二日　嶋津尾張守忠親（花押）

肝付三郎五郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六三四号文書ト同文ナリ）

『正文在肝付半兵衛兼屋』

○就其堺村之義、承候子細老中江致披露候、御奉公之事別而於御入魂者、無餘義可被進之由候、然ハ御存分示預以其上可申調候、此御返書老中江見せ可申候、可有御分別候、將又加治木判形之事、可被遣之趣被仰出候、是又爲御心得申入候、依如此之義、今日者致逗留候、細碎御心底之程可承候、恐ゝ謹言、

『天文十八』極月十六日　忠親（花押）

肝付越前入道殿　御宿所

『上包』肝付越前入道殿　御宿所　尾張守忠親

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六三八号文書ト同文ナリ）

○永禄十一年戊辰四月、『六月八日イ』去飫肥於伊東、去福島於肝付、而與息男朝久俱、退于荘内都城來、居于此者年久矣、

○元龜二年辛未六月十二日、卒于都城矣、法號齡崗永壽居士、

『六代』△朝久

豊後守

○九月十二日卒、法號月江善桂、

女子

種子島左近大夫久時室、

『七代』△久賀

藤次郎　豊後守　豊前守　母義弘主嫡女、

○寛永廿一年甲申三月廿二日卒、法號梅月宗寒庵主、

忠弘

東市正

○豊後守朝久後室者、　兵庫頭義弘主嫡女也、讓得其領地、而爲久賀之弟、實　太守黄門家久卿之庶子也、

女子

島津河内守忠倍室、

女子

松平隱岐守定行初室、

久次

藤次郎

○寛永七年庚午四月五日早世、法號朝庵淨英居士、

『八代』

△久守

左近將監　豊前守　母川上左近將監久辰女也、

○兵庫頭義弘主有告豊後守久賀之命曰、對馬守久清者素生松元平山之家、而嘗事義弘矣、是以自朝鮮國渡楫之始、至濃州關之原軍亂之時、不離膝下晝夜勲勞異于他也、久賀之元祖季久庶子後裔右馬頭久武戰死、而未有其後者有年於茲矣、使久清爲後嗣者可乎、嚴命敢不可道、於茲乎久賀附與平山氏之系圖、爲久武之後繼者也、

○非島津氏支流、而稱平山者往々其數多矣、知姓氏之同異者或少矣、是以爲決其疑似、左近將監久守裁證書畀久清、記左方、

『案文久守有之』

○　證文

高祖嶋津豊後守季久、其子修理亮忠廉之弟忠康号平山、其裔五代右馬頭久武於日州松山之城、永禄二年四月十六日、弟次郎四郎久次与俱爲肝付之凶徒被屠殺、無嗣子而経年、故嶋津兵庫頭義弘公憂無其後、則命松本主殿助令續平山之統事、亡父豊前守久嘉『本ノ儘』使我聞其由來也、且今雖多称平山者、非忠康之裔、聊以妄不可免許諱字并平山之称号之狀如件、

嶋津左近將監

正保二年乙酉十一月二日　　久守在判

平山對馬入道殿

（本文書ハ「旧記雜録追録一」四五号文書ト同文ナリ）

女子

澁谷周防介重監室、母同前、

男子

愛兒丸　母同前、夭亡、

女子

島津東市正忠弘室、母鎌田出雲守政近女也、

久延

主計助　母同前、

○寛永三年丙寅九月二十一日誕生、

○子孫記別紙、

久邦

初久武　松千代　次郎三郎　豊前　豊後

○寛永十七年庚辰八月十五日誕生、母佐多伯耆守忠永女、

○慶安二年戊子二月、　太守光久公加冠松千代、號二郎三郎久武、加之賜脇刀一腰、

○寛文三年癸卯四月三日、被補隅州恒吉之地頭職、

○同四年甲辰九月二十六日、蒙　光久公之嚴命爲組頭、

○寛文八年戊申、轉恒吉賜伊集院之地頭職、

○延寶四年丙辰八月四日、爲　太守光久公歸國之御禮使赴武城、九月十五日、登　柳營奉見將軍家、

○同五年丁巳四月二十七日、轉補福山地頭職、同日、任大目附、

○同七年己未正月元日、爲拜領鶴御禮使、參于武城、二月十五日、又奉謁將軍家、

○元禄四年辛未四月二十五日死、法號不借院拳外一頭庵主、

女子

相良源五左衞門頼安妻、離別而後嫁寺山四郎左衞門久任、

○正保元年甲申誕生、母同前、

○延寶八年庚申八月二十四日死、法號桃天芳春大姉、

久可

兵三郎

○正保四年丁亥二月八日誕生、母同前、

○寛文九年己酉八月十四日早世、法號月桂淨心居士、

女子

島津長七郎久明室、

○承應元年壬辰六月二十一日誕生、母同前、

○寶永二年乙亥八月二十日死、法號智明院桂高貞泉大姉、

男子

松千代

○寛文元年辛丑十一月二十四日誕生、母高崎伊豆能延女、

○同四年甲辰七月二十六日夭亡、法號幻露童子、

女子

久兵室、

○延寶六年戊午五月晦日誕生、母時任氏女、

久兵

龜鶴　內膳

○寛文八年戊申六月十日誕生、母鎌田源左衞門政有女、

○久邦依無世子爲養子、實島津帶刀久元之二男也、

○延寶六年戊午十一月二十三日、　太守光久公以帶刀久元之二男、加冠龜鶴號內膳久兵、加旃賜脇刀一腰、理髮者島津圖書久竹也、

○元祿九年丙子十一月四日、被補隅州栗野之地頭職、

○同十三年庚辰六月二十一日、爲　吉貴公歸國之御禮使赴武都、八月十五日、登　柳營奉見將軍家、

○寶永二年乙酉九月十一日、任大目附、

○同年十月三日、被轉補飯野之地頭職、

○同年庚寅二月朔日、轉飯野賜伊集院之地頭職、
○正德元年辛卯八月二十一日、任若年寄、
○同年十一月二十日、　吉貴公命曰、於久兵家二男以下以倉山宜爲稱號、越賜倉山之證帖、
○同三年癸巳三月二十五日、　公以肝付兼柄降令曰、於久兵家自今以往嫡子代代實名免許久之字、二男以下不許焉、以季之字可爲實名之字、賜季字之證帖、氏族皆改季字、
○此家至初及家督等之時、拜謁于　太守公、則奉獻御太刀・三種二荷、是家例也、

久智
　龜千代　仙千代　藤次郎
○元禄四年辛未十月十七日誕生、母久邦女、
○元禄十四年辛巳十一月十五日、　太守綱貴公手自加冠仙千代號藤次郎久智、加旃賜脇刀一腰、理髮者佐多豊前久達也、
女子

島津又吉久儔妻、
○元禄七年甲戌七月六日誕生、母同前、
女子
○元禄十年丁丑六月十八日誕生、母同前、
女子
○元禄十三年庚辰正月二十七日誕生、母同前、
○寶永元年甲戌九月十日早世、
季（ママ）

善次郎
○寶永七年庚辰十月六日誕生、母同前、

島津帶刀久元一流系圖（黒岡附之）

久元
　初久延　中久共　虎千代　主計助　清太夫　帶刀
○寛永三年丙寅九月二十一日誕生、母鎌田出雲守政近女、

○同八年辛未之秋、　太守家久公加冠虎千代、號主計助久延、加之賜寶刀一腰、仁禮藏人賴景爲理髮矣、

○正保元年甲申、被補薩州吉田之地頭職、

○同二年乙酉、爲喜入攝津守忠續之後嗣、

○同三年丙戌、奉　高命勤組頭役、

○同四年十一月十三日、　太守光久公於武州江戸王子村奉備于

將軍家之台覽、時久延在射手之列、奉謁

將軍家、頂戴御衣服矣、

○同年、辭去於喜入家、

○明暦三年丁酉九月十三日、轉吉田賜田布施之地頭職、

○寛文四年甲辰九月十一日、爲御談合役、

○同六年丙午六月十四日、轉田布施賜大口之地頭職、

○同年八月七日、所補家老職、

○延寶元年癸丑六月二十八日、　太守光久公參府江戸、七月三日、登　城、時久元供奉而奉見

將軍家、

○同二年甲寅九月四日、轉大口補志布志之地頭職、

○元禄四年辛未閏八月三日死、法號養德院悟山頓了居士、

男子

德千代　夭亡、

仲休

初久年　中忠雄　萬鶴　主計　帶刀

○寛文九年辛丑五月十六日誕生、母鎌田源左衛門政有女、

○同九年己酉二月二十八日、　太守光久公加冠萬鶴號主計久年、乃賜脇刀一腰、島津市正忠廣理髮矣、

○延寶四年丙辰九月二十一日、任與頭役、

○轉任于御誥衆横目頭（今大目附）寺社奉行、或聞御物座、

○元禄六年癸酉十一月十六日、補隅州田代之地頭職、

○同十二年己卯三月二十六日、轉田代賜隅州佐多之地頭職、

○寶永元年甲申十月二十九日、任家老職、
○同年甲申十一月十三日、　太守吉貴公家督登　城
謁
將軍家、時忠雄供奉奉見
大樹、
○寶永二年乙酉、轉佐多補日州志布志之地頭職、
○正德元年辛卯十一月、　太守吉貴公命曰、於仲休
家者二男以下以黒岡可爲稱號、乃賜黒岡之證帖、
○同三年癸巳三月、　公以肝付兼柄降令曰、於仲休
家自今以往嫡子代代實名免許久之字、二男以下不
許焉、以季字可爲實名之字矣、
○此家至初及家督等之時、拜謁于　太守公則奉獻御
太刀・二種一荷、是家格也、

久兵
　亀鶴　內膳
○爲島津豊後久邦之養子、

女子
　天亡、

久名
　萬千代　與十郎　主計
○元禄元年戊辰五月十五日誕生、母島津市十郎久達
女、
○同九年丙子十一月十五日、　太守綱貴公加冠萬千
代號與十郎久年、時賜脇刀一腰、佐多豊前久達爲
理髮、
○寶永四年丁亥十月十日、補與頭職、

女子
　伊勢兵部貞榮妻、
○元禄三年庚午四月七日誕生、母同前、

女子
　早世、

則恒
　初久有　長菊　六十郎
○元禄十四年辛巳三月十六日誕生、母島津圖書久竹
女、

○爲赤松甚右衛門則茂之養子、

久磨

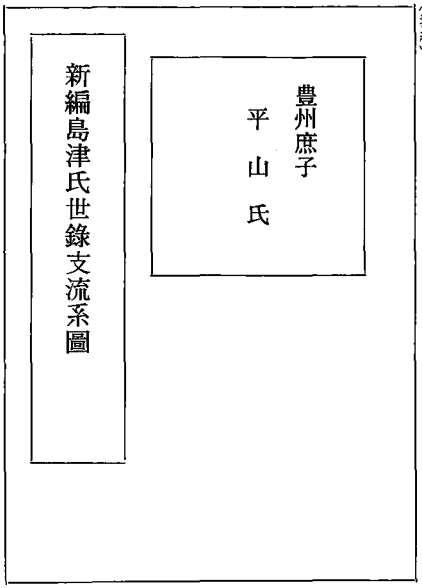
○元禄十六年癸未四月十三日誕生、母同前、

女子

早世、

男子

半四郎　夭亡、



平山氏系圖

- 忠國
  - 初貴久　陸奥守
- 用久
  - 初好久　薩摩守
- 季久
  - 修理亮　越後守　豐後守　法名爲柱、號題橋、
- 有久
  - 忠德

- 大島元祖、出羽守　出羽守
- 豐久
  - 伯耆守
  - 女子七人
- 忠堯
- 公久
- 忠朝
  - 初忠康　修理亮　次郎三郎　豐後守
- 忠康
  - 號平山、九郎左衛門尉　越後守
  - ○領知松山、居于其地、
  - ○應仁三年(即文明元年也)己丑八月卒、法號定山道安居士、
- 滿久
  - 右衛門佐　爲加治木三郎實平之猶子、
- 守興
  - 僧
- 幸久
- 忠堅
  - 六郎三郎　藏人　九郎右衛門尉　遠江守
- 安久

源七郎　兵部少輔

女子七人

近久

又次郎　越後守　法號空山道翁、

久丘

左衛門大夫

女子二人

忠智

越後守

○肝付河内守兼續法師省釣背　太守爲仇敵、由是、與新納氏謀、欲退治於省釣、往於志布志之途中、爲肝付之兵被斬戮也、法名道空、

久武

右馬頭

○永禄二年己未四月十六日、肝付氏催軍衆來陷於居城松山、于時、兄弟共遂戰死、法號椿窻榮壽、此時當家之重器、悉爲肝付之兵所奪捕者也、

○其後崇夫靈於松山、號於軍神摩利支天矣、

久次

次郎四郎

久清

彦八郎　七介　主殿助　對馬守

○兵庫頭義弘主、有告豐後守久賀之命曰、久清者素生松元平山之家、而嘗事義弘矣、是以、自朝鮮國渡楫之始、至濃州關之原軍亂之時、不離膝下晝夜勲勞異于他也、久賀之元祖季久庶子後裔、右馬頭久武戰死、而未有其後者有年於茲矣、使久清爲後嗣者可乎、嚴命敢不可遁、於茲乎、久賀附與平山氏之系圖、爲久武之後繼者也、

○非島津氏支流而稱平山者、往々其數多矣、知姓氏之同異者或少矣、是以、爲決其疑似、左近將監久

守裁證書畀久清、記左方、

○文禄元年壬辰之季春、　義弘主渡楫于朝鮮國、久清不離膝下扈從者也、

○慶長二年丁酉七月十五日、大明國之軍艦數十艘、救朝鮮國來在于唐島、日本之諸將欲破郤之、各爭先挑戰以悉破郤去、而唐島焦土矣、于時、久清斬首敵一人矣、

○我之　太守父子在于朝鮮國泗川新城、慶長三年戊戌十月朔日、數十万騎寄來圍新城矣、　太守父子開城門指揮以衝入太敵、崩之宛如湯雪、此時久清亦斬敵首者五級、

○慶長三年十二月、日本諸將悉歸陣焉、我之　太守父子共上洛在伏見矣、同五年庚子、與石田之謀叛、往濃州構陣營、而關西之軍敗於關个原、　義弘主遁到于泉州住吉矣、文禄元年、自朝鮮渡楫之時至于此時、久清無片時之去　義弘主膝下、從住吉浦乘小舟潛解纜、丁此之時、扈從之騎歩過半不得乘一舟、而漸々歸國、久清亦後歸之列也、感其勲勞新賜五十石之地也、

○人皇第八孝元天皇支流之苗裔石清水爲別當、其子石清水了清稱平山法印、推所其由來、則大隅州始羅郡爲男山八幡神領、故遠下于當郡而留滯之際、帖佐三十町村中有池、一夜之間湧出一山於池中、了清爲奇異之思、勸請於熊野權現、而號之於平山權現、其後構城於帖佐而名平山城、于時、八流之幡降下、仍改平山權現、稱新正八幡、號寺於八流寺也、久清者了清之苗裔、雖然、候　義弘主之膝下晝夜勲勞敢不怠慢好其忠節也、命前豐前守久賀公、令續平山右馬頭久武之後、是又島津氏之支流也、故久賀畀久武之系圖、又正保二年乙酉十一月二日、久賀之世子左近將監久守賜一紙之證書、記左方矣、

546

『正文在平山七兵衛忠昭』

○　證文

高祖嶋津豊後守季久、其子修理亮忠康之弟忠康号

平山、其裔五代右馬頭久武於日州松山之城、永禄二年四月十六日、弟次郎四郎久次与俱爲肝付之凶徒被屠殺、無嗣子而經年、故嶋津兵庫頭義弘公憂無其後、則命松本主殿助令續平山之統事、亡父豊前守久嘉使我聞其由來也、且今雖多称平山者、非忠康之裔、聊以妄不可免許諱字并平山之称号之狀如件、

正保二年乙酉十一月二日　　嶋津左近將監久守在判

平山對馬入道殿

（本文書ハ「旧記雜録追録一」四五号文書ト同文ナリ）

忠昭

彦四郎　七兵衛尉

○慶長十八年癸丑十二月二十九日誕生、母上井五郎左衛門兼信女也、

○久清依無世子爲猶子也、實三原次郎左衛門尉重貞之子也、

○寛永十九年二月、任兵具奉行今改物頭、

○正保四年丁亥十一月十三日、　太守光久公於武州江戸王子村興行犬追物、備于將軍家之台覧、時忠昭在射手之列、而奉見將軍家、頂戴御衣服矣、

○承應三年甲午十一月三日、補吟味役、

○明暦元年乙未九月四日、賜日州綾之地頭職、

○萬治二年己亥六月三日死、法號關室宗玄居士、

久行

久馬助　元仲

○蒙　太守光久公之嚴命而爲忠昭之弟、實岩城新左衛門重長之二男也、

○延寶二年甲寅十一月九日、被補隅州高隈之地頭職、其後轉補薩州高尾野・同川邊・日州末吉等之地頭職、

○元禄十五年壬午閏八月九日死、年八十、法名功翁元仲、

久祐
長千代　又次郎
○實者　太守光久公之庶子也、雖爲久行之養子、貞享四年之春、辭去於當家、

季春
初久富　中久眞　三次　七左衛門　久馬右衛門　作右衛門
○延寶三年乙卯六月十日誕生、母吉田次郎兵衛康清女、
○久行依無嗣子爲養子、實喜入次兵衛久甫之三男也、
○此家至初及家督等之時、拜謁于　太守公、則奉獻御太刀且勤小番、是家格也、

女子
○元禄三年庚午七月十一日誕生、母野村太左衛門廣貫女、

女子
早世、
女子
○寶永七年庚寅三月十九日誕生、母神戸五左衛門女、

忠知
菊千代　次郎右衛門
○寛永十一年甲戌十一月二十六日誕生、母大野外記盛信女、
○寛文二年壬寅十一月、因　太守光久公之嚴命任吟味役、
○同三年癸卯三月二日、賜隅州栗野之地頭職、
○同六年丙午十一月十七日、轉栗野賜隅州本城之地頭職、
○寛文九年己酉九月十七日、任御使役今改用人、
○元禄十三年庚辰十一月二日死、法號一超玄歸居士、

重儀
松次郎　主殿　五郎兵衛　豊前兵衛　次郎左衛

門

○寛永十六年己卯十月二十五日誕生、母同前、

○爲三原五郎兵衛重英之後嗣、

忠眞

袈裟千代　七右衛門

○正保四年丁亥三月十九日誕生、母同前、

○寛文七年丁未正月二十五日死、法號柏庭芳樹居士、

女子

夭亡、

女子

季重妻、

○元禄七年甲戌十月二十三日誕生、母伊集院九郎兵衛久信女、

女子

○元禄十年丁丑十一月五日誕生、母同前、

久富

佐源太　七兵衛

○天和元年辛酉十二月八日誕生、母土持彈右衛門久種女、

○忠知依無男子爲養子、實土持權兵衛信全之二男也、

○寶永三年丙戌九月二十日、於武州江戸死、法號徹元自澄居士、

季重

彌藏　清右衛門　次郎右衛門

○元禄二年乙巳正月二十四日誕生、母川上十左衛門忠利女、

○久富早世、故以忠知之女爲妻爲後嗣、實有川休右衛門貞信之二男也、

○此家避於久忠之字、以季字可爲實名字、家嫡內膳久兵受　命傳之、仍用季字、庶族僉同之、

○此家至初及家督等之儀、拜謁于　太守公、則奉獻御太刀且勤小番、是家格也、

平山氏踊士作太夫系圖

- 季久
  - 修理亮　豐後守　越後守
  - ○應永廿年癸巳誕生、母上原某女也、
  - ○居住帖佐瓜生野也、
  - ○文明九年丁酉八月六日卒、年六十五、法号桂道題橋、
  - 公久
    - 初忠廉　修理亮
    - ○文明十八年丙午、賜日州飫肥院・櫛間院於　太守忠昌、而移居其地者也、
    - ○延德二年庚戌八月廿日、於攝州天王寺卒、法名忠好、
    - 『久繼ィ』忠康
      - 號平山、又次郎　九郎右衛門尉　越後守
      - 滿久
        - 三郎五郎　右衛門佐
  - ○加治木氏爲猶子、
  - 守興
    - 喜叟和尚　帖佐摠禪寺住持、
    - 『吉久ィ』幸久
      - 六郎三郎　藏人　淡路守
      - 二郎四郎
        - 遠江守
      - 藏人助
    - 『忠時ィ』安久
      - 源七　兵部少輔　備前守
      - 芳清叟
      - 蒲生寶聚寺住持、
      - 久歲
        - 六郎
          - 六郎　紀伊守　與父俱切腹、
          - ○於飫肥切腹、
          - 忠吉
            - 六郎三郎

六郎三郎
○於串良戰死、

近久
又二郎　越後守　法號空山道翁、

久丘
左衛門太夫

女子

忠智
越後守
○自松山往志布志之途中、而爲肝付氏兵被討捕也、法名道空、

久武
右馬頭
○永禄二年己未四月十六日、肝付氏攻陷我之居城松山、于時、兄弟共戰死、法號桂窓榮壽、

久次
次郎四郎
○與兄俱遂戰死、

久清
對馬守
○右馬頭久武兄弟遂戰死、其跡斷絶矣、久清者雖爲異姓平山、　太守兵庫頭義弘主謂豐後守久賀曰、使久清連續久武之跡、由是爲彼跡也、

忠昭
彦四郎　七兵衛尉
○久清依無世子爲猶子、實三原次郎左衛門重貞子也、

忠續
源六　作右衛門尉

○實雖爲久丘妹之子、女子跡所連續當家依無其例、爲其弟記此座者也、

○文禄元年壬辰之春、朝鮮國征伐之時、從于又市郎久保主、渡彼國勞軍務之際、久保主罹瘴癘、翌年九月八日、卒於唐島、爲死骸之供奉、十月八日歸朝、葬禮既終矣、法號一唯恕參大禪定門云云、爲尊靈後世頓證菩提、企回國爲山伏、名一忠房、掛尊牌於首、催同行十二人、文禄三年二月、進發於我國經歷日域六十六州、奉納一國三部經、同四年乙未、所願成就、而歸國則奉修供養塔婆於大口小苗代原、請于 太守、使牛屎・菱刈兩院・眞幸院人夫築十間四方塚建三十三尋之塔婆、國中貴賤無不嘆美其功德也、

○慶長五年九月十五日、於濃州關之原、遂戰死畢、

女子

（ママ）

思朝

初忠賴　二郎三郎　豊後守

女子

薩摩守成久室、

久盈

初忠利　二郎四郎　左馬助

忠秋

二郎五郎　兵庫允　備中守

女子

三郎五郎

女子

新納孫四郎忠常室、

忠敦

助四郎

二郎四郎
右衛門大夫　武藏守
女子
僧
忠廣
二郎三郎　右馬頭　豐後守　他腹、
女子
禰寢某室、
忠親
尾張守　豐後守
○忠廣依無世子爲猶子、實北鄕讚岐守忠相長子也、
朝久
豐後守
女子

種子島左近大夫久時室、
久賀
藤次郎　豐後守　豐前守
忠弘
東市正
○朝久後室者、兵庫頭義弘主嫡女也、讓得其領地
爲久賀弟、實　太守黃門家久卿之庶子也、
女子
島津河內守忠信室、
女子
松平隱岐守初之室、
久次
藤次郎　早世、
久守
左近將監　豐前守
女子
澀谷周防助室、

男子
夭亡、
女子
島津東市正室、
久延
主計助
忠次
主馬允
忠道
備後守
忠朝
久右衛門
○慶長四年己亥五月十五日誕生、母松本助右衛門武秀女、
○爲松本助右衛門武秀之猶子、
○承應四年乙未三月八日死、法名虛白本室居士、
忠政

（ママ）

仲兵衛
○慶長十四年己酉誕生、母同前、
○兄忠朝爲松本氏猶子、故忠政連續當家、
○元禄十年丁丑六月二十三日死、法名覺心道圓、
女子
島津兵庫久住家臣青山喜右衛門照永妻、

547

忠朝
笹右衛門　作太夫　源七左衛門
○寛永六年己巳十一月二十七日誕生、母樺山權左衛門久清家臣神崎大藏兵衛秀員女、
○當家之家督島津豊前守久守賜證書、記左、

證文

當家之元祖越後守季久入道法號桂道題橋之二男越後守忠康、初號平山、其子左衛門尉近久、其子左衛門尉久丘、同妹之子作右衛門尉忠續、如斯連續而其方有古系圖、雖然、女子之跡繼續依有無之由

來、　正統女子之跡既及改替矣、是以、今度島津氏門族記録選擇之時、左衛門尉久丘弟之座相定也、然則、改古譜記、新譜可被讓畀子孫也、此段選擇奉行島津中務少輔久茂公・新納又左衛門尉久正公令聞談、以記之、仍證狀如件、

承應三年甲午十二月二十日　　島津豊後守久守

平山作太夫殿

○貞享三年丙寅十二月二十八日死、法名桃谷久甫居士、

忠高

初忠貞　中忠親　松介　作右衛門

○寛永十三年丙子三月二日誕生、母隅州栗野士阿多筑後久慶女、

○隅州國府之士也、

季滿

初忠成　作左衛門　仲左衛門

○慶安五年壬辰八月十二日誕生、母同前、

○隅州踊之士也、

忠知

千代助　四郎兵衛

○寛永九年壬申四月二十日誕生、母島津兵庫久住家臣上村與左衛門國秀女、

○忠知者忠政之兄忠朝之實子也、忠朝爲松本氏猶子之後生忠知、其後忠知辭松本氏而復本氏、故爲季滿之弟、

○元禄十一年十二月三日、爲鹿兒島士、

○寶永七年庚寅七月十九日死、法號無參常有居士、

季寄

初忠寄　二郎四郎　久右衛門　次郎兵衛

○寛文六年丙子八月十二日誕生、母島津兵庫久住家臣市來勘解由兵衛家廣女、

女子
○元禄十六年癸未七月九日誕生、母隅州福山士
池田伊左衛門政俊女、

次郎四郎
早世、
○母同前、

季（ママ）
虎千代
○正徳三年癸巳二月五日誕生、母同前、

女子
隅州踊士春田勝左衛門益次妻、

季厚
初忠厚　源六　源五左衛門
○寛文三年癸卯三月朔日誕生、母隅州日當山士柏木
彦兵衛重友女、

季榮
初忠榮　源次　作之進
○寛文九年己酉六月八日誕生、母同前、

季清
初忠厚　虎千代　二郎左衛門
○慶安二年己丑十月十七日誕生、母隅州踊士津曲長
左衛門兼有女、

女子
隅州曽於郡士細山田喜右衛門重治妻、
○母同前、

女子
隅州踊士唐仁原藤左衛門季門妻、
○母同前、

季珍
初忠政　市作　源六　源左衛門
○寛文十二年壬子九月十八日誕生、母同前、
○住于隅州踊、

女子
隅州踊士唐仁原兵右衛門秀次妻、
○母踊士松下藤七兵衛久矩女、

季東
源六
○元禄十六年癸未四月二十四日誕生、母同前、

季通
仲右衛門
○寶永五年戊子二月十四日誕生、母同前、

季榮
源八　仲兵衛
○天和二年壬戌七月十九日誕生、母島津兵庫久住家臣池田筑兵衛兼時女、

季良
虎千代　市左衛門
○貞享五年戊辰四月五日誕生、母同前、

女子
○母踊士春田休右衛門益秀女、

（表紙）

大島氏

一流

新編島津氏世錄支流系圖

○大島系圖

『元祖』
△有久

出羽守

○九代　太守陸奥守久豐主四男也、母伊集院彈正少弼頼久女也、

○島津莊內日向方莊內之內梅北七十五町、隅州之內姬城三十町、同國帖佐之內田中門四町八段、共百九町八段賜之所領知也、

○長禄三年己卯七月三日、日州三俣合戰之時、於小山遂戰死、年三十七、

（貼紙）
文明八年九月十三日・廿九日、於三俣小山戰死、異本有之、未知孰是、

『二代』
△忠福

出羽守　室者　太守忠國主第十二女也、

○法名笑岳、

『三代』
△忠明

出羽守

○薩摩州牛屎院大口者、爲他邦之封疆、承　太守之命、移于此地警衛之際、相良某發軍衆於球麻、構對陣於大口、迫于我者甚急也、是以、請援兵於麗島、雖然諸方凶徒蜂起最中、不得發救兵云云、忠明運籌策陷敵陣、然而相良某遁退去也、　太守感其忠功、賜大口三百五十町、而居住于當院、爰有菱刈某法師天岩者、與相良某俱、謀而攻於大口城、

失防禦之計策、享禄三年庚寅七月廿七日、自殺而城亦陷矣、法號祥山瑞公居士、號大瑞院、其後崇敬、而號西原八幡、其社在大口矣、天岩入大口於手裏、相良亦入守兵領知者數年也、經數多春秋之後、太守貴久公、深含其憤欲攻大口、先祈誓願於西原八幡、而後有太守之勝利、蓋神靈感其誠心也、忽以如斯、因茲、每年十月十三日、使一院之人齊明盛服以承祭祀、且有鏑流馬也、

忠經

又次郎　播磨守

○大口落城之時、依不在遁戰死、候南方四箇所、賜少地所領知也、雖然無幾程病死者也、法號慧林常知、

忠清

又次郎

○攻岩劔城之時戰死、年十八、法號春嶽常椿居士、

忠家

號竹崎、播磨守

○法名月屋忠秋、

忠商

彦左衛門　十右衛門

○寛永十六年己卯八月二十五日死、法號月室桂秋居士、

女子

本田宮内少輔親友妻、

忠盈

孫次郎　久右衛門

○天正十九年辛卯十月二十五日誕生、母合子伊勢守女也、

○忠泰無世子而將斷絶、是以、爲彼跡連續於當家也、

忠晴

四郎右衛門

○慶長二年丁酉誕生、母同前、

○正保元年甲申三月朔日死、年四十八、法號明室
忠珠居士、

有以
初忠以　千助　慶左衛門　三左衛門
○寛永十年癸酉正月二日誕生、母伊集院治右衛門
忠成女也、
○忠以改家號於大島、

覺任
○寛永十三年丙子誕生、母同前、
○遂出家、初住蓮華院、後爲善聚院住持、

有充
初忠充　藏之助　勘左衛門　玄三
○正保元年甲申五月十一日誕生、母同前、

女子
壹岐半右衛門幸增妻、早世、
○母妾、

有安
初忠好　辰之助　勘左衛門
○貞享二年乙丑二月二日誕生、母同前、

女子
○母齊藤圓良院實賢女也、

有宜
初忠宜　孫八　孫右衛門
○寛文六年丙午十二月二十二日誕生、母中島六兵
衛利愛女也、
○寶永六年己丑九月二十三日、任大坂留守居役、
○正德三年、此家實名避久忠字、可用有字、家嫡
久左衛門久珍受　命傳之、故改有宜、
○此家嫡男迄始及家督等之時、拜謁于　太守公、
則奉獻御太刀、

忠次
藏之助
○寛文九年己酉十一月二十日誕生、母同前、

○爲外祖父中島六兵衛利愛之養子、

女子

愛甲次右衛門廉堅妻、

○母同前、

有洪

千吉　彦左衛門

○元禄六年癸酉三月七日誕生、母田中五右衛門國明女也、

女子

○母同前、

△忠次

次郎四郎

○菱刈入道天岩爲讎敵、屢犯大口、享禄二年己丑九月三日、於牛屎院大島、爲菱刈之兵被斬獲、家臣有宮原十郎兵衛尉者、斬獲討忠次之當敵、而取返忠次之首、持大口來再進戰場遂戰死、今一人共往戰死也、其後崇二人之靈、號西原八幡前神三者也、

女子

本田刑部大輔室、

女子

○享禄三年七月二十七日、被攻陷大口城、父忠明自殺之時、僅二歳也、爲當敵菱刈氏被生捕遁其死、漸成人而後嫁高城某、産男子、卽忠泰也、

△忠泰

出羽守　久左衛門尉

○領知大口之內大島、於茲始號大島、

○次郎四郎忠次無實子、而彼跡將斷絶、忠泰爲忠次妹之子、故連續彼跡云云、

○馬越・山野賜地頭職、肥後・豊後征伐之時爲勞苦、其後朝鮮國征伐之時、亦令渡楫畢、

○法號空觀蓮性、

忠次

龍菊丸

○十三歳早世、法號蓮舟良香、

△忠盈

孫次郎　久左衛門尉

○天正十九年辛卯十月二十五日誕生、母合子伊勢守女也、

○忠泰一男早世、而當家將向斷絶、忠盈者先祖出羽守忠福二男播磨守忠經後裔也、是以、爲彼跡連續當家也、

○寛永十五年戊寅九月十九日死、年四十八、法號行安了諸居士、

△忠知

長次郎　志摩之助　勘右衛門

○元和四年戊午二月晦日誕生、母宮原傳兵衛女也、

○寛文十一年辛亥九月十六日死、年五十四、法號心榮宗本居士、

女子

伊集院源右衛門久往妻、

忠次

龜之助　二左衛門

○爲宮原大學之養子、

女子

若松十左衛門久東妻、

○母辨官新兵衛親康女也、

△久成

初忠成　孫次郎　掃部　盛太夫

○正保四年丁亥二月三日誕生、母同前、

○延寶六年戊午十二月二十日、補真幸・吉田之地頭職、

○貞享元年甲子十月二日、轉吉田賜隅州恒吉之地頭職、

長次郎

早世、

女子

肝付甚兵衛兼友妻、
○母勝部志摩助行貴妹也、

女子
二階堂三左衛門弘行妻、
○母桂八左衛門忠守女也、

忠致
孫次郎
○寛文十二年壬子十二月七日誕生、母同前、
○元禄十二年己卯六月十六日死、法號仙岩亮鶴居士、

女子
森喜右衛門有相妻、
○母同前、

△久珍
初忠珍　志摩助　久左衛門
○天和元年辛酉二月二十七日誕生、母同前、
○正德三年三月二十五日、肝付主殿兼柄傳　太守公之命曰、當家之嫡男代代免許久字、二男以下不許焉、以有字可爲實名之字矣、
○年頭一所格之家獻御太刀、終此家獻御太刀、頂戴御盃、
○此家嫡男至始及家督等之時、拜謁于　太守公、則奉獻御太刀・二種一荷、且勤小番、是家格也、

忠常
三十郎
○天和三年癸亥閏五月四日誕生、母同前、
○爲桂八左衛門忠崇之養子、

四郎次郎
○貞享二年乙丑四月三日誕生、母同前、
○元禄三年庚午九月十六日早世、法號華岳清槿、

忠雄
七郎次郎
○貞享四年丁卯二月十日誕生、母同前、
○爲富山傳内左衛門義智之養子、

女子
○母同前、

有長
初忠宜　八郎次郎
○元禄三年庚午七月二十六日誕生、母同前、
○寶永六年十二月十八日、初奉見　太守公、奉獻御太刀、
忠篤
九郎次郎
○元禄五年壬申二月二十二日誕生、母同前、
○寶永三年丙戌九月十九日死、法號電散露光居士、
女子
本田助右衛門親胤妻、
○母同前、
女子
○母同前、
久儔
掃部　次郎吉
○寶永三年丙戌七月二十三日誕生、母新納市正久珍
養女、實五代勝左衛門友盛之女也、
女子
○母同前、

（表紙）

迫水氏
及
吉滿氏

新編島津氏世錄支流系圖

迫水氏及吉滿氏系圖

△忠經
初清久　伊豫守
○十代太守陸奥守忠國公五男、母新納近江守忠臣女也、○道號貴海、

△忠光
伊豫介

○十月十七日死去、道號正翁、

安室
宮內　正雲寺住持、

僧
道號天甫、伊集院圓通庵住持、

女子三人

△安久
善左衛門尉
○大永六年丙戌十二月七日、於帖佐高尾戰死、年三十七、

女子一人

△忠友
伊豫介
○七月十九日死去、年四十二、道號慶山、號吉滿氏、

新助
女子一人

久張

號吉満、新助　善左衛門
○永禄八年乙丑三月二十四日、於長島戰死、年四十二、法名道善、

忠郎
治部少輔
○正保元年甲申十月三日死、法名宗鵠、

忠根
治部少輔
○慶長十五年庚戌誕生、母薩州出水士長野仲左衛門女、
○元禄十五年壬午八月十八日死、法名慶安、

女子
薩州出水士伊藤權左衛門祐支妻、
○母薩州野田士猿渡伊賀女、

忠氏

善左衛門
○正保四年丁亥十二月十三日誕生、母同前、
○寶永二年乙酉九月二十五日死、法名昌慶、

經繁
九郎左衛門　納右衛門
○承應二年癸巳三月四日誕生、母同前、

女子
薩州野田士石澤仲兵衛宗晴妻、
○母薩州羽月士長野仲左衛門女、

經保
總三郎　治右衛門
○天和三年癸亥十一月晦日誕生、母同前、

經通
新助
○貞享四年丁卯四月十六日誕生、母同前、

經次

善四郎

○正德三年癸巳三月二日誕生、母薩州出水士伊藤甚左衛門祐章女、

女子

薩州野田士清田惠兵衛治宅妻、

○母薩州野田士兒島滿左衛門森光女、

經貞

又千代　善助

○延寶九年（即天和元年）辛酉九月二日誕生、母同前、

△久光

伊豫介

○法號梁山東津、

女子一人

△久重

左馬助

○朝鮮國征伐之時、自先陣至開陣自力也、

○法號淨山智清、

久友

休內

○霜月十四日、於朝鮮國陣重戰（ママ）死、年二十、

忠興

吉兵衛尉

忠藏

豐菊　勝右衛門尉　善左衛門尉

○天正十五年丁亥二月四日誕生、母城个崎大炊女、

○雖爲日州大崎之士、其後爲隅州高山之士、

○寛文二年壬寅正月二十六日死、法名風山玄春居士、

女子

隅州串良士平山宗爾妻、

○母同前、

忠衆
豐菊　久五郎　傳左衛門
○寛永十五年戊寅九月六日誕生、母西俣平馬之女、
○寛文十年庚戌三月六日死、法名心安良本信士、
忠丕
善吉
○寛永十七年庚辰二月二十二日誕生、母同前、
○元禄元年戊辰八月九日死、法名月秋明圓居士、

久近
豐菊　休兵衛
○慶安元年戊子十一月六日誕生、母岩元勘左衛門義辰之女也、
○元禄十一年戊寅九月二十四日死、法名白翁是水居士、
女子
隅州串良士江藤太郎右衛門妻、

○母同前、
女子
○母福崎仲兵衛重賢女、
忠陣
孫三郎　善左衛門
○延寶三年乙卯十一月三日誕生、母同前、
○寶永元年甲申五月二十二日死、法名唯峯宗心上座、

經淨
初久申　小次郎
○寶永二年乙酉五月十六日誕生、母長井主計實信女、
○忠陣依無子爲猶子、實兒島甚右衛門定盛二男、
久景
主殿

○十二月十三日不詳年號、乘船於瀧个水逢逆風溺死、法名月心遠水、

忠秀
十郎右衛門
○延寶七年己未十月十日死、法名得翁源勝上座、

經賢
虎助　六郎左衛門
○寛文四年甲辰七月二十日誕生、母中間今村甚四郎女、
○忠秀依無子爲猶子、實隅州溝邊士竹之下與左衛門頼朗二男、

女子
○母足輕藤井森右衛門勝政女、

經規
叚右衛門

○貞享二年乙丑九月十九日誕生、母隅州横川士池田龍兵衛女、
○經賢依無子爲智養子、實父横川士森山源五左衛門弟森山市之丞重長嫡子、

經杓
内藏右衛門
○正德元年辛卯七月十六日誕生、母經賢女、

△忠治
初久年　久純　内記
○寛文十年庚戌八月四日死、年八十、法名雪岸老朝、

忠次
織右衛門　早世、
○母遠矢氏女也、

女子

忠次

早右衛門　早世、

忠次

松千代

○出家而號湛池、住職隅州姶良幸田寺、

○正德二年壬辰九月十九日、武州櫻田僊化、法名權大僧都尊性法印、

△久敦

半右衛門　甚內　五納右衛門　六左衛門　善左衛門　入道可遊、

○萬治三年庚子四月六日誕生、母深井伯耆女、實父森喜右衛門有貞入道江雪也、久敦初爲堀之內六左衛門重清之養子、嫁于重清之女、相續彼家、號堀之內六左衛門知重、知重居堀之內家之時、勤御近習役也、

○寶永六年己丑八月二十三日、補御納戶奉行、

○當家元祖伊豫守忠經六代之家嫡與兵衛久重、至其嗣內記忠治、爲外城之列士、忠治雖生三男一女、嫡男不幸而病卒、次弟亦早世、三男爲眞言之徒、其後忠治病死、而竟絕其後也、是年寶永六年己丑九月九日、以當家無後、達　太守少將吉貴公之尊聽、忝使知重相續當家、且捨外城居住之家格、新興家蒙可御太刀獻上之　恩免、稱迫水善左衛門久敦、以上伊集院用之助久富御側用人傳　命也、

○同月二十八日、久敦以當家相續儀、奉謁　吉貴公、奉獻御太刀一腰・青銅百匹、奉禮謝之、黑葛原源左衛門忠雄奏達之也、

○同年十月三日、久敦至御記錄所、受領於家傳之古系圖及文書等也、同日、御城代佐多豐前久達書於當家相續之證判而賜之、同年十二月二十八日、御家老島津久輝・島津久當・新納久珍・島津仲休・種子島久時・肝屬兼柄各加判形、賜於統繼之證書、以上皆因　太守公之尊命也、

○寶永七年閏八月三日、補薩州樋脇地頭職、

○正德三年癸巳三月、肝屬兼柄傳　高命曰、久敦之家直樹家號之家、以故、免許嫡嫡用久之字、二男以下家以經之字宜爲實名、是　命也、因當家庶族

皆從之、

△久雄

久五郎　九郎左衛門　喜太夫

○延寶六年戊午十二月二日誕生、實父林休兵衛道寛、母森喜右衛門有貞入道江雪女也、

○寶永二年乙酉十月、含　吉貴公命、爲堀之内六左衛門知重之養子、黒葛原源左衛門忠雄傳　命、是故號堀之内喜太夫知雄、

○父知重相續當家、以故知雄又相共辭堀之内家、乃稱迫水喜太夫久雄、

女子

○母和田平右衛門秋盈女也、

久次

孫次郎

○正德二年壬辰四月二十九日誕生、母同前、

（表紙）

義岡氏

一流

新編島津氏世錄支流系圖

義岡系圖

『十代之太守』

○忠國

初貴久　陸奥守

用久

初好久　薩摩守

季久

豐後守　越後守

有久

出羽守　母伊集院彈正少弼賴久女也、

○長祿三年己卯七月三日、於三俣戰死、年三十七、

△豐久

初忠豐　源左衞門尉　伯耆守

○應永廿八年辛丑誕生、

○賜薩州平泉、居住此地矣、

○伊作式部太輔久逸居于櫛間、新納近江守忠續居于飫肥、忽有違意之事、已爲冰炭、且復久逸與伊東少進祐國俱謀、而圍忠續之飫肥城、於茲乎、豐久率自兵三百許輩、文明十六年甲辰十二月廿日、越山路至飫肥、構一陣於逆谷竈之藏、同廿二日、敵兵二千騎、寄來當陣攻責頻也、雖曰防禦不怠、比渠於我則衆寡強弱天地懸隔、以筋力倦遂戰死畢、年六十四、法號大圓忠廣居士、

僧一人

隈阿

女子四人

忠堯
源左衛門尉　播磨守

忠常
播磨守
○陸奥守勝久麑島沒落之時、忠常從　勝久背　貴久、到日州莊內、爲北鄉讚岐守忠相家臣也、

忠光
右衛門尉　號志和池、

忠衡
初忠通　六郎三郎　伯耆守　齋名卜波、
○播磨守忠常背　貴久主、出薩州去矣、故依　貴久主之命、忠衡連續豐久家跡、
○法號瑞隣善祥、

女子

忠實

十郎三郎　○法號梅林香公、

女子
新納常陸守室、○法號春朝妙芳、

忠俊
五郎四郎
○天文廿年辛亥誕生、母鮫島某女、
○元龜二年辛未九月廿七日、於下大隅海瀉崎陣戰死、年二十一、法號當岳惠劔、

女子
早世、年十七、

久延
又次郎　藏人
○永祿四年辛酉誕生、母佐多伯耆守忠將女也、
○忠俊依無世子當家將斷絕、於茲乎、奉　太守義久公之高命、連續當家、實喜入攝津介季久二男也、
○天正八年庚辰、　太守義久主賜諱義字稱號於義岡、

○文禄四年乙未四月十四日、於京都死去、年三十五、
法號傑心一英、

久達
初久喜　中久康　仲四郎　宮內大輔　母田代肥
前守清盈女也、

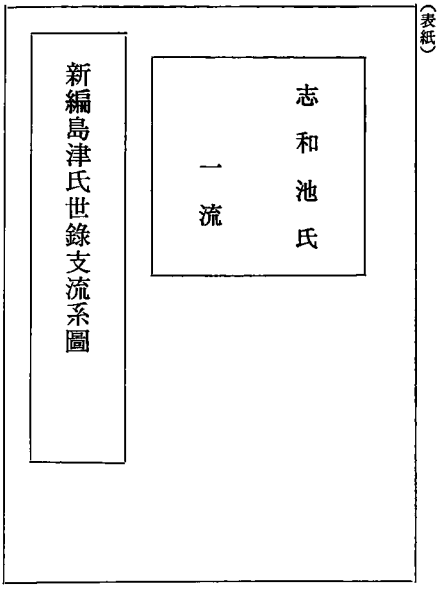
久位
小四郎
○母同前、
○發心名良識、後稱權大僧都法印泉昌院、
○慶安元年戊子五月廿二日死去、年五十六、

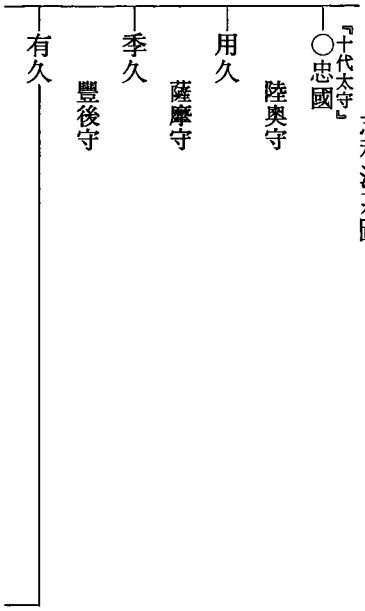
久良
初忠豐　中久守　仲四郎
○母野村大學助元綱女也、
○吉利山城守久在爲猶子、

久伴
五郎四郎　作助
○母同前、
○明暦二年丙申七月十八日死、法名覺智性圓、

久守
初政信　忠守　仲右衛門　仲之助　源右衛門
左平太
○元禄六年癸酉二月二十六日誕生、實父鎌田十左衛
門政常、母平田新左衛門宗政女、
○當家元祖伯耆守七代之嫡孫至義岡作助久伴、無嗣
子絶、而後五十餘年也、於茲、太守吉貴公、欲
以家統之絶再興之、寶永六年己丑九月九日、使政
信相續久伴之家、比志島隼人範房傳　命、
○同年十月二日、比志島隼人述　命、使忠守爲御家
老直觸今改寄合並、
○補小林地頭職、
○轉任物頭・用人・寺社奉行・與頭之職、
○正德三年癸巳三月、肝屬兼柄傳　高命曰、當家之
實名嫡子代代免許久之字、二男以下避久忠之字、

宜以豐之字爲實名之字、雖然其後依有故障、正德五年之冬、拜領實之字、依庶族皆改實之字、





出羽守　大島元祖、竹崎亦此家支流、

忠福
出羽守

△忠豐
初豐久　伯耆守

○文明十六年甲辰十二月廿日、率郎從三百餘人、而發向日州飫肥、構一陣於逆谷竈之藏、同廿二日、敵兵二千餘寄竈之藏來、忠豐及出羽守忠福駈對之合戰移刻、敵數十人屠殺之矣、雖然遂負忠豐戰死者也、是偏所以盡忠於　太守忠昌公也、于時、末吉十郎三郎・入田・片野坂等同戰死矣、出羽守忠福・和泉隱岐守已下諸士數十人被傷、而退當陣去、敵亦翌夜引退畢、

○法號喜命道有居士、

出家一人
女子

忠堯
源左衛門尉　播磨守　○法名白山道見、
忠通
義岡元祖、六郎三郎　○法名一翁道純、
女子一人
法名蘭窻妙春、
忠常
播磨守
○有背于　貴久之事、退于北郷氏領地、在于此者尚矣、由是其後爲家臣者也、
○法號圓也繼鑒、
女子
女子
忠光
右衛門尉　初號志和池、
○自忠豐至忠堯二代之際、領志和池、故以其地定稱號矣、
○法號聖海常見居士、
忠繩
治部大輔
○天正十四年丙戌、於豐後州戰死、年三十四、法號宗用常照、
女子一人
忠重
又七郎　治兵衛尉　加賀右衛門尉
○元龜三年壬申九月九日誕生、
女子
財部良順坊成賢妻、
○母竹井但馬守女、
忠定
千代鶴丸　又助　清左衛門尉
○慶長十二年丁未三月二日誕生、母同前、
徳龜丸
夭亡、

○寛永十三年丙子三月二十日死、法名傳正了心、

忠洪

安壽丸　又六郎　又左衛門　吉左衛門

○慶長十六年辛亥三月十六日誕生、母同前、

○延寶五年丁巳五月二日死、法名用峯常心居士、

忠原

利兵衛

○元和元年乙卯正月十三日誕生、母同前、

○貞享元年甲子十月二十五日死、法名黄岩宗葉居士、

女子

山内早太義員妻、

○母鬼塚圓長坊養綱女、

梅千代丸

早世、

○法名一露無信童子、

實盈

初久甫　利左衛門

○萬治元年戊戌正月四日誕生、

○忠原一子早世、故相續當家、寶島津筑後久龍家臣安樂采女兼爲之二男、

女子

島津筑後久龍家臣長倉喜右衛門祐位妻、

○母同家臣兒玉八左衛門宣行女、

實有

初久里　久馬介　吉左衛門

○貞享三年丙寅九月十七日誕生、母同前、

實用

初久富　久太郎

○元禄四年辛未正月五日誕生、母同前、

實賢

虎助

○寶永五年戊子五月八日誕生、母同家臣瀨戸與右

衛門清親女、

久照

安壽丸　加賀七

○寛永十三年丙子五月十二日誕生、母同家臣桑原伴右衛門種親女、

忠利

松房丸　宮内左衛門

○寛文二年壬寅五月十四日死、法名月桂淨心居士、

實興

初忠陳　作左衛門　源左衛門

○萬治三年庚子正月二十八日誕生、母同家臣大川原六左衛門女、

女子

同家臣有田甚右衛門正盈妻、

○母同家臣村田勝兵衛經年女、

實勝

初忠副　萬次郎　加賀右衛門

○元禄五年壬申四月二十日誕生、母同前、

（表紙）

新編島津氏世錄支流系圖

友久
忠幸

友久一流系圖

△友久――

又太郎　右馬頭　相模守　母伊作四郎左衛門尉勝久女也、

○九代　太守陸奥守忠國他腹長男也、生他腹、以之故不得爲家督也、

○領知于田布施・阿多・高橋、是以、居住于田布施矣、

548

『正文在伊作衆田部四郎左衛門』

○　畠中之門　三郎五郎

四段　下ふるかわ

二段卅　しやうめん作

二段　中ふるかわ

卅　はしの口

廿ひらき　屋敷之内

い上九段卅

畠　屋しき

三斗まき

文明八年四月廿日　田部三河介

友久（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一五一一号文書ト同文ナリ）

○友久・同忠幸同心、田布施諏方大明神之造立新宇矣、其棟札記左、

封

聖主天中天　大檀那　大梵天王　右奉爲金輪聖皇天長地久紹隆佛法化度衆生當住持

迦陵頻伽聲

△　奉造立諏防（マヽ）上下大明神宮兩社　遷宮師　權律師秀範　國土豊饒諸人快樂故也仍造立志趣如件　延德貳年庚戌

哀愍衆生者

封

我等令敬礼　大願主　帝釋天王　殊者信心大檀主并結緣諸衆御息災安全子孫繁昌

律師継範　号慶覺房　當代官坂本彦左衛門尉正治

封

小工十人

大工武本氏定

十二月廿四日　鍛冶次郎太郎

當地頭伊地知次郎左衛門尉重頼

法　水　災　金　佛　風　災　應　身

意　蓮　火　災　報　口

大檀主　嶋津相模守友久

嶋津三郎左衛門忠幸

封

筆者圓房庚戌ヨリ乙丑マテ七六年

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一六九七号文書ト同文ナリ）

△運久

初忠幸　三郎左衛門尉　相模守　稱齋於一瓢、

(久ヨリ友)

550

『正文在坊津一乘院』

○田布施野崎名之内

十石薗之門

田數二町

廿貫文ニ賣渡し申候、

三年分子ノ歳、本錢以廿貫文ヲ請可申也、仍狀如件、

永正十年癸酉八月廿一日　一瓢（花押）

坊ノ津

智德院

『上包ニ有之』

坊津

智德院　一瓢

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一八四二号文書ト同文ナリ）

551

『在田布施常珠寺』

○　奉掛著長鐘一口

大日本國西海道薩

摩州田布施村大平山

常珠禪寺堂

本願施主藤原忠幸公

寄進雖然如是依破

損勵再興之志命工

陶之鑄之加之十方旦

越勠扶助之力以畢

功矣、

時大永四季甲申九月廿日

住持比丘宗麿

大工信在

（本文書ハ「旧記雜録前編二」一九九五号文書ト同文ナリ）

『正文在坊津一乘院』

○加春之御慶自是可申上候之處、遮而被仰下、殊ニハ配供令拜見候、抑其方無爲ニ罷成候者、渡海仕、最前可令參入候、恐惶謹言、

『天文五年』
潤正月廿一日　　藤原運久（花押）

進上　一乘院御同宿御中

『上包ニ有之』
進上　一乘院御同宿御中　　藤原運久

『右裏ニ有之』
嶋津三郎左衛門尉

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇〇三号文書ト同文ナリ）

○天文八年己亥七月一日卒、法名道登、號大年、大年寺殿、

○　大年道登大居士下炬

登科拔萃夢中榮　煩惱菩提乾闥城

瞥地飜身打筋斗　金剛正体甚分明

恭惟　新捐舘　大年道登大居士

三軍之傑
万人之英

行令回春　洽及于叢林竹木
仁德称乾　齊全於元亨利貞
家國依之偃戈甲　民戸依之樂昇平

加之

護持佛祖命脈列大覺寶位
拈提洞門関捩子弄王子誕生
善財童子能近侍　多宝如來好同行
生也不道死也不道　如月印水
默亦不是語亦不是　似谷傳聲
經曰　始知衆生本來成佛　生死涅槃猶如昨夢
雖然與广作广生金剛眼睛
勝熱波羅看不破閑神野鬼自屏營

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二三六八号文書ト同文ナリ）

（表紙）

桂氏

一流

新編島津氏世錄支流系圖

桂氏系圖

『元祖』△勝久

又七郎　遠江守　母伊作四郎左衛門尉勝久女也、

○十代之　太守陸奥守忠國四男也、

○晩年發心而名玄甫、稱阿水和尚也、

△常陸介

母島津中務大輔延久女、○法號忠玄義岳、

△忠利

常陸介　齋名松嵐、法名道意、

△忠利

彌三郎　常陸介

○永禄元年戊午十二月廿七日、一門中各以所領之地、定稱號爲小名字、故永禄二年己未正月三日、初號桂者也、

○法名清心、號節岳、

女子

新納伊勢守久饒室、

△忠昉

又九郎　神祇祐　山城守　太郎兵衛尉

○永禄元年戊午誕生、母桑波田氏女也、

○大友氏我嶋津氏之爲仇敵、欲渠之退治黨徒、太守催薩・隅・日三州外、豐・肥・筑前後五州中、

所以不屬大友之騎步、從日向・肥後之封疆、發向豐之後州、迄明年三月上旬、豐後半國已入　太守之手裡、于時

殿下秀吉公不忍大友之聞危急、而催數十万騎官軍來、乃渡關戸之聲已振豐後、由是、昔日降來者背島津氏隨大友氏、丁此之時、諸將議以日向・肥後分退軍於兩路、三月十五日、各去府內、忠昉退肥後路、途中軍勞非言之可得而伸、與新納武藏守忠元等俱、經球麻之嶮路、四月廿余日、歸入于平佐城、同月廿五日、

殿下入數千艨艟於薩摩郡川內、設本營於太平寺、揚大旗輝軍容、畏其猛威也、高城・水引・高江・隅城四壘已降各出質矣、唯匪平佐降伏之無意志、城裏之騎步相與誓云、與忍恥而保生、不如曝屍於戰場流名於後代、且復議云、各宜俟兵器之竭、兵器竭則必提短刀共接敵軍、爲骨肉於水塵、而後已乎、敢無怠弛之情矣、

○同月廿八日、

殿下使小西攝津守・脇坂中務少輔・九鬼大隅守等之兵爲前鋒圍平佐城、攻責者孔急也、雖然、城中不屈自若、及此之時、入來院某合力於忠昉、入士卒於平佐、有家臣高田橋安藝者、魁諸兵接大敵於藤崎合鏈而抽軍功、且復天辰村百姓三人、忽變心超城壁將遁去、安藝一見之則共屠殺焉、由是、城裏彌無一人之企異心者矣、漸敵兵暨攻破城門之時、忠昉指揮奮出、谷山次郎右衛門・春田主水・阿久根權介等直前屢戰、于時、九鬼之兵數百競進矣、高木帶刀衝入其軍中屠殺強敵、谷山紀伊被傷、於茲乎、家臣牧三河・村原對馬・同新助・桐原平右衛門・有馬分左衛門・前田四郎左衛門・岩本外記已下遂戰死也、然而不得陷而大軍引退矣、

○同年五月上旬、承　太守義久主命、遂脫冑以下城、拜謁　殿下、于時、匪啻感至剛、賜寶刀冶工寶壽、脇指也、珍戴百拜退出、時忠昉三十歲也、

○文祿元年壬辰、朝鮮國征伐之時、　兵庫頭義弘主之爲扈從之列、五月到于彼國、勞軍務者共六个年

554

也、

○慶長五年庚子、石田治部少輔三成背家康卿欲拒關東、催關西四十ヶ國之軍、已赴美濃國、　義弘主不得已、而到于其地、忠昉亦扈從、九月十五日、關ヶ原合戰味方之軍不利已敗、雖然義弘主伐破大軍中、經數ヶ州郡、無恙入我領州矣、忠昉片時不離其傍抽忠功、稱其賞賜二百石領地、記左方、

『正文在桂彌三郎忠康』

○今度美濃國關ヶ原之合戰致粉骨、從其伊勢・近江・伊賀・大和・河内・和泉ニ至り、歸國之路次傳、片時茂側を不相離、被抽奉公之段、神妙之至、尤感入候、仍知行貳佰石遣之候也、

慶長五
拾月十日　　維新○（印）

桂太郎兵衛尉殿

（本文書ハ「旧記雜録後編三」一二二〇号文書ト同文ナリ）

555

○備前中納言秀家法師休復關之原敗北之後、來于當國、屈居于隅州邊地、慶長八年癸卯、應　家康卿之徵、六月赴京師矣、　太守令忠昉海陸之爲警衛使、途中無事早速上著、諸般不有一失、而早歸國來反命、則賜感牘及寶刀、記左、

『正文在桂彌三郎忠康』

今度備前中納言殿就上洛、其方可相付之由俄申候處、片時不及思案令領掌、不移時日打立、感悅此事候、然而路次中入念、無恙早〻上着候故、　公方樣御前無吳儀相濟、播當家之面目候、此等之忠節永〻不可有忘却候、仍脇指信國遣之候、謹言、

慶長八年十一月十八日　　忠恒（花押）

桂太郎兵衛尉殿

『上包』
桂太郎兵衛尉殿　　忠恒

（本文書ハ「旧記雜録後編三」一八八九号文書ト同文ナリ）

○元和元年乙卯七月十八日、於隅州高山病死、年五十八、法號龍泉道活、家臣吉富大藏追跡殉死年四十二、

忠次

兵吉

○天正六年戊寅誕生、母上井武藏守董兼女也、與嚴親忠昉俱渡朝鮮國、慶長三年戊戌、將解歸朝之纜之際、十月十八日、大明國之艨艟遮海路、對其船遂戰死、年廿一、法號傑心良英、家臣深川加賀・海老原市十郎同戰死、

△忠秀

藤五郎　民部少輔

○天正十年壬午誕生、母同前、

○未迄志學之際、　兵庫頭義弘主之侍閣下、爲小性不去膝下、以故朝鮮國渡楫之時扈從、感其勞也、本給五十石、新恩五十石、共百石、文禄五年十二月廿一日、賜之者也、

○忠次早世、由是、爲當家之棟梁矣、

○正保三年三月十九日病死、年六十五、法號一桂長雲、

女子

諏訪治部少輔經兼室、

忠增

初忠益　久次郎　外記　太郎兵衛

○天正十九年辛卯三月二十八日誕生、母同忠秀、

○轉補大根占・吉田等地頭職、

○寛永十四年丁丑二月七日死去、享年四十七、法號虛叟了寂居士、

女子

平田監物宗乘妻、

○母大田吉兵衛忠好女、

宮千代

○寛永元年甲子十二月六日誕生、他腹、

○同八年辛未十二月二十七日死、法號消雲童子、

女子

外記忠守妻、他腹、

忠保

菊次郎　中將坊　休次郎　內記　木工之助

薙髮號如金、又改曰徹巖、

○寛永十二年乙亥十月七日誕生、他腹、

○同十三年十一月二十五日、忠保二歳、而初奉謁中納言家久公、時獻御太刀・三種二荷矣、

○明暦二年、忠保補串木野地頭職、

○同三年、　光久公以鎌田政喬降　嚴命、使忠保任吟味役、

○萬治三年十月十八日、　公使忠保任使役（今曰御用人）、高崎能延傳　貴命、

○寛文三年季秋、忠保與廣瀨次郎兵衛宗信共、奉公命航球國、是因大清册封使來著彼國也、

○同九年、　公使忠保任二番與與頭及番頭、喜入久甫傳　貴命、

○寶永七年庚寅九月十三日死去、享年七十六、法名道見徹巖居士、

忠守

彦三郎　外記　八左衛門

○慶長十九年甲寅七月十日誕生、母伊地知四郎兵衛姉、

○忠守者仁禮藏人賴景之三男也、忠增初無男子、故請忠守於賴景而爲養子、後生忠保、於是、賴景辭、忠增以使忠守還本家、雖然、忠增有所思、故告　家久公蒙許可、以第二女娶忠守、準忠保之次弟爲當家之二男家、

○當家代代御太刀進上、小番務焉、

○忠守歷任吟味役・町奉行・京都藏奉行、至御用人役、多年關勞政務、

○忠守轉補日州紙屋及加久藤・隅州横川等之地頭職、

○寛文九年己酉六月二十一日死去、法號廓照院洞然良古居士、

女子

新納喜右衛門久盛妻、
○母桂忠増女、
女子
大島清太夫久成妻、他腹、
忠崇
彦十郎　八左衛門
○寛文三年癸卯二月十八日誕生、母同、
○忠崇初奉拜謁　太守綱貴公之時、獻上御太刀一腰、
○貞享二年十二月二十一日、忠崇任兵具奉行今改物頭、
○元禄四年辛未二月二十八日死去、享年二十九、
法號玄中哲旨居士、
勝昌
初忠常　中忠方　三十郎　八左衛門
○天和三年癸亥五月四日誕生、母忠守女、
○忠崇無嗣子死、故勝昌嫁忠崇第一女、而相續當家、寶大島清太夫久成三男也、
○寶永二年十二月二十一日、勝昌獻御太刀銀・馬代於　吉貴公、奉拜謝継目之忝、
女子
勝昌之妻、
○母鎌田後藤兵衛政方女、
女子
深栖九右衛門政常妻、
○母同、
女子
早世、
○母忠崇女、
女子
○母同、
勝房
三十郎
○寶永七年庚寅八月二十一日誕生、母同、

忠英

休次郎

○明暦二年丙申八月朔日誕生、母喜入休右衛門久守女、

○任與頭及番頭、

○延寶三年乙卯十一月、綱貴公還國、時忠英奉禮使命赴于江都之路、於豐前小倉患疱瘡、十二月十四日、死于旅邸、享年二十一、法號桂岸宗雪居士、

忠厚

初忠昶　大部卿　太兵衛　外記

○寛文二年壬寅三月七日誕生、母同于忠英、

○延寶四年、忠昶奉　公命而立爲嫡子、時獻御太刀銀・馬代・三種二荷、　光久公御老衰、臨朝有勞倦、故不及拜謁、

○元禄十七年正月、忠昶任日州高城地頭職、

○寶永六年己丑正月朔日死去、法號知足軒一甘宗味大居士、

宗次

久八郎　一角　監物

○寛文七年丁未三月二十日誕生、母同、

○爲平田監物宗乘之後嗣、

○元禄二年己巳八月十八日死去、法號樹榮庭柏居士、

久太郎

夭亡、

女子

千代鶴　桂方

○母者　太守光久公之第二十五女、

○元禄九年十二月、鶴女嫁于町田忠以生一男子、後有故離別而還居父家、同十六年春、　太守綱貴公淑女龜姫君、爲　近衛大納言家久公好逑、於是、綱貴公鶴女氏族而且以有婉娩之德、撰爲師保媵近家、雖然、因　姫君之不幸遂歸父家、

○寶永六年九月十一日死去、法號月鏡院周山明光大

姉、

女子

種子島三左衞門時房妻、

○母同、

忠倚

早世、

○元禄六年癸酉七月二十四日誕生、母者　光久公御養女、實島津左衞門久道女、

久陳

初忠澄　太郎九郎　仁治太郎

○元禄十二年己卯六月二日誕生、母同、

○寶永四年十二月十五日、太郎九郎時歳九奉　公命於佐多豐前久逵之宅元服、號仁治太郎忠澄、加冠者久逵、理髪者樺山助太郎忠陽、既而登　城桂織部久祐携忠澄出　御前、獻折櫃物四合及三種二荷、而奉拜謁　吉貴公、則頂戴　御盃、加焉賜脇刀、

○正德三年三月、忠澄應　召而登　城、則相良長規傳　公命曰、父祖代代實名雖用忠之字、自今以後宜避忠字而用久字、且如二男家用勝字、因改久陳、

△忠能

又十郎　山城守

○慶長七年壬寅十二月十六日申時誕生、母樺山兵部太輔規久女也、

○我之父母無縁不居同室、再娶他人之女、雖然、罹奇病後母亦離別、故　太守黄門家久卿教吾母徵加治木之室、女子之爲後見、感其勞、元和二年十二月十六日、賜百石之領地矣、

○元和九年癸亥、爲　太守公之使節、赴武州江戸、既到着而候　營中、得見將軍家、且口有報謝之　台命、謹奉之退出、則賜衣服十領・道服五領、珍戴以歸旅宿矣、

556

『正文在桂彌三郎忠康』

○　以上

急度令啓候、然者貴所御事、今度當　將軍樣御世

渡被進候、其御祝儀之可爲御使由、　御意候間、其御心得候而、町田圖書頭殿へ被成御談合、御進物等御持參尤候、最前貴所御承候御使之儀者、江戸へ被罷居候衆へ、可然由候間、定而圖書頭殿より可被仰付候、委者、面高主馬首殿可被申達候、恐〻謹言、

十月廿三日　　比志嶋宮内少輔　國隆（花押）
伊勢兵部少輔　貞昌（花押）
喜入攝津守　忠政（花押）
下野守　久元（花押）

桂山城守殿　御宿所

（本文書ハ「旧記雜録後編四」一八二五号文書ト同文ナリ）

○寛永七年庚午八月二十四日、於武州江戸病死、年二十九、法號桂覺了嫩、

女子
伊地知縫殿助重治室、
○母伊地知駿河守女、
忠豐
久五郎　吉兵衛　他腹、
○當家代代獻御太刀、勤小番、
○延寶八年庚申閏八月三日死去、享年五十一、法號風山宗金居士、
忠宣
民部左衛門　他腹、
女子
他腹、
女子
桂長左衛門勝壽妻、
忠宣
三五郎　彌左衛門

○忠豐以無嗣故爲養子、實大田小平次久知二男也、
○元禄七年甲戌九月五日死去、享年二十八、法名
傑心文英居士、

勝壽
初重書　中忠洪　長左衞門
○延寶五年丁巳七月二十一日誕生、母日置吉兵衞
久喜女、
○忠宣無嗣子故爲後嗣、實秩父勘助重能三男也、

勝行
長松
○寶永五年戊子二月晦日誕生、母桂民部左衞門忠宣
女、

女子
島津玄蕃頭忠紀室、

△忠知

又十郎
○忠能依無繼子爲猶子、實　太守家久卿庶子也、自
寛永十一年六月至慶安二年六月、連續當家、雖然、
於茲乎、辭當家如元爲　太守之庶子也、

△忠康
彌三郎
○正保三年丙戌五月二十日誕生、母島津豐後久喜女
也、
○忠知辭去當家之後、無繼嗣、由承應二年癸巳四月
十五日、依　太守之命、爲後嗣連續當家、實島津
市正忠弘二男、
○寛文四年甲辰六月二十九日死去、享年十九、法名
月心良秋居士、

△久澄
初久常　竹鶴丸　靱負　式部　太郎兵衞　入道
號恕休、

○正保四年丁亥九月十九日誕生、母鎌田治部少輔政統女、
○忠康早世、故寛文四年八月三日、爲後嗣、實島津安藝守久雄二男、
○同年九月朔日、獻御太刀銀・馬代於　光久公、奉謝爲後嗣之忝、
○寛文四年甲辰十一月、任大姶良地頭職、而后轉補敷根及飯野等之地頭職、
○同十一年辛亥三月、務番頭赴于江都、時奉　光久公之命、久澄使野州日光山、是因見執行　前大樹大猷院殿之御年回法事也、既而翌年五月、旋麗府、
○久澄兩一延寶二年同八年勤　光久公還國之御禮使、奉拜謁將軍家、因獻品拜賚如恒例、
○天和元年辛酉、　公以久澄任横目頭今大目附、勤職有年、
○元禄五年壬申、久澄奉　太守綱貴公命、總監島津虎安丸公之三男後玄蕃忠直家之事、
○同六年癸酉仲秋、使島津宇右衛門久祐光久公之十四男也妻久澄之養女爲壻養嗣、是由預有　公命也、
○同十六年癸未、久澄歳及不惑、由是十月十日、奉訴讓家督於久祐、如願蒙　恩許而隱居、

└女子
　久祐之室、
○久澄無子故養爲子、實島津中務久輝女、

△久祐
　長千代丸　又二郎　宇右衛門　織部
○寛文五年乙巳十一月八日誕生、母鹽田與左衛門國實女、
○元禄四年二月三日、　太守公降久祐可爲久澄之壻養子　命、而同六年、爲婚禮居久澄宅、
○久祐未爲養子之前、　光久公賜高三百石、雖續當家、右高無改變拜戴、
○元禄五年、久祐隨　公到于江都任番頭、
○同十一年十一月十五日、久祐勤　綱貴公著城之御禮使、赴于江府、翌年正月十五日、奉謁

將軍家、獻品拜賚如恒例、
○同十六年十月十日、蒙　恩許而相續於家督、
○寶永二年九月二十一日、任横目頭今大目附、
○同年十月四日、任末吉地頭職、
○同月二十八日、爲家督之御禮、獻三種二荷・太刀・馬代、
○同五年正月二十七日、　太守吉貴公命賜　前太守公之翁主於剛于男太七郎久音室、於是、久祐獻美酒嘉肴奉謝　恩命忝、
○同七年閏八月六日、轉末吉而補穎娃地頭職、
○正德元年辛卯六月二十七日死去、享年四十七歳、法名微笑院心開一華大居士、

女子
島津宮內久通室、後有故離別、
○母島津中務久輝女、

女子
○母同前、

△久音
長千代　長熊　太七郎
○元禄十三年庚辰正月十三日誕生、母同、
○寶永五年二月朔日、　太守吉貴公加冠於長熊號太七郎久音、島津太藏久明理髮、乃奉獻折櫃物六合・酒樽三荷・御太刀銀・馬代、奉謝、而頂戴　御盃且拜領脇刀、
○同日、以三種二荷・御太刀銀・馬代、獻上　儲君忠休公、奉謝元服之事、
○正德元年八月二十七日、久音奉　公命、相續亡父久祐之家統、同年九月十五日、以三種二荷・御太刀銀・馬代、獻上　太守吉貴公及　儲君忠休公、而奉謝　恩命之忝、
○同三年三月二十五日、　公命曰、當家自今以后、至二男以下之庶子、避久忠之兩字、而以勝字可爲實名之通字、賜證帖、因二男以下改勝字、

勝之
初久長　豐次郎　權九郎

○元禄十四年辛巳七月晦日誕生、母同前、

○寶永七年庚寅四月朔日、　太守吉貴公加冠豐次郎
號權九郎久長、時島津將監久當理髮、獻上拜賜之
品物、等久晉元服之例、

勝章

初久方　竹之丞

○寶永元年甲申八月十七日誕生、母同前、

勝（ママ）

德之丞

○寶永三年丙戌二月二十二日誕生、母同前、

（表紙）

喜入氏
一流
第一

新編島津氏世錄支流系圖

『元祖』
△忠弘

喜入氏系圖第一

五郎三郎　若狹守

○十代太守陸奥守忠國公之七男、母伊作四郎左衞門尉勝久女也、

○有吾一子、然而幼矣、弟又二郎賴久越領地於吾、亦無繼子、由是、俾賴久定猶子爲直子於賴久之子連續吾家也、

557

『正文在島津安藝守久雄』

○誠年甫之御慶重〻雖事旧候、猶以多幸、抑山田治部少輔被申候子細先以可然候、當所へ越之時、巨細可相尋候、就之尊札畏存候、恐惶謹言、

正月廿三日　　忠昌（花押）

人〻御中

（本文書ハ「旧記雜録附録一」六九一号文書ト同文ナリ）

558

『正文在島津安藝守久雄』

○　尚〻、實のくたり可然存候て、奔奔あるへき樣にも、爰元の人共見えす候、可有推量、心え候へき時儀候ハヽ、示給へく候、

實相寺下着之由、其聞候、弓矢いよ〳〵取乱時分候、當所の爲躰うちほり共に散〻候、又ハ爰元の（と脱カ）人共下向無用候共存候樣見え候間、方以なにやらん候へ共、於于今ハ無是非候、推量あるへく候、爲圍河州者、定御悦喜たるへく候、たよりの時者、御心え候へく候、薩州御入候、萬心安やうしやう

559

こそ仕候へ、連〻とり合憑存候、かしく、

『上書』　若狭守殿　　忠昌

（本文書ハ「旧記雑録附録一」六九二号文書ト同文ナリ）

『正文在島津安藝守久雄』

○今度のたひの稽古に、今日連歌を仕候ハんすると存候、御入候ハ、可参合候、但、御隙によるへく候、かしく、

『上書』　ハかさとの　　忠昌

（本文書ハ「旧記雑録附録一」六九三号文書ト同文ナリ）

560

『正文在島津安藝守久雄』

○　又寺に風呂御たかせ候よし被仰候、此方へ御入候ハ、同道申へく候、

夜中ハ夜ふけ候まて参合、物かたり申うけ給候、喜悦候、仍今日之雪のう地とせん申無計候、此方へ御入候て物語あるへく候、七ら(ママ)をこそ月ほしと待居候へ、一首

七らはむかしおとこにあらねとも
はしたかの羽やしらふなるらん
思かねたかかり行ハ冬の日の
川かせさむミかりやなくらん

『上書』　わかさとの　　まさ

（本文書ハ「旧記雑録附録一」六九四号文書ト同文ナリ）

○永正元年甲子八月八日卒、法號明巌莫聰大居士、

女子

島津出羽守忠徳室、母松本入道女也、

女子

早世、

頼久

又二郎　母松本入道女也、

○爲舍兄忠弘之猶子也、

『二代』
△頼久

又二郎　攝津介　齋稱清隱、

○雖爲忠弘之弟、爲猶子而居于指宿也、

○明應八年己未二月廿四日卒、法號芳巖道譽大居士、

『三代』
△忠譽

三郎四郎　攝津介

○叔父頼久爲父忠弘猶子、仍吾亦爲頼久猶子、當代既去指宿、移居喜入也、

『正文在當家』

○態令啓入候、仍當時世間之躰措諸事候て、武具不可如用意之儀候、爰元以得心相過其身之分限、物具・兵具所持之人數、一段忠節之基不可過之候、先〻被相勵家中并以下人衆等、被致用意候者、此夏中何樣罷越候て、以一見其喜可申候、委細者老者共可申候之間、閣筆候、恐〻謹言、

561

『大永五年歟』
卯月十四日　　忠兼（花押）

攝津守殿

『上包』
攝津守殿　　忠兼

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇〇六号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　誓狀

一弓矢者儀偏可憑入候事、

一就諸篇可頼入候事、

一就如此申候者、若讒者雜説之時、申分可聞開之事、

一ケ樣ニ者乍申、眞實自其方可被背之時者、不可及力候事、

一於我等一代者、何樣等閑疎略有間敷之事、

『牛王』
右條〻有相違事者、

奉始梵天帝釋四大天王三界所有天主地類、惣日本六十余州大小神祇、別者伊勢天照大神　八幡大菩薩　摩利支天　天滿大自在天神神罰冥罰可罷蒙者也、

562

563

仍右如件、

大永六年二月廿日　　忠兼（花押）

攝津守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇二一号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○小宰相殿穎娃殿へ用段候て越候、申子細共候間、從其茂諸事可然樣ニ御催促賴存候、就彼儀用一行候、恐ゝ謹言、

九月六日　　勝久（花押）

攝津守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一二八号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　又當時此方殺生禁断之間、にへ之事欠申候、大望にて候へ、諸事可申承候時者、相互ニ可申通候、追而書候、

誠仲陽之御慶賀重疊雖申舊候、尚以不可有盡限候、

564

多幸候、抑如此之御祝言承候、御滿足至候、以御同前候、其堺御左右承候、大慶候、此方茂無相違候、從以前之以筋目承候、是又御同前候、何樣篇目之時者可申承候、万吉、恐ゝ謹言、

『大永七年歟』

二月廿一日　　日新（花押）

謹上

攝津守殿

御返報

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇八二号文書ト同文ナリ）

○大永八年戊子三月八日卒、法號空山長善、

玄濟

雲舟和尚、福昌寺十七代住持、

『四代』

△忠俊

初忠房　三郎四郎　式部大輔　攝津介

○永正五年戊辰誕生、母今給黎民部少輔久慶女也、

○天性大力而能射勁弩也、

565

『正文在當家』

○　猶〻、珍物五ヶ賞翫無他候、何樣可申入候、御音問祝着此事候、就御瘧病之義從是可申入候之處、當時者如何樣御平愈候哉与存延候ヰ、未甲斐〻敷之由示給候、無勿躰存候、拋何條をも御養性肝要候、少茂御快氣之節者御越御雜談所希候、何樣從是可申入候、萬端、恐〻謹言、

菊月廿五日　　日新（花押）

式部大輔殿　御返報

相模入道

日新

『上包』

式部大輔殿　御返報

（本文書ハ「旧記雜録附録一」八三六号文書ト同文ナリ）

566

『正文在當家』

○兼續今日此方へ來着候、御快氣候者、涯分御會尺可憑存候處ニ、無其分候、口惜候、拋諸事遮而御養性專一候、何樣明隙候而可申入候、次者當時一段之節、辛螺・海老之籠四、賞翫仕候、万端、恐〻謹言、

十月十二日　　日新（花押）

式部大輔殿　御返報

相模入道

日新

『上包』

式部大輔殿　御返報

（本文書ハ「旧記雜録附録一」八三七号文書ト同文ナリ）

567

『正文在當家』

○　尚〻、如此之意見併藝州私之儀迄候、我等より非内儀等候、よく〳〵可令内談子細候之間、自今遙〻之儀たるへき覺悟に候、爲御存知候、先日大隅渡海、寒中長〻越無申計候、其後疎遠非本意候、仍其砌粗内談候ッ、福昌寺進退之事、此比藝州以越之儀、妙谷寺へ爲私之義意見候、其趣

者、福昌寺及荒廢候之事、過半者先年就和尚御住之砌、爲始妙谷門中違乱之故候、不入是非者、檀方之非御爲候之事、言語道断候、然者、福昌興隆之基者、龍さま之御間窕候て、甚深會合候ハヽ、何樣龍さま御再住之儀、可事成候欤、さ樣ニ候ハヽ、其續之事者、誰人にも檀那之可有御前社候へ、此茂無御承引者、妙之御事他國可然候、如此被居候条、檀方之扱成筈見得候与、再三諫被申候哉、妙谷寺御返答之儀、藝州意見納得候、さ候ハヽ、龍さま妙谷寺之儀、可有純熟候、就其定而御歸寺可事成候欤、其時者自然、福昌寺後代之沙汰候て、龍より守等可被傳之由候する欤、於其儀者、曽而領掌有間敷候、其謂者既恕岳和尚及末期、可被渡守之由候つれ共、天祐和尚御法渡者義理相背、外聞不可然候由、堅辞退候欤、于今其覺悟同前にて候、龍御住之處、聊以不可有障之儀候、後代之儀自然龍さま御弟子なとハ不可有信用候、次之事者、只平更檀那之御一言ニ社有へく候へと、無覆藏聞

▽㊐得候、先以指向之申事者如比妙之處、就分別者畢△竟者門衆之結構迄たるへき由、我等より藝州へ返事候、其方御得心共如何候哉、哀龍さま之御奥旨分明ニ聞得分、御即今之趣不被相殘、一途被仰出候樣、御調法所仰候、万事可被添御心之事、憑存之外無他候、隨而歳暮之御慶重〻雖事舊候、猶無窮限明春者、早〻自他之滿足可申合候、就中、佳例之千句發句起相副進之候、諸事期來喜候条、先閣筆候、恐〻謹言、

十二月廿四日　　貴久（花押）

三郎左衛門尉
藤原貴久

『上包』
謹上　攝津守殿　御返報

（本文書ハ「旧記雜録附録一」八五八号文書ト同文ナリ）

568

『正文在當家』

○誠年甫之御慶賀重疊雖申事舊候、猶更不可有盡期候、多幸〻、

抑如此候、御祝言遮而承候、大悦候、何様追而御慶倍〻可申加候、仍五明二本預候、畏入存候、従是モ進献候、祝儀計候、賀書、恐〻謹言、

二月廿八日　　藤原貴久（花押）

謹上　攝津介殿　御返報

（本文書ハ「旧記雑録附録一」八六一号文書ト同文ナリ）

569

『正文在當家』

○　尚〻、預御狀候、畏悦之至候、殊肴送給候、則賞翫申候、

不存寄御芳問畏入存候、如仰前月者參會種〻申承候、其已後者此方祭礼取亂候て、連歌なとも興行不申候、來月者必致參會、積念可令謝候、萬端、恐〻謹言、

文月十九日　　貴久（花押）

攝津介殿　御返報

『上書』

攝津介殿　　三郎左衛門尉　貴久

（本文書ハ「旧記雑録附録一」八六二号文書ト同文ナリ）

570

『正文在當家』

○　尚〻、此方之事、菖蒲之比者加世田へ可存立覺悟に社候へ、

先日、伊地知より來候市來野之栗毛之事、此間以秘藏雖立置候、今度藝州凡物語之趣者、從其御望間敷被思通候之間、只今引せ進之候、爲父馬被差置候者、可爲祝着候、將亦、此程堺目細〻敵相働候、雖然、於串木野敵十人計討取て社候へ、事〻期來信候之条、閣筆候、恐〻謹言、

五月二日　　貴久（花押）

『上書』

攝津介殿　　貴久

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一四八号・「旧記雑録附録一」八六五号文書ト同文ナリ）

571

『正文在鎌田盛右衛門』

○今程何事御座候哉、此方者意進ゐられ候て、唄を
こそ申候へ、前日之御傳言細〻うけ賜候、畏入存
候、又かさかけはゝをこしらへ申候、哀〻頃ふと
御越候へかし、參會申度存計候、恐〻謹言、

八月十一日　　貴久（花押）

『上書』
攝州
參
御宿所

貴久

『右裏有』
三郎左衛門尉

（本文書ハ「旧記雑録附録一」八六六号文書ト同文ナリ）

572

『正文在當家』

○其後何条御事候哉、朝暮御床敷申候、先日以參會
卅六句仕候、聽而守全江つかハし候、頃付墨候て
被遣候、先〻拙者はつれ申候、口惜候、其外はつ
れ候人衆あまた候處ニ、其方てんかす御多候、勿
論なから了簡なくこそ申候へ、仍村田方今月廿壹
日より千句企可被申候、御越候様ニとしきりニ被
存候、御越可畏入候、急度御越待為申へく候、懐
紙御披見之ためニ書狀ニ相そへ進入申候事候、恐
〻謹言、

三月十四日　　貴久（花押）

三郎左衛『此下字不見』

『上書』
攝津守殿
御宿所

貴久

（本文書ハ「旧記雑録附録一」八六三号文書ト同文ナリ）

573

『正文在當家』

○今年者度〻御越候、祝着之至、仍三郎四郎殿此度
こそ細〻參會申候、可然御見え候、大慶此事候、
偽ハ申間敷候、つゝミハ一向覺不申候、中にもは
しらかしおかしく候、就中、此方にて貴所之名立
候よし、御物語候ッ、名之立候ハ、いまた賴母敷
事たるへく候とわらひ申候、御歸宅之後ハ存やり

たる計候、恐ゝ、かしく、

『上書』
攝州　　貴久

（本文書ハ「旧記雑録附録一」八六〇号文書ト同文ナリ）

574

『正文在當家』

○　猶御捻畏入存候、子細可申候へ共、ちと虫氣に候間、重而申候へく候、

明日喜入へ思召立候よし可然候、仍御方身上事、先日承候間、我等も申候ヶ、于今其分かハらす候、就中、泉より僧㊐之可参候由心得申候、又鹿兒嶋へ廿日比存可立候、此度は御越有間敷之由、細ゝ得心申候、恐ゝ謹言、

三郎左衛門尉
貴久

『上書』
龍雲寺
御貴報

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六五六号・「旧記雑録附録一」八六七号文書ト同文ナリ）

575

『正文在當家』

○　尚ゝ、御歸以後者何等事共候之哉、此方之事長逗留候之間、心底之分可有御察候、

先日者長ゝ御滯留細ゝ申承候、本悦此事候、其後徒躰こそ候へ、毎ゝ御床敷存計候、於于今者、舞をおほえ候て其慰のミ候、將又、龍雲寺いまた其方御逗留候之哉、是又別紙雖可申入候、可預御心得候、又弥もし事、いまほと腹中損候て、福昌寺御奉公さへ申得候ハぬ躰とこそ聞得て候へ、恐ゝ謹言、

三月三日　　貴久（花押）

『上書』
攝津介殿　　貴久

（本文書ハ「旧記雑録附録一」八六四号文書ト同文ナリ）

576

『正文在當家』

○昨日卅朝、市來衆至串木野現形候、五ヶ所御同前候間御滿足察存候、於爰其堺之御立柄者如何候哉、

577

委細預示度候、此等之趣進入使僧候間、閣筆候、
万期來喜之時候、恐〻謹言、
六月一日　　日新（花押）
攝津守殿
御宿所
相模入道
『上包』
謹上攝津守殿
御返報
日新
（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一四九号・「旧記雑録附録一」八四六号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』
○此度就出張之儀、同心御馳走之由、最御賴母敷覺候、然處色〻奇瑞共多候之條、今度動之事存留候、既中途邊及被打出候哉、勞煩之儀不及申候、恐〻謹言、
六月廿三日　　貴久（花押）
攝津介殿
『上包』
攝津介殿　　貴久
（本文書ハ「旧記雑録前編二」二三六二号・「旧記雑録附録一」八六八号文書ト同文ナリ）

578

『正文在當家』
○就唐之船着岸之儀、先日者預御懇調之義候、喜悦不少候、其刻御礼可申入候之處、蒐角延之候、心外之至候、仍雖不珎物ニ候、水母卷令進入候、萬期後音之時候、恐〻謹言、
八月十日　　日新（花押）
攝州
御宿所
相模入道
『上包』
攝州
御宿所
日新
（本文書ハ「旧記雑録附録一」八三八号文書ト同文ナリ）

579

『正文在當家』
○先日於伊集院へ約束申候、川野へ千句之時宜、來

七日より興行可申候、自五日之比御越候ハヽ、六日より談合可申候、將又發句之事此度出來候ハヽ、可示預候、心事期再會之時候、恐〻謹言、

十二月四日　　日新（花押）

『上書』
攝津介殿　御宿所　　相模守日新齋

（本文書ハ「旧記雜録附録一」八三九号文書ト同文ナリ）

○天文十八年己酉十月廿七日卒、年四十二、法號義運源忠庵主、

（表紙）

喜入氏
一流
第二

新編島津氏世錄支流系圖

580

『正文在當家』

○去三日、於隅州横川合戰被碎手、御名譽無比類候、剩手之衆數多粉骨之由神妙候、仍企一行候、恐〻謹言、

永禄五年壬戌六月十六日　　義久（花押）

喜入式部太輔殿

『上包』

喜入式部太輔殿　　義久

（本文書ハ「旧記雜録後編一」二二五号文書ト同文ナリ）

581

喜入氏系圖第二

『五代』

△季久

初忠賢　三郎四郎　式部大輔　攝津介　入道名久宅、

○當代初號喜入、

○天文元年壬辰誕生、母樺山美濃守廣久女也、

『正文在當家』

○　尚〻、飫肥・福嶋堺當剋無替儀候、然共福嶋浦於都井勝利候、敵七十人ニ及討捕申候、爲御心得候、

先度者以一翰申入候之處、其後預御返札候、令拜領候、仍御屋形様此方御光儀候条、爲可得貴意与風參上申候、然者弓箭之御相談最中候、爲御心得

申通候、雖遠方之事候、每事可被添御心事賴存候、猶期後音時候、恐惶謹言、

『永禄六年歟』
五月二日　（北郷時久）一雲（花押）

喜入式部大輔殿　御宿所

（本文書ハ「旧記雑録後編一」二五四号文書ト同文ナリ）

582

『正文在當家』

○大隅國菱刈院之内花北名之事、依勲功所号給分也、速可被知行之狀如件、

永禄拾貳年己巳
卯月十四日　義久（花押）

憲入式部太輔殿

『上包』
憲入式部太輔殿　義久

（本文書ハ「旧記雑録後編一」四九二号文書ト同文ナリ）

583

『正文在當家』

○從匠作預御札、黄金拾兩被懸御意候、則御報申入候、仍此鞍一口小笠原家所持候、不慮拙者求置候、伊勢因幡入道相添折紙進献之候、可然樣可預御意得候、猶宗固可被相達候、恐々謹言、

『永禄十二年』
六月十一日　藤孝（花押）

喜入攝津介殿　硯左

『上包』
喜入攝津介殿　細川兵部太輔藤孝

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五一四号文書ト同文ナリ）

584

『正文在當家』

○匠作御女中方江御服唐織以　御内書御拜領候、尤珎重存候、此等之趣、能々以御分別、可被相達事肝要存候、恐々謹言、

『永禄十二年』
六月十一日　藤孝（花押）

喜入攝津介殿

585

『上包』
喜入攝津介殿　硯左

細川兵部太輔
藤孝

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五一五号文書ト同文ナリ）

○元龜元年庚午之季夏、爲大願成就企上都矣、丁此之時、　太守義久公欲使我達將軍家、八月中旬、著船於泉州境浦、先以參宮伊勢、其外靈佛靈社參詣畢、而後上京都、爲　義久主使節、候　營中、見將軍家義昭卿、匪啻匍伏一見之、頂戴將軍家之酒盃且賜寶刀冶工康光、非亦當家眉目乎哉、

『正文在當家』

○雖未申通候、令馳筆候、上洛之由珎重候、逗留中必來臨待入候、將又從義久音信令祝着候由、相心得可被申候、猶進藤左衛門大夫可申候也、

『元龜元年』
八月十九日　（近衛前久）（花押）

喜入攝津介とのへ

586

『上包』
喜入攝津介とのへ

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五六五号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　猶〻、御上洛之由御床敷存迄ニ候、從御家門も以御書被仰候、猶相心得可申旨候、以之外急書中如何申入候哉、

珎札拜見、祝着之至候、仍御上洛之由、御大儀奉察候、如仰先年罷下候刻、種〻御懇之至、一切不忘置候、御上洛幸之儀候間、罷越以面申承度心中ニ候へ共、牢籠故世上憚、又者不得寸暇候条、乍存無其儀候、併無沙汰之樣ニ罷成無念候、於樣躰者、具大泉坊へ申渡候間、不及是非候、次線香一把被懸御意候、御懇之至、祝着難申盡候、猶追而可申入候、恐〻謹言、

『元龜元年』
八月十九日　長治（花押）

喜入攝津介殿　御報

587

『上包』
喜入攝津介殿
御報

進藤左衛門大夫
長治

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五六六号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　御下の事と令推量候、此あふき一包見參入候、
向後者細〻可申通候、かしこ、

588

先度者始而遂面談、本望之至、誠不知所謝候、俄
御下のよし驚入候、明春者必可指下使節候之際、
委曲厥刻可申述候、適〻事に世上之物忿早〻御、
かしこ、

『上書』
嶋津攝津守殿
（昭高院道澄）
（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五六七号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○旧冬者適上洛之処、依忿劇之時節、不及雅興遺恨
此事候、重而期在京之儀計候、細〻遂面謁本望難

589

忘候、仍三部抄進之候、愚筆寔憚入候、猶清譽上
人可有演説候、狀如件、

『元龜二年』
二月廿六日
（昭高院道澄）
（花押）

喜入攝津守殿

『上包』
喜入攝津守殿
（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五七七号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○御下向已後不申處、預御狀候、路次無事御歸國由、
珎重候、御在京中細〻遂向顔祝着至候、隨而銀子
十文目給候、令喜悦候、又六かたへ御言傳具申聞
候、本望由申候、次爰元之躰、先靜謐分候、可御
心安候、又以一書承分注進之候、將又雖比興候、
ゆかけ二具參候、又二郎殿御言傳申度候、尚以向
後御用儀候者可承候、恐〻謹言、

『元龜二年』
卯月廿九日　　宗賢（花押）

590

喜入攝津守殿　御返報

『上包』小笠原備前入道　宗賢

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五八二号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○御下國已後、兩度以便宜令啓候、一通茂相達候哉、京都儀唯今靜謐候、御在洛之刻、就念劇疎遠躰、於于今無念至候、向後於此方相當子細、無御隔心可承候、不可有疎意候、將又十一日韻懐紙進之候、聊表空書計候、恐〻謹言、

『元龜二年』六月十一日　藤孝（花押）

喜入攝津介殿　硯左

591

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五八四号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○先度者上洛之刻、懇切之次第不知所謝候、其已後以屋簡（ママ）成共可被申候処、不得好便、彼是無沙汰非本意候、抑當門跡末寺大弘寺之儀、此刻被預置候様、別而取成所希候、向後者切〻可申通候、仍此一裏進之候、猶不断光院（昭高院道澄）可有演説候也、かしこ、

『元龜二年』九月三日　（花押）

木入（ママ）攝津守とのへ

592

『上包』木入攝津守とのへ　（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編一」五九七号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　尚〻、老父かたより御報雖可申候、濃州ニ在之間、從拙者如此候、

喜入攝津介殿　硯左

『上包』細川兵部太輔　藤孝

593

珎札令披見候、先年御下向以後無幸便付、不申承候、京都物忿故、方〻令在國之間、罷成無音候、次うつほの儀被仰上候、虎豹皮平仁斟酌候之間、以猪皮申付候、將又爲御音信銀子三兩請取申候、仍雖左道候、ゆかけ二具進之候、猶御使可被申候間、不能詳候、恐〻謹言、

『元龜二年歟』
九月十日　　秀清（花押）

喜入攝津介殿　御返報

『上包』
小笠原民部少輔

喜入攝津介殿　御返報　　秀清

（本文書ハ「旧記雜録後編一」五九八号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○此比豊州仁令在國間、得好便一筆申候、去年者從匠作預御音信候、御懇之儀共候、貴所御在京之砌、至攝州中嶋　御動座之前後、以外取乱、無沙汰已失面目候ヰ、幸御隣國江罷下事候条、自様躰与風

594

罷越、御礼可申述候かなとゝ有增候、乍去當國ニ抑留候間、雖未定候、万一於罷越者、萬〻可得御指南候、小者一人之躰餘〻憚多事候、態以使者可申處、旅中無人之儀候間如此候、自然次御取成所希候、不宣、

『元龜二年』
霜月十四日　　宗入（花押）

喜入攝津介殿

『上包』
喜入攝津介殿　　宗入

（本文書ハ「旧記雜録後編一」六〇五号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○至貴國池坊下向由候、被指華事譜代儀候、殊更當時無比類之旨、執沙汰候、此等之通、太守江御取成專一候、悉皆　御入魂所仰候、恐〻謹言、

『元龜三年歟』
卯月七日　　藤孝（花押）

喜入攝津介殿　御宿所

595

『上包』
細川兵部大輔
藤孝

喜入攝津介殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録後編一」六一九号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　追而、先日於祢寢口御働之通、御使者委敷物語承候て、如見存、一段驚入候、何樣無比類御樣躰、浦山敷社存候へ、將又若頃御慰にも可被成かと存候間、餘之事ニ駒を取せ候て、致進献度之旨申事、自然其分ニ被思召候者、彼久屋へ大方御好之通承候者、見合候てくひらせ度候、但御氣可合申事、乍難測、無御等閑印迄之申事候、

扨茂其元乍安中、差寄目出度罷成候由、蒐角御祝言難申盡候、御滿足之儀察存候、拙者心底者一人之目出さ之樣奉存事、可爲御察候、仍先度ハ以御使者御懇之段、一段畏入存候、何樣懸御目、諸事御物語可申承覺悟候之処、不慮之事故、言語道断迄候、如何樣伺公可申之条、其砌多年之積欝可申霽候、隨而別紙にて申入候分、向後無御忘却御校量賴存候、諸事弥可得御意外無他候、猶久屋齋可被申候条、令省略候、慶事、恐〻謹言、

『天正二年』
三月四日　　『薩摩守』義虎（花押）

喜入攝津守殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雑録後編一」七三三号文書ト同文ナリ）

596

『正文在當家』

○此度於鹿兒嶋各御同前雖爲可申心底、無御伺公之条、別而以一翰申入候、其意趣者、先年度〻以御神名、奉對　御屋形樣、心疎有間敷旨言上仕候え喜、雖然、拙者進退之事、肥薩之境罷居候之故欤、又者昔之御事于今可存殘之推察も候之哉、世上風説耳痛事共、折〻承付樣候之条、拙子氣仕之事、蒐角難申盡候、乍去某無心疎旨者、度〻如申

候、菱苅御弓箭之時分、粗顯申候、從其打續、弥
餘身忝御事計候之處、仇　御恩而可報事、爲人可
有之候之哉、世之習にて誰も訟訴者申事候之間、
澁谷御退治之境節、何分ニ御番申度之由申上候之
処、高城・水引を被下、東郷・中郷者可被召殘之
由、被仰分之旨候間、御尤之儀奉存候之条、其由
申上、從其高城・水引之御番申候えッ、又山野之
事、是者努無間懸處、可被下之由、於大口上意候
之条、度〻斟酌之儀雖申上候、頻御番申せとの御
事之条、于今如此候、然者、懸忝御事迄にて候之
処、或被仰分御差置候、東郷ニ可仕馳籠之通、又
者中郷を可致知行之由存なとゝの風聞之通、此跡
者承様共候えッ、左様ニ共仕候而者、奉對　御屋
形様、不申御敵にて可候哉、其外様〻風説折〻之
由申候条、自然義虎左様之惡心聊も於存者、此前
進上仕候奉始　御神名、三國ニ可有御座諸神諸佛
諸天之御罰蒙、忽無故可成終様等の旨、毎朝御祈
賴存候、右之申事、若〻於御納得者、自今後、義
虎就身上、露も忌〻敷事可有風聞時者、先〻被糺
云口、一途之御校量賴入候、又案出事候、東郷殿
者澁谷同前ニ雖被申御敵候、先〻懸り能候へハ、
相良殿と談合候而、我等を可被崩折候之処、以
御運之御影、結句彼方之在所多〻格悟申候之条、
左社家風之人〻可被口惜存之間、左様之從人〻之
内茂、被云事かとも推量申候、是者可爲理欤、何
自爰右条〻之御分別悉皆賴存候、巨細猶伊地知勘
解由助殿へ致口達候条、委敷御尋候之者、可爲滿
足候故、閣筆候、心事、恐〻謹言、

『天正二年歟』
三月四日　　義虎（花押）

喜入攝津守殿　御宿所

『上包』
薩摩守
喜入攝津守殿　御宿所　　義虎

（本文書ハ「旧記雜録後編一」七三四号文書ト同文ナリ）

597

『正文在當家』

○就京都不慮之儀、至紀州滯留候、諸口調略之間、本意不可有程候、此度抽忠節者、可悦思食、爲其差下江月齋、猶藤長・昭光可申候也、

『天正二年』卯月十四日　（足利義昭）（花押）

喜入攝津守とのへ

『上包』喜入攝津守とのへ

（本文書ハ「旧記雜録後編一」七四〇号文書ト同文ナリ）

598

『正文在當家』

○就織田彈正忠恣所行相積、去年被退城都、至紀州被移御座、諸口被相催、　御入洛御行半候、仍被成御内書被差越江月齋候、關東勢既東美濃江亂入并大坂高屋四國衆等、可抽忠功覺悟無二之条、御本意不可有程候、此節御馳走、可被悦　思召之通、猶得其意可申由、被仰出候、恐ゝ謹言、

『天正二年』卯月十四日　昭光（花押）

藤長（花押）

『上包』一色式部少輔入道

眞木嶋玄蕃頭

喜入攝津守殿　藤長

（本文書ハ「旧記雜録後編一」七四一号文書ト同文ナリ）

599

『正文在當家』

○就不慮之儀、去年被退城都旨、被成　御内書之趣、以別紙令申候、仍御在洛刻、預御尋候処、上山城表依在陣、無音之段、失本意存候、於樣躰者、定歳阿・道正可爲演説候、委細江月齋可被相達候、恐ゝ謹言、

『天正二年』卯月十四日　式部少輔藤長（花押）

謹上　喜入攝津守殿

一色

『上包』謹上　喜入攝津守殿　式部少輔藤長

600

（本文書ハ「旧記雑録後編一」七四二号文書ト同文ナリ）

『案文在八木主水』

○就　御入洛御調略之儀、被成下　御内書候、謹頂戴誠冥加惶多令存知、仍沈香拾斤・段金一端致進上之候、可然様宜預洩御披露候、誠惶誠恐謹言、

『天正二年』十一月十二日　　攝津守季久（花押）

眞木嶋玄蕃頭殿

進上

一色式部少輔入道殿

601

（本文書ハ「旧記雑録後編一」七六三号文書ト同文ナリ）

『案文在當家』

○依織田恣所行相積、至紀州被移　御座之由、驚入計候、就御調略、被成下　御内書候、謹而頂戴、寔以冥加惶多令存知候、仍諸口御計策可被成御本意之段、目出奉存候、此堺遙波濤相隔之条、不及是非候、雖然義久於相當之忠勤者、聊不可有別儀

602

之由候、巨細猶江月齋可爲演説候、恐惶謹言、

『天正二年』閏十一月五日　　攝津守季久

眞木嶋玄蕃頭殿

謹上

一色式部少輔入道殿

（本文書ハ「旧記雑録後編一」七六四号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○爲警固逗留辛勞候、就其無疎意入魂之由、令祝着候、向後不混自余可申付候、弥此節可然様馳走可喜入候、仍詠歌大概序、染惡筆遣之候、委曲申含貞知候、節〻來臨可爲神妙候、自然之次、對義久能〻可申聞事肝要候也、

『天正三年』三月廿八日　　（近衛前久）（花押）

『上包』

喜入攝津守とのへ

（本文書ハ「旧記雑録後編一」七九六号文書ト同文ナリ）

603

『正文在當家』

○珎札令披見候、誠久不申承候、雖御床敷候、無好便候、近年者、就京都物忿令在國、旁以無音候處、御懇示給候、祝着之至候、殊沈香如御狀送給候、畏存候、次去夏嶋津中務少輔殿御上候、細令參會、御噂數〻申候、定而可有御物語候、只今又左金吾御上候、從貴所承候間、聊無疎意候、然共早御下向之条、御殘多候、哀〻我等存命之内、御上洛候へかし、今一度遂向顔度候、近年令中風、弥老耄無正躰候、可有御推量候、隨而庖丁刀二枚進之候、左道之至憚入候、爰元之躰、此御方可有演説候、猶期後音候、恐〻謹言、

『天正三年』八月廿日　宗賢（花押）

喜入攝津守殿　御返報

『上包』小笠原備前入道　宗賢

喜入攝津守殿　御返報

（本文書ハ「旧記雜録後編一」八〇九号文書ト同文ナリ）

604

『正文在當家』

○雖未申付候、好便之条令啓候、仍親にて候者、不慮相煩候て、去八月七日ニ遠行仕候、別而御知音申候處、如此爲躰令迷惑候、不相替於御入魂者可爲本望候、將又乍輕微扇子五本進之候、寔〻表祝儀計候、道之義相應之御用候者可仰上候、不可疎意存候、恐〻謹言、

『天正五年』九月三日　雅継

嶋津喜入攝津介殿

605

『上包』喜入攝津介殿　雅継

（本文書ハ「旧記雜録後編一」九二九号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　猶〻、愚身事、信長一段之入魂候事候、樣躰不可有其隱候間、不及申候、新武・新彈ニも言傳申度候、馳走共難忘候由、可有傳達候、

以參可申候へ共、急便之条、無其儀候、期後音候、

遙久不能書信候、抑日州之儀被任存分之由其聞候、弥重ゝ、大慶此事候、尤則差下使者、可及祝義之処、敵地相擇候ニ付、無合期所存之外候、可然之様取成賴入計候、將又愚身事、信長一段懇切入魂、不混自余、外聞實儀施面目儀共候、於様躰者、可心易候、委曲貞知可申下候、次日州被任本意候之条、鷹共數多所持候由無隱候、此節所望候、匠作へ懇望申候間、猶以取成可爲本望候、於自分も一居至馳走者、可爲祝着候、万一同心候者、義虎迄被越候者、此方へ可相屆候、内ゝ申遣、其手筈候間賴入候迚之儀ニ、一日も早ゝ所希候也、かしこ、

『天正六年』
卯月七日　（近衛前久）（花押）

嶋津攝津守殿

（本文書ハ「旧記雜録後編一」九七〇号文書ト同文ナリ）

606

『正文在當家』

○　迫而令申候、扇子二本進之候、歌ハ梶井門跡御筆にて候、御音信迄候、

（ママ）
從愛岩使者被差下之由候間、令啓候、仍今度於日州表被碎御手、御存分被仰付候由、京都風聞其隱無之候、誠ゝ寄特難紙面盡存候、尤使者差下雖可申候、信長殿御手遣ニ付、不慮ニ御在洛候故、執紛不及是非候、於爰元似相之御用候者、可被仰上候、大夫殿へも以書狀令申候間、宜御取成憑存候、猶志水入道可申候、恐ゝ謹言、

『天正六年』
六月十八日　雅継

喜入攝津介殿

607

『上包』
喜入攝津介殿　雅継

（本文書ハ「旧記雜録後編一」九八二号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○尓來無音之處、幸便之条令啓候、仍今度者、於日

608

向口被及一戰、殊無比類御高名、早速御本意之段都鄙無其隱候、其後以一札雖可令申、拙夫茂南方ニ令在陣、不得風信所存之外候、自然爰許相應之儀承、不可有疎意候、恐〻謹言、

六月廿一日　　秀清（花押）

喜入攝津守殿　御宿所

『裡ニ有』小笠原民部少輔

『上包』喜入攝津守殿　御宿所　秀清

（本文書ハ「旧記雜録後編一」九八三号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○好便之条馳筆候、抑其國豊州之儀于今被申結由候、大友事對信長公無疎略候、殊更藝州邊へも可及行調談候処、如此之段無勿躰候、縱義久存分雖在之、此刻可申扱候、宮內卿法印・猪子兵介同前候、則我等へ(但も)え書狀爲披見下申候、無吳儀同心候樣ニ、吳見專一候、猶金鐘寺和尚へ申渡候、巨細之段貞

609

知可申候也、

『天正七年』九月十九日　（近衛前久）（花押）

嶋津攝津守とのへ

『上包』嶋津攝津守とのへ　（花押）

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一一〇六号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○久不申通処、芳札本望候、仍豊州之儀ニ付而、義久存分之通尤候欤、雖然無事可然之旨、信長公被申出候間、近日差下伊勢因幡守候、無吳儀樣連〻氣遣肝要候、次沈香五十兩到來、喜悅候、猶從是可申候也、

『天正八年』九月六日　（近衛前久）（花押）

喜入攝津守とのへ

『上包』喜入攝津守とのへ　（花押）

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一一七〇号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○豊薩無事之儀、度〻申越候ヵ、不可有吴儀趣尤候、早〻可申下処ニ、去春以來大坂之儀令馳走、手前取紛延引候、然者爲信長公可差下伊勢因幡守由被申出候、於樣躰者、以一書申候、存分共雖可在之、此砌同心候樣ニ取成專一候、將又大鷹被差上可然候、我等も其内所望候、次扇十本遣之候、猶貞知可申候也、

『天正八年』九月十三日　（近衛前久）（花押）

喜入攝津守とのへ

『上包』

喜入攝津守とのへ　（花押）

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一一七二号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○好便之条令啓候、仍去年豊薩兩國和睦之事、以御朱印被申下候筋目、急度入眼候樣ニ、吴見肝要候、自然於相滯者不可然候、其故者、至藝州不圖可被

及行之由候間、早速御請尤候、委曲對伊勢因幡守申含候条、不能巨細候、猶道吐可申候也、

『天正九年』三月二日　（近衛前久）（花押）

嶋津攝津守殿

『上包』

嶋津攝津守殿　（花押）

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一一九二号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○追而馬介一懸大守江令進献之候、可然樣可預御心得候、隨而太刀一腰進之候、誠表祝志計候、恐〻謹言、

九月十一日　玄蕃頭昭光（花押）

謹上　喜入攝津守殿

眞木嶋

『上包』

謹上　喜入攝津守殿　玄蕃頭昭光

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一二三八号文書ト同文ナリ）

613

『正文在當家』

○雖未申通候、染筆候、抑今度京都依不慮之錯乱、諸事無外方候、此砌於預馳走者、可爲祝着候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

『天正九年』（天正十年カ）十一月廿六日　（近衛信尹）（花押）

喜入式部大輔殿

614

『上包』

喜入式部大輔（久道）殿　（花押）

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一二四七号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○好便之条、一筆令啓候、仍播州上月敵城即時落去候而、尼子勝久其外家僕一兩輩切腹候、依其利同國之宇野民部少輔已下諸士過半屬御味方候、委細之段、定而可相聞候間、不能懇筆候、抑如巷説者、到肥州表候而、義久有御出馬被得大利旨、尤珎重候、然者弥　公儀御馳走之樣、太守へ時〻可被申入事、肝要存候、猶期來信候、恐〻謹言、

『天正十年』十月廿七日　昭秀（花押）

喜入攝津守殿御宿所　一色駿河守

『上包』

喜入攝津守殿御宿所　昭秀

（本文書ハ「旧記雜録後編一」一二九八号文書ト同文ナリ）

615

『正文在當家』

○今度到中國被移　御座、對毛利　御歸洛儀被仰聞処、則被及御請候、然者始武田・北條・上杉其外東西之軍士令一統、既御進發火急候、就其可被抽忠功通、大守江被成　御内書候、幸先年其方參洛之儀候条、此節弥御馳走肝要旨被仰出候、尤雖可被成　御内書候、唯今無其御儀段、委曲任口上候、隨而蓮華坊事、聖護院殿御家來候、無聊尒仁候間、被差下之候、猶得其意可申由　上意候、恐〻謹言、

『天正十二年歟』卯月十七日　昭秀（花押）

昭光（花押）

616

城入殿　　眞木嶋玄蕃頭

一色駿河守

『上包』
城入殿　　昭光

（本文書ハ「旧記雑録後編一」一三四八号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○到豊州毛利可及行由候条、別而相談様、對義久吳見簡要、仍去夏白糸十五斤到來、目出候、猶兩人可申候也、

『天正十四年』十一月十八日　（足利義昭）（花押）

喜入攝津守とのへ

617

『上包』
喜入攝津守とのへ

（本文書ハ「旧記雑録後編二」二一三号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○追而令申候、去年爲御使柳澤新右衞門尉上之刻、手火矢壹町被懸御意候、尤本望此事存候、重而又被差下候、自然折節者、萬〻可然之樣御取成所仰候、恐〻謹言、

『天正十四年』十一月十八日　　昭秀（花押）

喜入攝津守殿

御返報『上包』
一色駿河守

喜入攝津守殿　　昭秀

御返報

（本文書ハ「旧記雑録後編二」二一一号文書ト同文ナリ）

618

『正文在當家』

○　返〻、御鬮之事、於　霧嶋社頭御申之儀も勿論有之、又被成勸請、從何方モ被伺　御神慮事も、先例多〻候之条、餘仕惡まゝ如此候、自然談合衆之内ニ、表裏共候て氣任之由、言上之方もや候之覽と、寔乍邪推ケ樣にも存計候、右条〻貴所爲得心申候間、相構而書躰他見有ましく候、

改年之御吉兆千喜万悦、多幸〻〻、仍如存知、至

栂牟礼滞在候處、於三江口依勝利、府内へ罷越候
て可然之由、被申衆モ有之、又南郡ヲ堅め候て可
然之段被存候方モ有之、又從秋月者玖珠郡ニ火色
を立候ハヽ、秋月事者不及申、高橋迄家連續之儀
不可有別儀之由、使節被指越、頻ニ懇望候之条、
何共難黙止故、談合衆ニ相尋候へ者、二三方之儀
召惡候之段尤候、儀者可爲御神慮之由、各被申候
条、任其旨　霧嶋へ御鬮申候へ者、玖珠郡之可爲
行之由、　御神慮事成候間、朽網へ致陣易、玖珠
郡へ先勢指越候処、先ゝ松木与申城令落去、其外
二三ヶ所屬利運候、御神慮奇特候欤、然処從府内
可參之由被申越候間、既雪月廿八日ニ、如府内打
立候処、白刄之内候之哉、相賀鶴并一両所岡より
致破却候、就夫道択・入田左馬助を始各地下衆、
府内へ罷通候てハ、南郡事皆ゝ可相易候、左樣ニ
候ハヽ、府内事ハ通路可爲不通之由申候、拙者モ
令納得、自然府内へ罷越候て南郡打替候ハヽ、此
跡之辛勞可爲徒事存、其日ハ相留、年頭ニ又府内
之樣打立候之処、野上よりハ頻越山之儀被申候、
又地下衆ハ如旧冬朽網へ滞留と申候間、栂牟礼に
てのことく仕惡候て、可爲如何之由、談合衆へ尋
候へ者、又ゝ御鬮申御神慮次第可然之由、皆同被
申候間、又　霧嶋へ伺御神慮候へ者、陳易之儀野
上へとおり申候、ヶ樣ニ兩度まて御神慮事成候ま
ゝ、中書を朽網へ相頼候て此方へ罷越候、然処以
氣任令陣易候之由、　大守樣被思食候哉承候て、
心遣千万候、曽以私之非分別候、種ゝ致談合、其
上御神慮重く存如此候、其首尾候之哉、帆足之事
致落城、打續數ヶ所任存分候、乍重言聊無私曲之
段、出合之時者執合所希候、餘者美作守可被申候
条、省略候、恐ゝ謹言、

『天正十五年』
二月七日　　義珎（花押）

喜入攝津守殿

『上包』
喜入攝津守殿　　義珎

（本文書ハ「旧記雜録後編二」二三二号文書ト同文ナリ）

○天正十六年戊子七月十四日卒、年五十七、法號昌圓季久庵主、

女子

早世、

女子

島津左衞門尉雖曰結婚、早世、

忠道

圖書助

○天文十六年丁未誕生、母季久一腹、

○能筆也、

○天正二年甲戌正月十九日、於隅州根占戰死、年二十八、

○子孫記別紙也、

久續

小四郎

○天文十八年己酉誕生、母季久一腹、

○天正二年甲戌正月十九日、於隅州根占與兄忠道俱戰死、年廿六、

619

（表紙）

喜入氏
一流
第三

新編島津氏世錄支流系圖

喜入氏系圖第三

『六代』
△久道
三郎四郎　式部大輔
○永禄二年己未誕生、母佐多伯耆守忠將女也、
『正文在當家』
○豊薩無事之儀、度々申越候ヽ、不可有吳儀趣尤候、

620

早々可申下処ニ、去春以來大坂之儀令馳走、手前取紛延引候、然者爲信長公可差下伊勢因幡守由被申出候、於様躰者、以一書申候、存分共雖可在之、此砌同心候様ニ專一候、次扇十本遣之候、猶貞知可申候也、狀如件、

『天正八年』九月十三日　（近衛前久）（花押）

喜入三郎四郎とのへ

『上包』
喜入三郎四郎とのへ　（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄後編一」一一七三号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』
○雖未申通候、染筆候、抑今度京都依不慮之錯乱、諸事無外方候、此砌於預馳走者、可爲祝着候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

『天正九年』十一月廿六日　（天正十年カ）（近衛信尹）（花押）

喜入攝津守殿

『上包』
喜入攝津守殿（季久）　（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編一」一二四六号文書ト同文ナリ）

『正文在當家』

○　猶〻打立之日限相通候之時、聊以不可延引候、以上、

旧冬以來致相談候唐入之儀、寔〻前代未聞之故、萬可難成之通案中候、雖然皆同無殘所被仰付候間、涯分諸篇可被入御精事此節候、儻者從京都一左右次第可罷立候、以其前自爰元可有注進、其翌日栗野へ致參着、可被成御供事專一候、爲後日染筆候訖、恐〻謹言、

『文禄元年』正月廿七日　　義弘（花押）

龍伯（花押）

喜入式部太輔殿

（本文書ハ「旧記雑録後編二」八一七号文書ト同文ナリ）

『案文在義岡宮内大輔久喜』

○御札令拜見候、至高麗御渡海、長〻御在陣御苦勞、乍恐奉察候、就中拙者不罷立趣被仰越候、尤存候、雖然唐瘡（疱）散〻相煩、行步一切不相叶候、以此故弟候者光明寺在寺仕候、義久被仰談、幽齋跡目被取立候分際人數之儀者、去春相立候、更無疎略儀候、右之樣子國之者各可爲存知候、可被成御尋候、此等之趣可得御意候、恐惶謹言、

石田治部少輔殿　御報人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録附録二」一四一七号文書ト同文ナリ）

○羅楊梅瘡加療治者有年、然而不能、慶長五年庚子八月廿二日、於永吉卒、年四十二、法號心翁久安、

女子

島津河内守忠倍室、母島津左兵衛尉尚久女也、

早世、

萬千代丸

○久道男子未産之時、已爲猶子、實　太守義弘公四男也、

○天正十六年戊子、於泉州堺早世、九歲也、法號
湖月宗江、

長阿彌

○母桑幡左馬頭道隆女也、雖爲實子已以萬千代殿
定猶子、故爲時宗也、
○七歲夭亡、

久延

又二郎　藏人　母久道一腹、
○島津五郎四郎忠俊既遂戰死、無一子之可續其家者、
由是隨　太守義久公之命、連續其後者也（其後裁義岡之二字所以稱其姓賜之也）、

久親

小四郎　掃部助
○永禄六年癸亥誕生、母久道一腹、
○天正十四年丙戌七月廿七日、陷筑前州岩屋城之時
遂戰死、年廿四、

『七代』
△忠續

初忠政　攝津守

○元龜二年辛未誕生、母久道一腹、
○丁兒童之時、入淨光明寺爲時宗遂薙髮、以名長阿
彌、後稱長重、
○久道之猶子及實子夭亡、而無可續家之子、爰長岡
兵部大輔藤孝法師幽齋在薩摩州之際、謂于　太守、
令長重還俗以連續久道之家、實天正十七年十九歲
也、

623

『正文在當家』
○昨日者被成御出、御はなし悦着ニ存候、晩方伊源
へ御出候ハヽ、同心仕罷出度存事候、恐〻謹言、
十一月十八日　　忠恒（花押）

『上書』
喜攝樣　　より
人〻申給へ　　又八

（本文書ハ「旧記雜録後編二」一二三七号文書ト同文ナリ）

○文禄元年壬辰、渡朝鮮國、數年勞軍務者也、

624

『正文在鎌田清右衛門政近』

○　猶〻　龍伯様致御供下國候通、先条申候へ共、此度之御取亂ニ各在京候之条、先我等壹人可罷下由、石治少より承候、斟酌深重ニ候へ共、任公儀罷下候、以上、

其表永〻在陣、辛勞之至不及是非候、併別成事も無之由候、尤珎重候、京都無吳儀候、其地御番御普請等之儀、弥〻不可有由断候、就中國元人數之事取替之儀、從　大閤様被　仰出候間、應其旨龍伯様致御供令下國事に候、猶於様躰者、此使可申候、謹言、

『文禄四年』七月十三日　　義弘（花押）

喜入攝津守殿

（本文書ハ「旧記雜録後編二」一五六五号文書ト同文ナリ）

625

『正文在當家』

○永〻在陣辛勞之段、不及是非候、仍其地別成事も無之由風聞候、於其分者祝着之至候、此表も無吳儀候、弥〻又八郎へ奉公之儀、可被入念を事賴入候、兼亦

大閤様以御下知、不殘所替罷成候、在國之衆ハ、自身談合所へ相詰候条、不及是非候、留守之人衆へハ、別而可被添心之由申出候間、定而可爲其分候、爲心得候、謹言、

『文禄四年』九月十三日　　義弘（花押）

喜入攝津介殿

（本文書ハ「旧記雜録後編二」一五九七号文書ト同文ナリ）

626

『正文在當家』

○其後者令無音候、仍此表御働之儀、近〻ニ可被仰付候由、被成

御朱印候間、其許用意不可有油断候、然者我等事、武庫様於御渡海者致上洛、國元御檢地共被仰付候御礼共申上、私用をも相達候て、又如此方之可差渡由、從石治少被仰遣候間、武庫様御渡海次第、与風可令歸朝覺悟候、自然御働八月之比迄も相延

627

『正文在當家』

○永〻在陣中別而辛勞之段、于今無忘失候、然者無吳儀歸朝之由目出候、殊今度其地之躰具ニ注進、尤肝要之儀候、弥無油断世上之躰被聞合、切〻可被相通事可爲滿足候、此國之儀、歸朝已後毎篇無易儀候、可心安候、猶期後音之時候、恐〻謹言、

拾月十四日　　忠恒（花押）

喜入攝津守殿

（本文書ハ「旧記雜録後編三」一二三号文書ト同文ナリ）

候者、必其許爲見廻可令下國候条、兩三人之儀も、從是一左右迄其元へ可被相待候、爲其如此候、恐〻謹言、

『慶長元年』四月十三日　　忠恒（花押）

源七郎殿

喜入攝津守殿

入來院又六殿

（本文書ハ「旧記雜録後編三」四八号文書ト同文ナリ）

628

『正文在當家』

○　以上

其後者無音之至候、在陣中者別而辛勞之儀不及申候、仍就奥入圖書頭歸朝に候、然者巨細申越儀共候間、可被逐面談事尤簡要候、尚重而可申通候、恐〻謹言、

『慶長元年』十一月廿五日　　忠恒（花押）

喜入攝津守殿

（本文書ハ「旧記雜録後編三」一三九号文書ト同文ナリ）

629

『正文在當家』

○慶長五年庚子之秋、從　惟新君、發向濃州關之原也、

○其後者不通候、仍其許にて爲存外、始福嶋左衛門大夫殿・山口勘兵衛尉殿其外諸大名御懇之段、外聞實儀難述筆舌候、存家之忠節令上洛仕合可然、滿足此事候、　内府樣も關東へ御下向候へ共、年

内必御上國之由候間、御礼申上、重〻吉左右可申下候、將又其元之儀、毎事可被入念事簡要候、謹言、

『慶長七年』霜月四日　　忠恒（花押）

又吉殿
藤次郎殿
又五郎殿
新納新八郎殿
喜入攝津守殿

『上包』
又吉殿
藤次郎殿
又五郎殿　　忠恒
新納新八郎殿
喜入攝津守殿

（本文書ハ「旧記雑録後編三」一七三六号文書ト同文ナリ）

○慶長八年癸卯十月、爲使節上洛、是亦内大臣家康公、爲任征夷大將軍之上達祝詞也、進獻方物砂糖貳樽・鉄炮貳挺也、

630

『正文在當家』

○　猶〻遠國ニ御座候者、書狀可被持歸候、以上、態用飛札候、於京都定幽齋老へ被差出候ハん、彼方へ久〻無音候之間、書狀進候、同進物二種堅可被相屆候、委曲者書面ニ申候、心得候而可被申候、恐〻謹言、

『慶長八年』十月十八日　　龍伯（花押）

喜入攝津守殿

（本文書ハ「旧記雑録後編三」一八七四号文書ト同文ナリ）

631

『正文在當家』

○川助七へ熟談之事、いよ〳〵其とをりかたり候へく候、此中者、なにとも無心元候つる、存分とも候哉、きかまほしく候、又、有方申やうの事共、めつらしく候、かしこ、

『慶長九年歟』
極月七日　　忠恒（花押）

『上書』
喜攝津守　　忠恒より

（本文書ハ「旧記雑録後編三」一九七二号文書ト同文ナリ）

○慶長十三年戊申之春、爲　龍伯君之使節、赴駿府與江戸、　太守家久公之使與島津下總守常久、所以海陸共同也、

○慶長十九年甲寅、爲長崎有馬鬼利師旦宗旨退治、山口勘兵衛殿下向彼地、丁此之時、領數多士卒往其地、隨山口殿下知也、

632

『正文在當家』

○　覚

一役人間からの事、

一酒過候ハぬやうに尤候事、

一子とも中あしく成候ハぬやうに心得可入候事、

『元和四年』
五月三日　　家久
攝津守

（本文書ハ「旧記雑録後編四」一五一七号文書ト同文ナリ）

○寛永六年己巳正月、大野正右衛門尉久武・高崎伊豆守能乗・平田盛右衛門尉純正共三輩、爲　太守家久公之使節、帶舊冬十二月廿七日數條令書、從武州江戸來曰、家老比志島宮內少輔背　太守之命者其數多矣、使渠止政事先屈寶福寺山寺、而後可配遠流焉、聞　君命之細大、則卽日俾之蟄居山裏矣、又國府民部左衛門尉帶正月八日之貴簡來曰、定宮內少輔之配所於種子島、早可放流其地也、貴簡記左、

633

『正文在當家』

○先日以兩三人申遣候、宮內少輔此中曲事深重ニ雖存積候、不出其色候、雖然、向後爲國家成間敷候間、稠申出、先日三人之衆へ直ニ如申聞候、一旦

之折檻ニ而非可直人候之間、弥以其心得此方より
申遣趣、無用捨談合肝要候、猶委細者國分民部左
衛門尉へ申含候、謹言、
『寛永六年』正月八日　家久（花押）
喜入摂津守殿
川上式部大輔殿

『上包』
喜入摂津守殿　家久
河上式部大輔殿

（本文書ハ「旧記雑録後編五」二〇三号文書ト同文ナリ）

634

○寛永六年己巳之春、
將軍家家光公惱痘疹瘡、爲達其安否於　上聽、爲
使節參候江戸也、

『正文在當家』

○　以上
又三郎殿爲縁組之祝儀、被差越使札、至遠路懇切
之儀、令祝着候、委細之段者下野守可申達候、謹
言、
『寛永六年』三月十八日　家久（花押）
喜入摂津守殿

『上包』
喜入摂津守殿　家久

（本文書ハ「旧記雑録後編五」二二六号文書ト同文ナリ）

635

『正文有之』

○陽春之御吉祥、愉悦萬幸、逐日猶更不可有盡期候、
仍其以來者絶書音、頗背本意候、弥御安泰之由、
大慶令存候、次者雖不珎候、金之花入一箇致進献
之候、聊補寸志計候、至祝至禱、恐惶謹言、
正月十五日　中山王尚豊（花押）
喜入摂津守殿
参人〻御中

（本文書ハ「旧記雑録附録二」四五〇号文書ト同文ナリ）

636

『正文在當家』

○任便宜用一書候、仍上洛已後者打續天氣能候間、定而早〻可爲上着与存候、然者美作守不圖煩出笑止之躰候、養生之儀理心藥被用候、我等も兩度見廻候、何共氣色無然〻候之間、心遣之至候、殊更留守之儀候条、別而笑止ニ候、さこそ其方心遣令啓候、委儀者從在所可相聞候間、不具候、理心殊外精入養生候、脈躰者能候由申候間、次第ニ可爲本復候、追〻吉左右可申越候、謹言、

『寛永十二年』三月廿三日　　家久（花押）

喜入攝津守殿

『上包』喜入攝津守殿　　家久

（本文書ハ「旧記雜録後編五」八二一号文書ト同文ナリ）

○寛永十八年辛巳八月三日、將軍家若君家綱主誕生、由是爲使節九月赴江戸、達慶賀於　台聽也、

637

『正文在當家』

○爲年始之祝詞到遠境、早〻使者殊太刀一腰・馬代銀子壱枚到來、令祝着候、猶委細之段者從伊勢兵部少輔可相達候、謹言、

正月廿一日　　（島津光久）忠元（花押）

喜入攝津守殿

（本文書ハ「旧記雜録附録二」一四一九号文書ト同文ナリ）

○正保二年乙酉三月十八日卒、年七十五、法號快覽忠慶、

忠榮

三郎四郎　中務太輔　母伊集院下野守久治女也、

○島津中務太輔豐久戰死于濃州關之原、而無一子之續家統者、故爲猶子連續其後也、

『八代』△忠高

三郎四郎　美作守

○慶長十一年丙午誕生、母忠榮一腹、

○寛永十二年乙亥三月五日卒、年三十也、法號恕山
芳忠、

女子
基太村越中守忠智室、

女子

龜次郎
○寛永四年丁卯誕生、母島津下總守常久女也、
○寛永十四年丁丑閏三月九日早世、年十一也、

『九代』
△忠長

攝津介
○忠長者　光久公之庶子也、爲忠高之後嗣、數年連
續當家、而後去當家相續北鄕家、

久憲
初久豫　大膳亮
○母同龜次郎、
○既爲島津彈正久慶之猶子連續彼家、而彈正死後有
其故去彼家、寛文元年之春、爲忠長弟如元冒喜入
之稱號者也、
○丁右之時、賜高一千五百斛之新恩地、且復久憲曽
高六十餘石有買得地、共所以領知之也、

『十代』
△久亮

初忠辰　幼名虎千代　求馬　右衛門　又兵衛
安房
○萬治元年十月十四日誕生、母中井五左衛門女也、
○久亮者　太守光久公之十四男也、兄忠長去當家爲
北鄕氏後嗣、故久亮奉貴命繼此家矣、
○延寶六年七月十七日、　光久公還國、即日久亮奉
禮使命赴于江都、奉拜謁
將軍家、拜戴御衣服矣、
○貞享三年七月二十五日、久亮任家老職、
○同五年三月九日、補薩州伊集院之地頭職、
○元禄四年二月八日、　太守綱貴公爲述職、赴于武
都、久亮從　高駕、此般亦奉拜謁
將軍家矣、

○元禄十二年三月二十六日、久亮轉補薩州出水地頭職、
○同十五年三月十日、久亮又從公輿至于江都拜謁將軍家矣、
○寶永二年十月三日、久亮轉補隅州蒲生地頭職、

女子
肝付左門兼加妻、
○母鮫島氏女也、

女子
島津周防久陳妻、
○母同前、

女子
町田勘解由久孝妻、
○母同前、

『十一代』
△久致
初久貫　岩千代　宇左衛門　右衛門
○元禄四年七月八日誕生、母同前、
○同十二年二月二十八日、太守綱貴公手自加首服於岩千代、號宇左衛門久貫、拜戴脇刀一柄、理髮者佐多豐前久達也、
○寶永三年三月九日、久貫補與頭、
○同四年九月二十二日、久致賜家督、同年十月朔日、奉見　太守吉貴公、奉獻御太刀・馬代・三種二荷、
○同年十月二十一日、久致補薩州中郷地頭職、
○正德三年三月二十五日、肝付主殿兼柄傳　太守公之高命曰、當家之實名嫡子代代免許久字、二男以下不許焉、以譽字可爲實名字、故氏族僉改譽字矣、
○正德四年甲午二月六日死、法名本源院自天眞性居士、

譽清
初久芳　三次郎
○元禄十年丁丑十一月十四日誕生、母山崎氏女也、
○正德四年甲午四月三日死、法名機峯宗禪居士、

譽貞
岩之助

○元禄十三年庚辰六月四日誕生、母同前、

○為兄右衛門久致之猶子、

久（ママ）

釜次郎

○正徳三年癸巳三月六日誕生、母島津主水久輔女也、

○正徳四年甲午二月十六日死、法名芳圓幼花童子、

『十二代』

△久峯

初譽貞　岩之助　數馬

○兄久致死、且一子釜次郎亦早世無嗣子、故正徳四年七月三日、久峯賜家督相續當家矣、

（表紙）

喜入氏

一流

第四

新編島津氏世錄支流系圖

喜入氏支流第四

季久

初忠賢　三郎四郎　式部大輔　攝津介

○當代初號喜入、

○子孫記前、故略于此也、

女子

早世、

女子

早世、

忠道

圖書助

○天文十六年丁未誕生、母季久同腹、

○能筆也、

○天正二年甲戌正月十九日、於隅州根占戰死、年二十八、

久續

小四郎

○天文十八年己酉誕生、母同季久、

○天正二年甲戌正月十九日、於隅州根占、與兄忠道俱戰死、年二十六、

久正

字千代萬　十郎二郎　大炊助　入道名紹嘉、

○天文十九年庚戌誕生、

○忠道未有一子之際遂戰死矣、由是季久欲立後嗣、上達　太守義久公、令久正連續當家、實川上九郎

左衛門久光之長男也、

○慶長年間、久正當于　龍伯公隱居之時、任家老職、

○久正轉補于隅州財部・隅州國府等之地頭職、

○寛永九年壬申五月十八日死、法名代叟善昌庵主、年八十三、

『寫在蒲生衆谷口宮内左衛門』

○　中納言家久

夫喜入大炊入道紹嘉は、出てつかふるに忠貞をもはらとせしかは、舟かちとこゝろをやり侍し、退てハ花下にくらし、月の前にあかし、有爲轉變のことわりを觀し、四時移行をおしミて、和歌の道に心を染しか、今年身まかりぬる手向にとて、みたの名号を句上にして、六首をつらぬるならし、

無人の忘かたミやことの葉の
　　花の跡とふ法の山風

むらさきの雲も八重たつ夕霞
　　色分れぬハ涙なりけり

哀けになく音やいつこ時鳥
　　むなしきしての山路とおもへハ

みし夢の名殘ふけ行有明の
　　月の光りも照せ後の世

玉ゆらの露も忘れぬ忍草
　　しのふに堪ぬ鳥へ野の末

冬草の枯にし跡ハ白雪の
　　積るやあたし臺成らん

寛永九年七月十八日

（本文書ハ「旧記雜録後編五」五五〇号文書ト同文ナリ）

久洪

千代萬　十郎　吉兵衛尉　大炊助　久右衛門尉

○天正十年壬午十二月十七日誕生、母北原武藏守兼奉女也、

○任御使役（今改御用人、餘倣之）、

○寛永五年五月十三日、　太守光久公登　柳營謝家督之儀、時久洪扈從奉謁

將軍家、
○補隅州國府之地頭職、
○正保四年丁亥十一月八日死、法名月浦清新庵主、
年六十六、
女子
嫁三原次郎左衛門尉重貞、離別之後、早世、
○母同前、
久憲
乙萬　勝次郎　舍人助　丹波守
○文禄元年壬辰七月十五日誕生、母同前、
○寛永十七年、補日州勝岡之地頭職、
○寛文八年戊申十月十三日死、法名晧山普明庵主、
年七十七、
久信
休五郎
○母同前、
○嚴親久正爲圖書助忠道之後嗣、未有祖父川上九郎左衛門久光之後嗣、故使久信連續夫跡也、

久治
萬鶴　舍人　五郎兵衛
○慶長十七年壬子正月二十二日誕生、母指宿壹岐守女也、
○正保元年、補日州勝岡之地頭職、
○明暦元年、久治任御使役（今改御用人）、
○寛文二年六月十四日、轉勝岡賜日州倉岡之地頭職、
○同五年正月二十一日、轉倉岡賜隅州串良之地頭職、
○同十年庚戌六月十五日死、法名壽山隣松庵主、
年五十九、
女子
平田民部左衛門宗眞妻、
○母同前、
久甫

初久映　萬鶴　勝兵衛　七郎右衛門　次兵衛

○寛永十年癸酉十二月三日誕生、母桑幡左馬道好女也、

○寛文八年九月十九日、勤旅御使役、同十年八月五日、爲御使役、補隅州串良之地頭職、

○元禄四年辛未十月二十八日死、法名一林高秀居士、年五十九、

純昌

萬龜　舍人　新右衛門

○寛永十八年辛巳七月二十九日誕生、母同前、

○爲有馬勘左衛門純廣之養子、

祐養

萬菊　彌五右衛門

○正保三年丙戌二月二十二日誕生、母同前、

○爲伊東三左衛門祐治之養子、

女子

諏方甚兵衛兼武妻、

○母同前、

譽張

初久堅　中久金　萬鶴　舍人　七郎右衛門五郎兵衛

○明暦二年丙申四月八日誕生、母吉田次郎兵衛廣清女也、

○任奏者番役、

女子

大山權左衛門廣安妻、

○母同前、

純茂

萬壽　次郎八

○寛文十二年壬子二月二日誕生、母同前、

○爲有馬新右衛門純昌之養子、

久富

辰之丞　三次　七左衛門　久馬右衛門

○延寶三年乙卯六月十日誕生、母同前、

○爲平山久馬久行之養子、

女子
若松平八久寧妻、
○母穎娃右京久友女也、

萬鶴
○延寶四年丙辰八月二十五日誕生、母伊勢平右衛門貞寄女也、
○天和二年壬戌八月十日早世、

德千代
○元禄五年壬申六月四日誕生、母春山清左衛門直明女也、
○同十年丁丑九月二十五日早世、

譽貞
初久貞　袈裟壽　次兵衛
○元禄十二年乙卯十二月朔日誕生、母同前、
○此家代々至始及家督等之時、拜謁于　太守公、則奉獻御太刀、且勤小番、是家例也、

譽昌
初久武　休次郎
○元禄十四年辛巳正月二十四日誕生、母同前、

女子
○母同前、早世、

女子
○母同前、

女子
○母澤養雲女也、
○爲市來助左衛門妻、離別之後嫁比志島監物義之、

久守
千代萬　吉兵衛　久右衛門　入道名紹嘉、
○慶長十五年庚戌三月十三日誕生、母同前、補隅州國府之地頭職、
○承應二年、補御使役、
○寛文六年、轉國府賜日州高原之地頭職、
○元禄三年庚午七月十四日死、法名非物了然居士、

家賀

萬千代　次十郎

○寛永五年戊辰七月七日誕生、母同前、

○市來助左衛門死去而無世子、故爲後嗣也、

女子

和田十助妻、他腹、

女子

東郷藤兵衛重利妻、

○母仁禮藏人頼尊女也、

久則

千代萬　十郎　吉兵衛　休右衛門　十郎右衛門

○寛永七年庚午正月朔日誕生、母仁禮藏人頼尊女也、

○任吟味役、

○延寶六年十二月二十一日、補薩州百次之地頭職、

○貞享元年十月二日、轉補眞幸吉田之地頭職、

○貞享五年二月二十三日、轉眞幸吉田、賜日州高原之地頭職、

○寶永二年乙酉二月十二日死、法名竺心鷲峯居士、

忠包

初久寛　久包　乙千代　十郎兵衛　次右衛門

○寛永九年壬申二月十七日誕生、母同前、

○姶良三郎兵衛尉忠種依無世子爲猶子、

祐幾

豐千代　伊左衛門

○寛永十一年甲戌二月三日誕生、母同前、

○伊尻伊賀守祐盛死去而無世子、其跡久斷絶矣、故正保四年丁亥、依　太守公之命、爲彼家後嗣也、

女子

桂木工助忠保妻、

○母同前、

女子

先嫁町田源左衛門久季、而後爲村田五郎左衛門經貞妻、

○母仁禮主計頼光女也、

久尚

千代萬　吉左衛門　吉兵衛　休右衛門

○承應二年癸巳四月二日誕生、母同前、

○寶永六年己丑十一月十七日死、法名豪山全英居士、

直房

初久增　久治　兵十郎　休左衛門

○萬治二年己亥六月十二日誕生、母同前、

○爲佐多六右衛門忠貫之養子、

女子

初嫁仁禮小吉賴常、而後爲岩切彦兵衛英信妻、

○母福屋助左衛門兼全女也、

譽長

初久通　千代萬　吉左衛門　休兵衛　休右衛門

○延寶七年己未六月二十一日誕生、母同前、

○此家代代至始及家督等之儀、拜謁于　太守公、則奉獻御太刀、且勤小番、是家例也、

○此家避久忠之字、以譽字可爲實名字、家嫡右衛門久致受　命傳之、故用譽字、

友貞

初久重　兼慶　千代德　五郎兵衛　助左衛門

平太夫

○天和元年辛酉十月十三日誕生、母同前、

○初爲福屋助左衛門兼貞之猶子、辭夫家之後爲國分仲左衛門友清之猶子、

好延

源助　半兵衛

○元禄八年乙亥五月二十六日誕生、母伊瀨知半左衛門好長女也、

○伊瀨知半左衛門好典依無世子爲猶子、

譽香

初久芳　千代萬　十郎右衛門

○元禄十三年庚辰六月四日誕生、母伊東仁右衛門祐秋女也、

女子

○母同前、